
知っていますか？-世界の真実-

AKI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知っていますか？ - 世界の真実 -

【Nコード】

N5621V

【作者名】

AKI

【あらすじ】

中学生になり、新たな生活を楽しむ「黒衣マト」は、中学校生活初めての友達「小鳥遊ヨミ」と仲良くなり学校生活を楽しんでいた。

そんなマトに、これまでの日常が一変する出来事がおこる。

序章（前書き）

文才は全くありません！

なので暖かい目で見てください！

序章

平行世界は数多く存在する。

ある世界は何もない日常

ある世界は異質な空間であつたり

ある世界は崩壊しかけていたり

ある世界は同じ時を繰り返していたり

ある世界は遠い未来の話であつたり

ある世界は神が下界で存在してたり

ある世界は昔の話であつたり

様々な平行世界が存在します。

今から始まる物語も数多く存在する平行世界の一つに過ぎません。

そのことを最初に言っておきましょう。

ゝ 私は平行世界の管理者
ゝ

では

最初の物語を始めます

序章（後書き）

今回はプロローグなので短いし、原作キャラも出てきません！

次回は本編なので原作キャラ出す予定です。

誤字・脱字があったら指摘宜しくお願いします

感想もお待ちしております

新しい生活（前書き）

本編です。

駄文ですみません。

新しい生活

~~~~~シ~~~~~シ~~~~~

携帯を手に取り、セットしていたアラームを解除する。

4月7日

「……フフ」

その日付を見て、つい顔をにやけてしまう。

「ん……んんんん——っ！……ふはあっ！」

布団から勢い良く出て自分の部屋の窓を開ける。

そこからは街が一望できる。

とはいっても、この景色なんかより、もっとすごい絶景スポット知ってるけどね。

「すうー——っ、はぁー——」

一つ深呼吸をする。

いい加減ベッドから降りて、キッチンに向かう。

部屋から出ようとしてドアを開けるが、あるものが目に入る。

それはセーラー服だ。

それを見て、また顔をにやけてしまう。

部屋から出て階段を降りる。

キッチンに着いたあたしは食パンをトースターにセットして、その間に歯を磨く。

「あら？今日は偉く早起きね」

「うん、へはまひよりしゃきにおきちゃった（目覚ましより先に起きちゃった）」

お母さんが来たので理由を説明する。

「ずっとその調子だといいいんだけどねー」

うつ！痛いところを…！

とりあえず苦笑いでごまかす。

確かに、あたしが今日早起きなのは理由がある。

歯を磨き終わったのでキッチンに戻ると、丁度トースターにセット

していた食パンが焼けたので、取ろうとしたらかなり熱かった。

食パンを皿に置いてバターを塗っていると、料理をしながらお母さんが…

「マター」

「ん？」

「食べたらヒロ君起こして来て」

「えええー！？ヤダー！

起こして起きた試し無いんだもん」

ヒロ君というのはあたしの弟だ。

あたしが嫌そうな態度をとっていると…

「お姉ちゃん」

お母さんがこう呼ぶ。

この言い方は『お願い』って意味だ。

何を言っても意味がなさそうなので、これ以上は何も言わなかった。

「いちそうさま」

パンだけど  
ご飯を食べた後、ヒロ君の部屋に向かう

ガチャ

そしてドアを開けて…

「朝だよー！新学期だよー！起きなさい！」

と声を大にして言ってみたけど、ヒロ君は布団にくるまったまま動かない。

（爆睡中だな、こいつ）

「寝過ごしても知らないよー？  
お姉ちゃん起こしたからね」

舌を出してべえとする。

意味が無いのはわかっているけど、とりあえず気分で。

あたしはさつさと自分の部屋に戻り、セーラー服に着替える。  
髪型もセットして身だしなみを整え、鏡でチェックする。

（うん！完璧！）

今日は中学校の入学式なのだ。  
つまり、あたしの新しい生活が始まるのだ！

あたしはワクワクしながらバックを肩にかけて、ベッドに置いた携帯を取る。

そして部屋から出ようとしたが、鏡の前で髪型を最終チェックする。

「よし！」

玄関で靴を履いていると…

「あら？」

お母さんに声を掛けられた。

「もう行くの？」

「うん、ちょっとだけ寄りたいたところがあるんだ」

「そう、入学式出られなくてごめんね」

「いって、気にしないで」

そんなお母さんにあたしは…

「では！行つて参ります！」

ビシッと敬礼し、玄関を出た。

あたしが寄りたいと言つていたところは、とある公園。  
その公園は街の高い場所にあるので、来るのに一苦労だ。  
何でここに来たのかというと、ここは…

「わああ…！」

ここから見る景色は絶景なのだ。  
街全体を見渡せるこの景色は何回見てもきれいだ。

「すう——っ、はぁ——」

深呼吸をしてみる。

この場所は空気も美味しいような気がするな。

あ！そうだ！

携帯で写真撮っておこう。

カシヤッ

データフォルダに保存していると、時間が結構ヤバいことに気づいた。

「うおー！電車、電車！」

急いで階段をかけ降りて坂を下る。

そして駅に突入してなんとか電車に間に合った。

ふーっ、ヤバかった。

しばらく呼吸を整えると、良く見たらあたしと同じ中学のセーラー服の人がいっぱいいた。

さつき走ったから見た目ヤバいかなと思い、電車の窓を鏡代わりにして身だしなみを整える。

電車を降りてしばらく歩くと、ついに校門前に来た。

緊張しながら辺りを見回していると、何やら一台の車が校門前に止まった。

中から出て来たのはセーラー服の女性。

車は見る限り高級車だし、車で登校って、もしかしたらお金持ち!?

など思いながらガン見していると不意に目が合った。

戸惑っているうちにその女性は校門の中に入って行ってしまった。

気づくとあたしは校門の前でボーッと突っ立っている変な人になっていた。

「うわあああ……／＼／＼／」

今頃になってかなり恥ずかしかった！

でも気にせずあたしは校舎内に向かう

恥ずかしさなんかより、中学校生活に対する期待のほうが大きかつ

たからだ。

正面玄関に貼ってあったクラス表をもとに、自分のクラスの教室に入る。

（あれ？あの人って…）

その教室にはさつき校門の前にいたお金持ちっぽい女性がいたのだ。

とりあえず席に座り、新担任の先生の話を聞き流しながら、さつきの女性の席を確認してた。

さつきもらった座席表のプリントをもとに、名字を知ろうとしたのだ。

すると、その名字が…

「小鳥…遊…？」

今日一番にダルいイベント、入学式、が終わり、あたし達生徒はそれぞれの教室に向かっていた。

前のほうには『小鳥遊』さんが歩いていった。

やはり気になる『小鳥遊』

ふーむ…

「……………うん！」

意を決心して話し掛けることにした。

「あの！」

『小鳥遊』さんは急に話し掛けられてビックリしたのか身を引かせて…

「……………何…？」

「あああ、ええと…」

そういえば特に話題を用意してなかった！失敗した！

「えと、えーと……そ、そうだ！」

「……？」

「背！」

「せ？」

「背高いね！いいな〜！」

とりあえずファーストコンタクトは相手を褒めよう！

これなら大丈夫だ！

っと思っただけ…

「……………そう」

あまり手応えはなかった。

でも手応えは問題じゃない。話し掛けたのが重要なんだよ！

あたしは先に行ってしまった『小鳥遊』さんを追いかける。

「そつえばさっき、車で来てたの見たよ！

そんな人、本当にいるんだって感動しちゃった！」

「…私はいいつて言ったんだけど、どうしてもってお父さんがだから今日だけ」

「家近くなの？」

「うっん、街波町」

「えええー！？それ家の近所！」

「そうなの？」

「うん、あたし木幡駅から電車で来てるんだよ」

「へえ…」

うん、なんだか上手くいった！

「じゃあ、ご近所…なのね」

私も、明日からはその駅から電車通学なのよ」

「そうなんだ！ねえでもさ、小学校はどこだったの？」

「この辺りではないの」

この前引っ越して来たばかりだから」

「ああ！それでか！」

「何が？」

「『ことりあそび』なんて、珍しい名字の家が近くにあったら絶対覚えてるはずだもん！」

これで納得がいった。

「…フフッ！」

「ん？」

なぜか『小鳥遊』さんは笑っていた。

「……かなし」

「え？」

「『たかなし』って読むの小鳥遊って書いて」

「へえええー！？」

何でそれで『たかなし』？」

「小鳥が遊んでいるような所には、鷹がないから」

「へえー！なるほどね！」

いい名前だね」

うーん、でも

「普通、読めないよ」

「フフッ…私もそう思う」

ふーむ、たかなし、たかなし…

「小鳥遊ヨミ」

「え？」

「フルネーム／／／」

振り返ると満面の笑みで小鳥遊さんはフルネームを覚えてくれた。  
じゃあ、あたしも

「あたし、黒衣マト！」

マトでいいよ！」

「マト…いい名前」

「ははは、ありがとう／／／」

あたしはなんだか気恥ずかしくなつて廊下を歩く。  
入学式早々、友達ができて良かったー。

「あ……マト…ちゃん」

「ん？」

「ここ、私達の教室」

気づけば教室に着いていた。

「ああ！そつかそつか！  
……フフッ！」

「ねえ、引つ越す前はどこに住んでたの？」

「ドイツ」

「へえええー！あ！帰国子女って言うんだよね？そういうの  
へえー、すごい！

じゃあドイツ語とか喋れるの？」

「ドイツにいたのは少しだけだから、ちょっとだけよ？」

「えー！聞かせて聞かせて！」

そんな感じであたし達の中学校生活が始まった。

## 新しい生活（後書き）

誤字・脱字がありましたら指摘宜しくお願いします。

感想お待ちしております。

## 友達（前書き）

第三話です。

暖かい目で読んでください。

## 友達

入学式が終わった後は、教室で軽くホームルームがあるだけで学校は早めに終わった。

あたしはすぐさまヨミの席に行く。

「ヨミは今日、帰りは車？」

「うん、多分もう来ると思う」

教室から出て歩きながら会話する。

「でも明日からは普通に登下校するんだよね？」

「うん」

「じゃあ明日から一緒に学校行こうよ！  
家近くなんだしさ」

「うん、いいわよ」

その後待ち合わせ場所とか、時間とかについて話していたらもう玄関に来ていた。靴を履いて外に出て歩いたらすぐに校門だ。

「じゃあまた明日ね」

「うん、また明日」

ヨミと別れてあたしは駅に向かう。

その夜

「マト、学校どうだった？」

「うん、ちょっと不安だったけど、大丈夫だった」

晩御飯を食べている時にお母さんに聞かれた。

「お母さん！そっいえばあたし友達できたんだよ！」

「へえー、すごいじゃない」

「うん！」

でね、その娘うちの近所なんだよ  
小鳥遊って書いて『たかなし』って読むんだけど、お母さん知ってる？」

お母さんはあたしより近所のこと知ってるとは思っけど。

「小鳥遊……ああ、たしかこの辺に引っ越して来たわね」

「でね、明日から一緒に学校行くんだー」

「そう、じゃあこれからは毎日早起きしないとね」

そ、そうだった。あたしが寝坊して約束破ったら台無しだもんね。

「ぜ、善処します」

\*\*\*

暗い世界に、ある少女がいた。

彼女の身体は傷付いていて歩くのもやっとだ。

「……早く、何とかしないと」

少女はそう呟き、また歩く。  
まるで、何かを探すように。

\*\*\*

ある朝

あたしは家から出てヨミとの待ち合わせ場所に行く。  
そこには既にヨミが待っていた。

「おはよう!」

「おはよう」

そして、駅に向かい歩きながら話す。

「また待たせちゃった？」

「ううん、私も今来たところ」

「今日は寄り道もせずに来たんだけどなあ」

「フフッ」

「というか、寄り道しないのが普通だよな。」

「あ！そういえば部活決めた？」

「うーん、まだ悩んでる  
マトは？」

「バスケ部

前から中学入ったらバスケやろうって決めてたんだー」

「そうなんだあ」

「うん！ヨミもバスケにしたら？」

「うーん」

「背、高いんだし！」

「……………それ、コンプレックスなの」

「え？」

「背の高さ」

「んー、羨ましいけどなあ  
あたしは背が低いから『バスケット始めたら伸びるかも』って思ったのが理由の一つなんだあ」

「？、じゃあまだあるんだ」

「何が？」

「理由」

「えへへ、まあねー♪  
でも大した理由じゃないし」

「ええ、教えなよお」

「えええ？えへへ♪」

学校の休み時間にあたしはヨミに聞きたいことがあった。

「ヨミの得意科目って何？  
やっぱり英語？」

帰国子女だから、やっぱり…。

「そうでもないよ、ドイツ語とは全然違うし」

「ふーん」

てつきりドイツ語みたいに、英語もペラペラかと思ったけど。

「得意って程じゃあないけど、数学はちょっと好きかも」

衝撃だった。数学なんてあたしには理解出来ない。

「数学が好きな人って本当にいるんだあ」

「マトは？どの教科が得意なの？」

「それはね……」

「？」

「これから見つけるんだあ！

今は一番の体育以外、全教科横一線！」

そう言うとヨミは「クスッ」っと笑う。あたしもそれに合わせて笑った。

【SIDE 小鳥遊ヨミ】

放課後になってマトがバスケット部に仮入部すると言った。

私も「一緒にやろうよ！」と誘われたけど、とりあえず保留にして

おいた。

運動あまりしてなかったし、不安だったのかもしれない。

このまま入る部活決まらなかったらバスケットに入ろうかな、マトもいるし。

体育館に着いてマトはバスケットに仮入部して私はそれを見学する形となった。

マト、バスケ上手ね。動きも素早いし、何回かシュート入れてるし。バスケットの先輩にも誉められていた。

すると私は体育館のもう半分で行っているバレー部が気になった。

\*\*\*

暗い世界で少女は歩いていた。

黒髪で長いツインテール。黒のロングコートを身にまとっている。

「動けるようにはなったが、このままでは消滅は免れないか」

彼女はそう呟き、また歩き出す。

\*  
\*  
\*

【SIDE 小鳥遊ヨミ】

私は休み時間に、次の英語の授業の予習をしていた。

すると

「ヨミヨミ」

マトが後ろから抱きついてきた。

「それあたしにも写させてえー」

「次、あたし当たりそうな列にいるからさあ」

そう懇願するマトに私は「自分でやらなきゃ、身につかないよ?」  
と言った。

「……うん」

そう落ち込むマトに私は仕方ないながら問題集を見せる。  
するとマトは喜んで…

「あああん！ヨミい！愛してるよぉ！」

「ちょっ…止めなって、くすぐりたい」

と言いながら更にくつついてきた。

# 【SIDE 黒衣マト】

あたしはヨミの机で問題集を写す。

「ねえ、マト」

「んー？」

あたしは写しながら返事をする。

「私、入る部決めた」

「え？」

「バスケット部ではないけれど、まあ似たようなものよ」

バスケット部ではないけど、似たような部活？

あたしは少し考えてみたけど、鐘がなったので問題集を写すのに集中した。

でもなんだろう、ヨミが入る部活って。

その答えは放課後になってわかった。

あたしがバスケットをしていると、サーブを決めるヨミの姿を見た。

ヨミが入ったのはバレー部だった。バレー部はバスケットと体育館のスペース半分にして使っているため、仕切りのネット越しにヨミの姿が見える。

確かに、これなら部活が別でも近くにいられるね。

するとヨミはあたしの視線に気付いたのか、こっちを向いて微笑ん

でくる。だからあたしも笑って返した。

\*\*\*

彼女は歩く、暗い世界を。

「！」

彼女は何かに気付いた。

そして彼女は遥か彼方の方向を見る。

「……まさかっ！」

彼女は走りだす。その方向に向かって。

\*\*\*

あたしは学校の中庭にあるベンチに座りながら携帯を弄る。

ヨミとは部活が終わったらここで待ち合わせしている。

「お待たせ」

「おお！お疲れ！」

ヨミが来たので、あたしは立ち上がる。

「今日どっか寄って行く?」

「うん、いいよ」

そして、あたし達は寄り道をしていく。

そしてコンビニで買ったジュースを飲みながらあたしは弟の愚痴を言う。

するとヨミは「お姉ちゃんんだから仕方ないんじゃない?」と云ってくる。

「ヨミまでお母さんみたいなこと言わないでよお」

「フフフッ」

。。。。。。。。。。。。。。。...

「あ」

するとヨミの携帯が鳴った。

「ああ、家からだ  
ちよつとごめんね?」

「うん」

あたしがそう答えるとヨミが電話をする。

「もしもし？うん、お母さん……大丈夫……うん……今？マトと一緒……」

あたしは最初のほうこそ聞いていたけど、途中からやめた。お母さんからだし、心配して掛けてきただけでしょ。

そして、ヨミが電話を切った後にあたし達は近くのアクセサリーショップに行った。

そこにはきれいなアクセサリーや、可愛いアクセサリーなど、色々な物が売っていた。

そしてヨミが他の物を見ている間に、あたしはある物を見つけた。

その後は地元の町に帰って来たんだけど、あたしは帰る前にある場所に行きたかった。

だからヨミに「まだ時間大丈夫？」と聞いた。

「大丈夫だけど？」

「連れて行きたい所があるんだあ  
いいかな？」

「うん」

あたしは「こっち！」と前方に指を指しながら走る。

「こっちこっち！」

「ちょっと待ってえ」

そんなやり取りをしながら、あたし達はある場所に向かった。

\*\*\*

「やはりか……」

彼女が向かった場所には巨大なクレーターが出来ていた。

しばらくクレーターを見ていた彼女だが、やがて意を決したような表情になった。

そして次の瞬間、彼女の身体は青い光に包まれる。

そして光が消えると、彼女も消えていた。

\*\*\*

「ここだよー！ほらー！」

あたし達は高台の公園にやって来た。

あたしが知っている絶景の場所。

入学式の日の朝にも来た、あの場所だ。

「ああー……」

ヨミはそこから見える夕日と町並みを見ていた。

「あたしが一番好きな所なんだ

ここに立って町を見てると、なんだか元気を貰えるような気がするんだよ

見晴らしが良いだけじゃなくて、うーん……説明しにくいなあけど、なんとなく？」

「うん、わかるよ」

あたし達は二人並んで景色を見る。

「マトはこの町が好きなのね」

「うん、大好き

あたしが生まれて育った所だもんね」

「……羨ましい」

「ん？」

あたしはヨミを見る。

「私は小さい頃から引越してばかりだった」

そんなヨミの横顔はなんだか寂しそうだった。

「もうずっと、ここにいなよ

ヨミがいなくなるのは嫌だよ」

するとヨミはあたしのほうを向いて微笑む。

「……そうね  
そうしたい」

そんなヨミを見てあたしはある物を思い出した。  
スカートのポケットに入れといたそれを取り出す。

「これ、あげる」

それは星の付いた青いストラップだった。

「これ……」

ヨミはストラップを見る。

「可愛いでしょう？」

さっきのお店で買ったんだ」

「貰っていいの？」

「うん！」

あたしはヨミの手のひらにストラップを置く。

「だってほら、ヨミの携帯って何も付けてないでしょ？  
携帯も寂しがってるよ」

ヨミは嬉しそうに手のひらのストラップを見る。

「ほら、あたしはこんなの付けてるんだあ」

そう言っただけであたしは自分の携帯に付けているストラップを見せる。  
形は若干違うものの星が付いた青いストラップだ。

「お気に入りなの？」

するとヨミは手のひらのストラップを大事そうに両手で持って

「ありがとう」

大切にする！」

「うん！」

その後、あたし達は笑い合った。

この時のあたしは、この場所でもない出来事が起こるなんて  
思ってもみなかった。

## 友達（後書き）

次回からオリジナル（？）の展開です。

誤字・脱字があれば指摘を。

感想、お待ちしております。

## 失踪（前書き）

A K I

「みなさんこんにちは、A K Iです」

B R S

「…ブラックロックシューターだ」

A K I

「今回は第四話『失踪』です！

今までの平和な学園生活が急変します！」

B R S

「…それはさておき、なんだこの状況は？」

A K I

「この状況って？」

B R S

「このやり取りのことだよ」

A K I

「ああこれ？

これは面白味がない前書き・後書きを彩るために考えたコーナーなのだ！」

B R S

「…説明になってないぞ」

A K I

「それでは第四話どうぞ！」

B R S

「…聞いてないし」

## 失踪

ヨミにストラップをプレゼントして数日後。

あたしは部活が終わったら待ち合わせ場所の中庭で、ヨミを待っていた。

しかし、ヨミはなかなか来ない。

「ヨミ、遅いなあ……」

バレー部の練習が長引いているのだろうか。

体育館に行ってバレー部の先輩にヨミのことを聞いた。

「あれ？聞いてないの？」

「？」

「今日は用があるって、早めに帰っちゃったよ？」

「え？」

ヨミが帰った？

「ヨミがあなたに言ってないなんて、よっぽど急いでたんじゃない？」

あたしは驚いていた。

ヨミがあたしに何も言わずに先に帰ったなんて。

「そんな顔似合わないわよお？」

「え？あ、はい」

あたしは啞然としていた。

「お疲れ」

「お疲れ様です」

バレエ部の先輩に挨拶してあたしは帰路につく。

あたしは帰りながらヨミにメールしようとしていたんだけど、結局送れなかった。

忙しいならメールしないほうがいいのではないか？

そうではない。

あたしは怖かったのだ。

もしかしたら、あたしはヨミに嫌われるようなことをしていたのかもしれないと。

家に帰って着替えた後、あたしはベッドに横になりながら携帯の画面を見てた。

「……………っ！」

あたしは意を決してヨミにメールを打つ。

【今日はどうしたの？

何も言ってくれなかった

から心配だよ〜

でも気にしないから平気

また明日ね！】

あたしはメールを送信する。そしてまたベッドに横になる。

部屋の扉が開く音がする。

「姉ちゃん、晩飯」

弟のヒロだった。

「今行く」

そして扉が閉まる音。

「はあ……」

あたしは溜め息を吐く。

そしてまた携帯の画面を見る。

晩御飯を食べている時も、お風呂に入っている時も、寝る前にも、あたしはずっと携帯ばかり気にしていた。

ヨミから返信が来るのを待っていたのだ。

でも一向に返信が来ない。

ヨミ、どうしたんだろう。

翌日

あたしは早く起きていつもの待ち合わせ場所に来た。

でもヨミはいつまで待っていても来なかった。

あたしは仕方がないので、電車の中でヨミに【おはよう】とメールした。

学校に着いて教室に来たけど、ヨミはいなかった。

ヨミは今日、学校に来なかった。

放課後、あたしは教室にいてぼーっとしていた。

「!?!」

すると携帯が震える。

ヨミかと思ってあたしは携帯を取る。  
しかし、メールはお母さんからだった。

あたしはメールを見る。

「え!？」

その内容が

ヨミが行方不明になり、家に警察が来ているので早く帰って来なさいという内容だった。

あたしは教室を飛び出して、急いで帰宅する。

そして家に着くと玄関には見知らぬ靴が置いてあった。

「おかえり」

「ただいま」

お母さんがやって来て

「中で刑事さんが待ってらっしゃるから」

リビングで刑事さんが説明する。

内容はヨミが行方不明になったこと。  
いなくなったのは昨日の夜。

刑事さんは何らかの事件に巻き込まれたのか、ただの家出なのかどちらとも判断出来ないと言った。

あたしは…

「ヨミが…、ヨミが家出なんてするはずありません…」

刑事さんは、ヨミの両親も同じことを言っていたと言う。

刑事さんは

「しかし、万が一ということもある

君は、ヨミさんと一番仲が良い友達だと伺った

行き先、動機、何でもいい、思い当たることはないだろうか？」

あたしは認めたくなかった。

ヨミが行方不明なんて。

ヨミとはすぐに会えると思っていたのに……。

また一緒に登校できると思っていたのに……。

「……マト」

お母さんが声をかけてくる。

「……昨日は……ヨミは……いつもは一緒に帰るのに……いなくて……  
急用で帰っちゃったって……バレー部の人が……」

あたしは我慢が出来ず、涙をこぼしてしまう。

「メールを送ったのに……帰って来なくて」

あたしはたまらず、泣いてしまった。

翌日

学校ではヨミの行方不明の噂が流れていた。  
しかも、話題にしているだけなので最終的には笑い話にされる。  
聞いているだけで心が痛くなる。

あたしはなるべく噂話を聞かないようにして過ごした。  
授業も頭に入らず、ぼーっとしていた。

放課後になって、あたしは教室から出ようとしたけど、その前にヨミの席を見る。

「黒衣さん？」

「え？」

「大丈夫？」

同じクラスの娘に心配された。

教室の扉でぼーっとしていたら、誰だって心配するだろう。

「うん、大丈夫だよ」

あたしがこう言つとその娘は「そう」と答えた。

「あたしも、ヨミとはバレエ部で仲がいいんだよ」

「え？」

あたしは驚いた。

特にヨミと仲がいいというところに。

「…と言つても、黒衣さんほどじゃあないけどね」

「そ、そうなんだ」

「うん、だからあたしも正直に言つとかなり心配してる

でも、ヨミが帰って来た時に暗い顔でいたら逆に心配させちゃうで  
しょ？」

だからあたしはヨミが帰って来るのを信じて元気に振る舞っている  
んだ」

「そうなんだ」

「だから黒衣さんも元気出しな！ヨミなら絶対大丈夫だよ！」

「うん、ありがとう」

「うん！それじゃあね！」

その娘が通りすぎて教室から出て行った。

「…………ヨミ」

あたしはそう呟いた。

その日の夜は帰ってから着替えたのは良いものの、ご飯を食べてからはずっとベッドで横になっていたため、いつの間にか寝てしまった。

そして早朝

あたしは携帯が反応したので起きて確認する。

すると、メールの相手は…

【ヨミ】

「っ…！」

ヨミ…！？」

あたしは飛び起きてメールの内容を確認する。

しかし、それは何も書かれていない空メールだった。

あたしはすぐさまヨミに電話する。

でも繋がらなかった。

「どっいつこと？」

ヨミ」

ある考えが頭に浮かぶ。

あたしは急いで部屋を出た。

玄関で靴を履いていたら、お母さんが起きてきて「マト？どこ行くの？」と聞いて来たのであたしは

「ヨミのそこっ！！」

っと言って外に出た。

自転車を漕いで坂を登る。

来たのは高台の公園。

あたしが一番好きな所で、ヨミとの思い出の場所。

階段をかけ登り、あの場所に着いたが、

そこにヨミはいなかった。

膝を落とし、軽い絶望感を味わいながら呼吸を整える。

「ん！？」

あたしは何かが落ちているのに気付いて拾いに行く。

それはヨミにプレゼントしたストラップだった。

あたしはそれを両手で握りしめる。

「エエ...どう?...どうしているの...?」

握りしめた両手を胸に当てる。

「え?」

すると握りしめていた両手が光だした。

手を開いて見ると、ストラップが青い光を放っていた。

「っ!!!?!」

そして次の瞬間、あたしの身体は青い光で包まれる。

あたしは目を覚ます。

「え？」

そこは何もない白い空間。

地面と呼ぶものも無いため、あたしは浮いてるような体勢になった。

まるで白い宇宙だ。

あたしは何がなんだかわからず、辺りを見渡していると

「あの娘を助きたい？」

と言う声がした。

あたしはその声がするほうに目を向ける。

そこにいたのはある女性だった。

黒髪の長いツインテールで、服は黒いロングコートを身にまとい、黒いブーツを履いている。

その娘はあたしに

『あなたが大切に思う人  
あなたを大切に思っている人』

あたしはそれを聞いてヨミが思い浮かぶ

「...ヨミのこと？」

「...ヨミ...どこにいるの？」

その娘は何も言わない。

あたしはその娘に

「助けたいとかじゃない  
」

あたしが

「また一緒に歩きだしたい！」

今思っている

「また一緒に、笑い合いたい！」

この願いを

「今すぐ、ヨミに会いたいっ!!」

伝えた。

あたしの身体は再び青い光に包まれる。

『そう』

その娘はあたしの側に降りてくる。

近くで見ると、その娘はあたしに似ていた。

あたしはその娘に

「あなたは誰？」

……誰なの？…あなたは」

名前を訪ねる。

『…私は』

二人の身体が一つに重なる。

『「私は」』

そして

『ブラックロックシューター』

彼女はそう答えた。



## 失踪（後書き）

AKI

「ブラックロックシューター本格参戦です！」

BRS

「かなり早くないか？」

AKI

「そうだね

本当はヨミが行方不明になるのはマト達が二年生になってからだけで、それだと君の出番がかなり先になっちゃうからね」

BRS

「まあ仕方ないな」

AKI

「という訳で次回は第五話『裏月』です！」

BRS

「…また次回」

裏月（前書き）

A K I

「ということで第五話です！裏世界に突入です！」

B R S

「そうだな、しかし今回は酷い話だな」

A K I

「何が？」

B R S

「…かなり描写不足だろう」

A K I

「うつ…痛いところを」

## 裏月

気がつくときあたしは見知らぬ場所にいた。

辺りは見渡す限り暗い荒野で、その他には何もない。

『ここは、どこなの？』

あたしは何がなんだかわからなかった。

「気がついたか」

すると自分の口から声が出る。

あたしは更に混乱する。

動揺しようとも何故か身体が動かせない。

まるで金縛りのようにだ。

「…今は私がこの身体を使っている  
お前はせいぜいあたしの視覚、聴覚を頼りに状況を把握することしか出来ない」

『どついつことっ』

「お前は私で、私はお前だ  
端的に言つとだ」

『えーっと、つまり一つの身体を二人で共有してるってこと？』

「そついうことだ」

『じゃあ、えーっと…ブラックロックシューターさんだっけ？  
長い名前だね』

「別に好きなように呼べばいい」

『じゃあ！ブラック…だと可愛くないから……日本語にして、ク  
ロで』

「別に構わないが」

『じゃあクロ、二つ目の質問なんだけど  
ここは一体どこなの？』

最初から気になっていたことを聞く。

「ここはお前の知っている世界とは違う世界  
裏世界と言ったところか」

『裏世界？』

「あくまでも例えだ」

確かにクロの言う通り、ここはあたしの知っている世界じゃない。

『ここにヨミがいるの？』

「ああ」

『じゃあ三つ目の質問』

「何だ」

『腕に付いてるこれ何?』

クロの身体の左腕には黒い大砲のようなものが付いていた。

「これは、ブラッククロックキャノン  
私が使う武器の一つだ」

『武器……って、ヨミを探すんでしょ?  
武器なんか必要なの?』

別に誰かと戦う訳じゃないんだから。

でもクロはこう言った

「…多分な」

あたし達は工事現場にあるような鉄骨の柱に立っていた。

『こんな広いところでヨミを見つけることができるの?』

あたしはクロに疑問を問いかける。

「大丈夫だ

奴の力の波動を感じる方向に向かえば問題ない  
24時間以内にはたどり着く」

その言い方はまるで敵のオーラを感じているみたいだ。

『ねえ、クロ？』

ヨミは一体どんな状況に置かれているの？』

左腕の武器、さっきの言い方。

とてもヨミを探すだけとは思えない。

「あの娘は今、敵に身体を利用されてる」

『利用？』

「そうだ

今の私とお前のように

ただ違う点は共有というより、身体を一方的に乗っ取っているということだ」

『そんなっ！』

酷いと思った。

『ヨミの身体を乗っ取っているのは何なの？』

「ゝ黒き使徒ゝと呼ばれる存在の一つだ」

『ゝ黒き使徒ゝ？』

「そうだ

黒き使徒は知能が低く、ただ破壊することしか能がない」

『そんな奴が何でヨミの身体を乗っ取るの？』

「それは黒き使徒は寿命が短いからだ」

『え？』

「黒き使徒はかなり短い期間しか生きることができない  
その為、人間の身体を利用することで消滅することを避けるんだ  
使えなくなったらまた別の人間の身体を利用すればいいだけだし」

『そんな……人間を何だと思ってるの！？』

あたしは怒りが込み上げてくる。

「奴らにとってはただの道具、もしくは破壊の対象としか思っていない」

『どうやったらヨミを助けられるの？』

「あの娘に取り付いている黒き使徒を倒すしかない」

クロはだいぶ歩いて何だか廃墟みたいなところに着いた。

その廃墟はまるで西洋の遺跡みたいだった。

そして廃墟を通り過ぎ、今度はロンドンにでもありそうな橋を渡って行く。

『ねえクロ？』

「何だ？」

歩きながらクロは答えてくれる。

『何だかここには人が住んでいたようなんだけど』

「……この世界も、元々はお前達の世界と変わらない人々が平和に暮らしていたんだ」

『…そうなんだ』

あたしはそれ以上は何も言わなかった。

橋を渡って行くと今度は十字架が大量に地面に刺さっている場所に着いた。

恐らく墓場だろう。

墓場を抜けると、再び何もない荒野に出た。

そして崖の上から辺りを見る。

空を見ると紅い月が出ていた。

『あたしにとってここは裏世界だから、この月は裏月って言うところかな』

「…そうだな」

あたしは独り言のつもりでいたんだけど、クロはそれに答えてくれた。

今思ったけど、クロって無愛想だけど質問とかに律儀に答えるあた

り、かなり良い人？

『…クス』

あたしはつい笑ってしまう。

「どうした？」

『いや、何でもないよ…フフ』

「…変な奴だなお前は」

『そうかな？』

「ああ、普通の人間だったらもっとパニックになってる筈だ」

確かに、普通ならそうかも知れないんだけどね。

でもあたしは…

『なんかね、少し楽しいかも』

「楽しい？」

『うん！』

「やっぱり変な奴だ  
…それともただの馬鹿か」

『馬鹿って言うなあー』

あたしはクロとそんな会話をしていると

「そろそろ着くぞ」

あたしはその言葉を聞いてハッとする。

『そうだ！あたしはヨミを助けに来たんだ！』

「忘れてたのかよ……」

『いや、だって』

奇想天外なことが立て続けに起きたから』

「…はあ」

クロはため息を吐く。

「じゃあ気持ちを切り替えて行けよ？」

『うん！』

クロは崖の上に立つ。

そこからは大きな城が見えた。

『あそこにヨミはいるの？』

「ああ」

でも城の周りは全部谷のようになっていて、橋など見当たらない。



気付いた時にはあたしはどっかの道を走っていた。

と言いかクロが走っていた。

『じいじは...?』

「!...気が付いたか」

『うん』

「まさか気絶するとは思ってなかった」

『いや、誰だっていきなり飛び降りられたら失神するよ』

「…そうか、すまなかった」

その声は落ち込んでいるように聞こえた。

『いや、別に謝らなくていいよ』

「そうか？」

『う、うん！むしろ覚悟を決めていなかったあたしが悪いし』

「そんなことないと思うが」

『と、とにかく！気にしなくて良いから！』

「そ、そうか」

あたしはここに断言する。

クロはかなり良い人！

『てか、さっきからどこを走っているの？』

「城に向かっているんだ」

『城に？』

「そうだ

城に向かう為には下からこの道を通って行くしかない」

『ああ！だからさっきからグルグル回ってるのかぁ！』

クロは崩れているところもジャンプしたりして先に進む。

そして遂に

『城の前まで来たね』

「ああ」

城の入り口の目の前に来た。

『ここにヨミが…』

「マト」

『え？』

あたしはクロに名前で呼ばれる。  
今思ったけど、初めて名前で呼ばれた。

あたしは若干照れ臭くなる。

「覚悟は出来てる？」

『…うん！』

そう、ヨミを助ける為にはヨミに取り付いている黒き使徒を倒さなくてはならない。

つまり、ヨミを傷付けるのだ。

でもそれは仕方ないことだ。

ここであたしが覚悟を決めないと、ヨミは助けられないから。

そんなあたしの覚悟を理解したかのようにクロは

「そうか」

そう言った。

城の入り口の扉を開ける。

すると中はまるで王宮のようだった。

そして奥にある玉座には

『！？ヨミ！』

そこにはヨミがいた。

しかしその頭には黒い角が生えていて、さらには手に鎌のような武器を持っている。

そしてヨミの左右にはドクロの顔のような物体が浮いていた。

どう見てもいつものヨミじゃない。

クロはそんなヨミの顔を睨みながら奥に向かって歩く。

そして大体の間合いを詰めるとクロはなんと

『…クロ？』

ヨミに手を差し伸べたのだ。

それは恐らくヨミの為に、あたしの為にした行動だろう。

しかしヨミはクロに攻撃を仕掛けたのだ。

ヨミの左右に浮いていたドクロがクロに襲いかかる。

クロは一つ目のドクロの突進をジャンプして回避するが、もう一つのドクロの突進を空中でもろに喰らってしまい地面に叩き落とされる。

『クロ！大丈夫！？』

あたしはクロのことを心配する。

「…大丈夫だ」

クロはそう言って立ち上がり、目を瞑る。

『クロ？』

クロは勢い良く目を開く。

すると左目から青い炎がでた。

恐らくこれがクロの戦闘モードなのだろう。

それを見ていたヨミはうつすら笑みを浮かべる。

クロはヨミに突撃する。

ヨミもそれに合わせて攻撃を仕掛けて来る。

間合いを詰めたので必然的に接近戦になる。

でもクロの武器は飛び道具なので、ヨミの鎌を防ぐことしか出来ない。

攻撃が一瞬止むと、クロは距離を取るためバックステップを踏む。

しかしヨミはかなりの速度で追いかけてくる。そしてそのまま助走をつけて切りかかって来る。

クロはそれを避けると今度は別の方向からドロクロが突進して来る。

それも避けると今度は上からヨミが鎌を振り落としてくる。

クロがそれを避けると鎌はそのまま地面に突き刺さる。その隙にクロは上からブラッククロックキャノンを連射する。

しかしヨミはそんな銃弾の雨を全て避ける。でも段々追い込まれてヨミは銃弾を喰らった。

正確には煙や砂埃が舞って直撃したかどうかかわからないが、ダメージは負っているだろう。

『あんなに撃ってヨミ大丈夫かな?』

「致命傷を与えたとしても、それは取り付いている奴が全て負うから、取り付かれている人間の身体は何も問題はない」

『え！？』

何だとお！？じゃあ別に普通に倒していいってこと？

さっきのあたしの覚悟は何だったんだ！

『それなら、さっきの覚悟は出来てるって何？』

「あれはお前がまた気絶しないように言ったんだ」

『それを早く言えええええっ！！』

「何故怒っている！？」

そんなことをしていると。

「っー」

クロの後ろにさっきのドクロが二つ浮いていた。

『これが動いているってことは…』

「まだ決着はついていないな」

正面に向き直る。すると煙の中から鎌を持ったヨミの姿が。

クロは再びブラックロックキャノンを構える。

するとヨミは鎌を構えると一気に振り落とす。  
地面に刃が刺さり、そこから衝撃波が出る。

クロはそれをブラックロックキャノンを盾にして防ぐ。  
しかしさっきの戦闘で床がかなり破損している為、衝撃波の影響で  
地面が抜け落ち、クロはそのまま下へ落ちて行く。

当然の如くヨミが追撃して来た。

空中の為、自由に動けない。

クロは鎌の攻撃を全て防いで、その反動で距離を取る。

すると今度はドクロが二つ突進して来る。

クロはブラックロックキャノンでドクロを撃つが、弾丸が全て弾か  
れる。

下の地面に着地した後に、もう一度撃ってみる。

だが、やはり弾かれる。

突進して来たドクロの一つを避けるが、すかさずもう一つのドクロ  
が突進して来る。

それをもろに背中へ喰らってしまい、地面に叩き落とされる。

クロは立ち上がり、第二波を仕掛けて来るドクロにブラックロック  
キャノンを構える。

ってそれは効かないんじゃない？

そんなことを思っているうちにドクロは突進して来る。

しかしクロは構えたままで、動かない。

すると構えていたブラックロックキャノンが巨大な槍のようなもの  
に変化した。

それで突進して来るドクロを切る。  
切られた二つのドクロは消滅した。

ヨミが上から降りて来る。

するとヨミは別の方向に向かって走り去って行く。

クロはその後を追う。

長い廊下のような道を走って行く。

『ねえクロ？』

「何だ」

クロは走りながら答えてくれる。

『ヨ／＼助けられそうっ。』

「このままいけば確実にな」

『あれ？そうなんだ  
てつきり苦戦していると思ってたよ』

「あんなの楽勝だ」

普通に断言するあたり、本当に楽勝なのだろう。

「だから、ひと芝居うつ」

『芝居？』

「ああ」

あたしはクロの言う芝居の内容を一通り聞いた。

『それ、本当に上手くいくの?』

「ああ、奴の性格からして引つ掛かるだろう」

そして、クロはヨミの後を追う。

廊下を抜け、階段を降りていく。するとヨミの姿が見えた。  
クロはそれを追いかける。

階段を降り、廊下に着くと先端に槍が付いた鎖が襲いかかって来る。  
それをジャンプして避けて廊下を走り抜ける。  
次々と鎖が襲いかかって来るが、クロはそれを走りながら全部避ける。

すると向かっている部屋の入り口を鎖が塞ぐ為、クロはそれをブラッ克蘭ス（あたし命名）で破壊する。

広いところに出てきた。

恐らくこの城の中心部だろう。

そこには大量の鎖が張り巡らしてある。

ヨミはその中心部にいた。

そしてクロはヨミに向かい走りだす。

裏月（後書き）

AKI

「さて、クロが考えている作戦とは何でしょうか」

BRS

「言ったらネタバレになるだろう  
あとその呼び方やめろ」

AKI

「ええ！？別にいいとか言ってたじゃん」

BRS

「マトなら別に良いが、お前に言われるとかなり気持ち悪い」

AKI「いいじゃん」クロ

BRS

「……」

AKI「す、すみません！調子に乗りました！だからブラックロックス  
クキヤノンこっちに向けないで！」

BRS

「…次回もお楽しみに」

AKI「って、ぎゃああああああああああっ！！」

救出（前書き）

A K I

「今回で、第一部は終わりです！」

B R S

「早いな」

A K I

「確かにね、何でだろう？」

B R S

「お前が詳しく描写を書かないからだ」

A K I

「そ、そうですね  
すみません」

B R S

「それでは第六話をどうぞ」

## 救出

クロがヨミに向かって走り出すと、ヨミは鎌を器用に使い、張り巡らしてある鎖を繰り出して来る。

クロはそれを避けると、ヨミは鎖を伝って突撃してくる。

当然の如く、クロはそれを避けるが、ヨミは鎌で更に攻撃してくる。一応接近戦用のブラックランスとはいえ、さすがに武器が大きいので、反撃する隙が無い。クロは防御に徹するしかなかったが、ヨミの一撃の反動で距離をとった。

今度はクロが部屋の中心部の側に立つ。

そしてヨミがクロに向かい走り出す。

クロはブラックランスをブラックロックキャノンに変えて、ヨミに向かって弾丸を連射する。

しかしヨミはそれをジャンプして避ける。

クロはその隙を逃さず、空中にいるヨミに向かって弾丸を放つが、

ヨミは張り巡らしてある鎖を足場にして利用し、鎖から鎖へと飛び回り回避する。

そしてヨミはクロに向かい鎌を振り落として来たので、クロはそれをブラックロックキャノンで盾にして防ぐ。

しかし、その隙にヨミがクロの足を引っ掛けて来る。

クロはその場で倒れてしまい、ヨミは鎌を振り落とそうとする。

「フフ」

ヨミは勝負あったなというような笑みを浮かべる。

だが、クロはその鎌をブラックロックキャノンで破壊する。

ヨミは今度、空中に飛び鎖を投げつけて攻撃してくる。

クロはそれを避けたり防いだりするが、ヨミはその隙に接近戦を仕掛けて来る。

クロはヨミの蹴りを喰らってしまい、その隙に鎖に捕まってしまう。

「……………フッ！」

身動きの取れないクロを見て、今度こそヨミは勝ったような笑みを浮かべる。

クロはそのまま意識を失う。

気が付くと、クロは廊下の壁に鎖で繋がれていた。

その場所はさっきの中心部の空間の一つだった。

中心部の空間はすべての階層を突き抜けている為、クロがいる場所もその一つのようなった。

その為、クロの反対側は壁が無い。さっきの場所がそこから見える。

大体の状況を確認すると目の前にヨミが現れた。

ヨミはクロを見て笑みを浮かべる。

悠然と立つヨミに対し、クロは腕に力を入れて鎖を引きちぎる。

拘束から脱出したクロはヨミに向かい歩く。

ヨミは後退りしながらも、鎖を投げて攻撃するが、クロはその鎖を片手で払い、消滅させる。

成す術が無いヨミは更に後退りする。

そんなヨミに対し、クロは再び手を差し伸べる。

しかし、ヨミはそれを拒否するように更に後退りする。

だが、その先には地面が無い。

「……！」

ヨミが落ちるその瞬間、クロはヨミを抱き締めて落下を阻止する。

ヨミはそれを拒否するように離れようとする。するとヨミの身体から黒い影が離れていく。

黒い影は断末魔を挙げて、落下しながら消滅した。

そしてクロが抱き締めているのは、黒い角が生えていない、いつものヨミだった。

『ヨミ……』

ヨミは気を失っている。

「この娘に取り付いていた黒き使徒は消滅した  
もう大丈夫だ」

クロの言葉を聞いてホッとした。

「急いで脱出するぞ」

『え！？』

「この城はもう崩れる」

そう言ってクロはヨミを抱き抱えて走り出す。

すると本当に城が崩れ出した。

落ちてくる瓦礫を避けながら走っていき、クロは城から脱出した。

崩れていく城をあたしとクロは崖の上から見ていた。

ヨミは地面に寝かせてある。

『作戦、本当に上手くいったね』

「そうだな」

『聞いた時はビックリしたよ  
まさかわざと捕まるなんて言うからさ』

「そのほうが、その娘の身体に負担をかけないですむ」

『確かにね』

ありがとうクロ』

「…じゃあそろそろ戻るぞ」

『うん、そうだね』

クロはヨミを抱き抱える。

そして青い光が全身を包む。

あたしは目を覚ます。

起き上がって、カーテンの隙間から朝日が射し込む自分の部屋を見る。

何故目覚ましが鳴らなかったのかをあたしは考える。

（そっか…今日休みだ）

あたしはパジャマから私服に着替える。

3日前に裏世界から帰ってきて、ヨミを抱えて自宅に戻り、ヨミをご両親に預けたんだ。

帰って来た時はヨミはずっと気を失っていた為、一言も話していない。

その後、ご両親の話だと意識は取り戻したらしいが、しばらく病院で様子を見るらしい。

学校でもヨミが帰って来たという噂が流れ、クラスの皆は安心した。

あたしはその後、朝食を食べて再び部屋に戻り、ベッドに横になる。

すると携帯が鳴ったので誰からかを確認した。

「あ  
」

あたしはその後、家から出て高台の公園に来た。

何でここに来たかというと

「ヨミ、」

「あ、マト」

さっきヨミから電話が来て、ここで待ち合わせの約束をしたからだ。

ヨミは先に来ていた為、あたしはヨミの隣に行く。

「あたしヨミと待ち合わせして先に来たこと一度も無いよー」

「え？そう？」

「うん」

そしてあたし達は笑い合う。

けどヨミは急に暗い顔になって

「いめんねマト、心配させちゃって」と言った。

あたしは作り笑いをして

「ヨミが無事に帰って来ただけで嬉しいから問題無いよ！  
それにさ…」

ヨミはそんなあたしの話を静かに聞いてくれた。

「これから、またいつものように一緒に登校出来るんだよね？」

「うん」

「また、一緒に…休み時間も…過ごせるんだよね？」

「うん」

「また、一緒に…帰って、途中で……寄り道したり…出来るん…だよね？」

あたしの目から涙がこぼれ出す。

「…マト」

ヨミはそんなあたしを優しく抱き締めてくれた。

「ごめんねマト、本当にごめん…」

「ムムム……ムムム……」

あたしはそのまま涙を流した。

ヨミは泣き止むまであたしを抱き締めてくれた。

その後、ヨミはこんな話を話してくれた。

「私ね、いなくなった日の放課後から記憶が無いの」

「そうなんだ」

多分、その時に黒き使徒に取り付かれたんだろつとあたしは思った。

「でもね、なんだかマトが私を助けてくれたような気がするの」

「え？」

まあ助けたのは実際クロだけだね。あたしはとりあえず相づちを打つ。

「あ、もちろん私を運んで来てくれたのがマトなのは知ってるよ？でも、それとは別にね  
だからお礼を言いたいの」

「ヨミ…」

ヨミは満面の笑顔で

「ありがとう、マト」

と言った。

その後は色々話し合ったりした。家庭の事、学校の事等。

その時、あたしはある物を思い出す。

「あーヨミミー！」

「何？」

「これ！」

あたしは上着のポケットからそれを取り出し、ヨミに見せる。

「あ！」

それは以前、この場所でヨミにプレゼントした青い星が付いたストラップだった。

「これ、無くしたと思っていたの  
マトが見つけてくれたの？」

「うん！」

あたしはストラップをヨミの手に渡す。

「これからは無くさないように気をつけてね」

「うん、もう絶対に無くさないよ」

ヨミは両手でストラップを握って胸に当てる。

あたし達はその後、笑い合った。

ヨミと別れて家に帰り、晩御飯を食べた後、自分の部屋に行き、ベッドに横になった。

「クロ、今頃どうしてるんだろう」

今思えば、あれは夢だったのかも知れない。

だが、夢にしてはあまりにもリアル過ぎる。  
とても夢才チで済ませられるものではなかった。

「クロ、どこにいるの？」

あたしはそう呟いた。

『呼んだか？』

「え！！？」

なんだか頭に直接語りかけられたような感じがした。

「く、クロなの？」

『そうだ』

「ど、どこにいるの？」

『どこにつて、しいて言うならお前の中だ』

「あたしの？」

あたしは少し、いやかなり混乱する。

『私はお前、お前は私  
存在を一つにしたって言っただろ』

「え？それって、もしかしてずっと？」

『そうだ』

「四六時中ずっと？」

『ああ』

「えええー……………っ!!!!?」

どうやら、あたしはこれからずっとクロと共同生活をするらしい。

あ、あたしにプライバシーは無いのか？

## 救出（後書き）

AKI

「次回からは、またいつもの学園生活だね」

BRS

「そうだな」

AKI

「でも以前とは違い、マトと君が一緒になったおかげで、微妙に非日常な生活に！」

BRS

「……なんかD・Nみたいな展開だな」

AKI

「そうだね！では次回もお楽しみに！  
あと感想もお待ちしています！」

BRS

「質問があれば、このダメ作者と私が答えるぞ」

## 訪問（前書き）

AKI

「今回からは完全オリジナルです！」

BRS

「今までの話で一番長いな」

AKI

「そうですねー、原作の話は壊したくはないですからねーでも今回からは遠慮せずに書きます！」

BRS

「…内容が酷いことになるな

オリジナルが嫌いな方はどうぞ、戻るを押してください」

AKI

「あとオリキャラも出します！」

BRS

「ますます酷い…」

AKI

「では第七話『訪問』！どうぞ！」



違うのはあたし自身だ。

「じ、これって…」

自分の視界から見えるのはあたしの姿。

鏡を見ている為、自分の姿が見えるのは当たり前だ。

だけど、あたしはその姿に問題がある。

あたしはいつも髪型を小さめのツインテールにしているから、髪の長さは大体セミロングぐらいだ。

だけど、今のあたしの髪はセミロングどころじゃない。黒髪の長い

ツインテールがそこにはある。

おまけに服装もいつもと違う。

上半身には黒いブラのような胸当てしかつけておらず。

下半身には黒いホットパンツを履いている。

手には黒い手袋。

足には黒いロングブーツを履いている

黒のロングコートは来ているものの、前のチャックは全開にしているため、露出度の高い服装を全然隠していない。

とにかく、全身黒い服装している。

あたしは確信する。

この姿は間違いなく【クロ】だ！

本名、ブラックロックシューター

あたしはブラックの部分日本語に直して【クロ】と呼んでいる。

ある時にクロと存在を一つにしたため、あたしとクロは一心同体になってしまった。

身体がクロに変身すれば、意識もクロに切り替わるはずなんだけれど。

今、身体はクロに変身して、意識はあたしのままの状態で。

「（ち、ちょっと！クロ！どっいうこと？）」

家族が来たらマズイので、あたしは小声でクロに話しかける。

『……何だ？人が気持ち良く寝てたというのに』

クロはそう言ってくる。

正直、この頭に直接語りかけられるような感覚は慣れそうもない。  
てか寝てたって、普段寝てるのかクロって？

あたしはクロに今の状況を説明する。鏡に映る姿を見て納得したよう  
うだ。

『なるほど、ならば一回完全に私に変身して、その後にお前に戻る』

それで戻るんならありがたい。あたしは反対の理由なんて微塵も  
ないので素直に従うことにした。

『じゃあいくぞ』

「うん」

あたしは特になにもすることも無くボーッとしていると、身体之感  
覚が無いことに気付いた。

『切り替わったの？』

「そうだ」

『じゃあ早く戻ろうよ』

「待て、急かすな」

あたしとしては早く学校に…と言つかヨミを待たせてあるから早くしたいのだ。

ガチャ…

その時、部屋の扉が開く音がした。

「姉ちゃん、お母さんが早くメシ食わないと遅刻するって…」

そこには弟のヒロがいた。だがしかし、今のあたしの姿はクロのままだ。

これはマズイ。この状況をどうやってごまかすかとあたしが考えていると

「あ、ああわかった  
今行くよ」

クロがそう言う。

確かにあたしとクロは髪の長さこそ違うが、それ以外は瓜二つな為、上手くいけばごまかせるかもしれない。

ヒロは若干あたしを見ていたものの、部屋から出ていった。  
扉の向こうから聞こえてくる足音が遠退いていく。  
もう大丈夫だろうと思ったのか、クロは話し出す。

「何とかやり過ごしたな」

『早く戻ろっ』

「……そうだな」

その後一瞬で元に戻った。

「お母さんおはよう」

「おはよう」

早くしないと遅刻するわよ」

「うん、わかってるよ」

「朝から変な格好してないで、早くご飯食べなさい」

「……それ、ヒロから聞いたの？」

「ええ、そうよ」

結果的に言えば、問題はなかった。

家を出たのがかなり遅くなったので、ヨミにメールしようと思ったら、今日は具合が悪くなったから休むと既にヨミからメールが来ていた。

あたしは駅に着き、改札口を通り、ホームで電車を待ち、電車が来たから乗る。

ここまではいつも通り。違うのは降りる時だった。

最寄りの駅に着いたので、あたしと同じセーラー服を着た娘が次々と降りて行く。

あたしも降りようと思ったけど、一人、電車の席で本を読んでいる娘が目に入る。

もちろんその娘もあたしと同じセーラー服を来ていた。

しかし、その娘は駅に着いたというのに降りようとしなない。

「……ってヤバいつて！」

あたしは急いでその娘に駆け寄る。

「速く降りないと！」

「え？」

その娘の手を引いて、急いで電車から降りる。

「あ……」

辺りを見回し啞然とするその娘。どうやら今駅に着いたと気付いたらしい。

その娘はあたしに向きなおり、軽く会釈をした後

「有り難うございます、黒衣さん」

お礼はいい。だが気になることがあった。

「いいよお礼は、それより何であたしの名字を知ってるの？」

あたしってもしかして結構有名人？と思ったけど、それはないなと思った。

「何でって…、同じクラスだからだけど？」

初耳だ。

あたしは必死にクラスのメンバーの顔を思い出す。

「それにクラスの学級委員だし」

それも初耳だ。  
クラスの委員長……ああ、なんだかだんだんうつすら思い出してきた。

「ホームルーム中、あなたはよく寝てるから覚えているのよ」

…まあ確かに、あたしは授業中に寝てることは多い。

何とか名前ぐらい思い出せないものかとあたしは必死に思い出す。

「えっと…鐘原ユカさん…だっけ？」

「あら？覚えててくれたの？」

さすがに思い出さないと失礼だからね。  
鐘原ユカ、黒髪のロングヘアで、髪型はストレートだ。

「じゃあ改めて宜しくね、黒衣さん」

「マトでいいよ」

別に同じクラスなんだし、気を使う必要もない。

「そう、なら私のこともユカでいいわよ」

「うん、宜しくねユカ」

その後あたし達は学校に向かう。

歩きながら会話しているとユカがとある質問をしてきた。

「あれ？いつもは小鳥遊さんと一緒に来るのに何で今日は一人なの？」

「ああ、ヨミ？今日は具合が悪いから休むんだって」

「そうなの、心配ね」

その顔は本当に心配しているような顔だった。

「まあ大丈夫だよ」とあたしは言った。根拠なんて無いけどね。

学校に着き、教室に入って自分の席に座る。するとある人物が話しかけて来た。

「あれ？今日ヨミは？一緒じゃないの？」

この娘は秋元<sup>あきもと</sup>アリサ。以前ヨミが行方不明になった時にあたしを励ましてくれた娘だ。

ヨミとはバレー部の仲間であり、ヨミと仲が良い。  
黄色のロングヘアーをサイドテールにしている。

「今日は具合が悪いから休むって」

本日二回目の説明をする。

「そうなのか？大丈夫かな」

アリサは心配したような顔をするが、すぐにいつもの明るい顔に戻り、こんなことを言った。

「御見舞いに行こう！」

「え？」

御見舞い？ヨミの家に？

別にそこまでしなくとも大丈夫だろうと思った。

「止めとこうって、家に行ったら迷惑だし、具合が悪化したらまずいし」

あたしは筋の通った反対意見を述べる。

「マト、ヨミの私生活興味ない？」

それを聞いたとたんにあたしの意見は百八十度変わる。

確かにこれを気に、ヨミがどんな家に住んでるのかを知るのも悪くない。

「…行く！」

「よし！そう来なくっちゃあ！」

あたしとアリサは片手でお互いの手を握り合う。

しかし、その日の授業中、あることに気付く。

「いいか、来週は期末テストがあるからよく勉強しとくように」

若い男の教師がそんなことを言った。

（期末テスト……完全に忘れてた…）

「そ、そんなの聞いてないぞっ！」

アリサが先生に突っ掛かる。いや、期末テストのことは一ヶ月前から言われてたし。

しかし先生は不機嫌にはならず

「いや、期末テストのことは一ヶ月前くらいから言っているし」とあたしが思ったことをまんま言った。

「じゃ、じゃあテストの問題全部教えてくださいっ！そしたら赤点取らないんでっ！」

「いや、それ言ったらテストの意味ないし…」

「お願いします！どうか、あたしにチャンスをつ！」

「そうか、そこまで言うなら…」

しかし、クラスの人全員の視線が先生を睨む。

「あ…アリサ、今回は自分で何とかしろ」

そんな先生に対しアリサは「ええ！」と言う。

この先生は生徒に甘いのだ。

と言うか仕方ない。元はと言えば覚えてなかったアリサが悪いのだ。

まああたしも忘れてたからどうしようもないけど。

そんなこんなで授業が終わった。

その後の休み時間、アリサはあたしの席の前に座る。別にその席の娘は今はいないから誰にも迷惑をかけていない、あたしを除いては。アリサはさっきからあたしの机にもたれかかってくる、正直、邪魔だ。

何でアリサがこの調子かというと、さっきのテストのことだ。

「マトあー、あたしはどうしたらいいんだ？」

うつ伏せ状態でそんなことを聞いてくるアリサにあたしはキツパリと言う。

「今からでもいいから勉強したら？」

当然の意見を述べる。

「今からじゃあ間に合わないよお……」

そしてグロッキー状態に移行するアリサ。

あたしは赤点だけは取りたくはないので、本来は机を使って勉強したいんだけど。

アリサが机のスペースを独り占めしているため、あたしは少しでも勉強するために教科書を読む。

「秋元さん、寝るなら自分の机で寝たら？  
マトが勉強出来ないじゃないですか」

そんなアリサに意見を言ったのはユカだった。  
アリサはユカの注意を聞いたとたんにグロッキー状態から平常モードに覚醒した。

「あ！委員長！」

アリサが起き上がって、ユカに向く。

「あたしのことはアリサでいいよ！」

何を言い出すかと思えば、自分の名前の呼び方だった。だがそこがアリサらしい。

「ええ、わかったわ

それより、アリサは勉強はしないの？」

「ああ、あたしは諦めてっから  
今から勉強しても、赤点確定だよ」

「え？一週間勉強すれば赤点は取らずにすむんじゃない？」

「あたしの勉強方法じゃあ無理なんだよお…」

「なら私が教えてあげるから、諦めないで」

すると一瞬、アリサの顔がニヤリと微笑む。

「本当に！？ありがとう委員長！」

「いいのよ、でも今日は用事があるから、明日の放課後からね」

そう言うとユカは自分の席の方向に身体を向ける。

そんなユカにアリサは

「本当にありがとう委員長！」と言った。

ユカはあたし達に手を振り、自分の席に座る。

あたしはアリサに小声で話しかける。

「（アリサ、謀ったでしょ）」

「（あ、ばれた？）」

「（顔に出てたもん）」

「（いや、だって委員長に勉強教えてもらったほうが覚えやすいじゃん!）」

「（前に教えてもらったことがあるの?）」

「（いや、ただ一人で勉強するよりは断然良いじゃん）」

「……そうだね

ほら、もうすぐ鐘になるから席に戻って」

「ういーっす」

そう言っただけでアリサは戻って行った。

ああいう人はギリギリ赤点取るタイプだな。

その後、午後の授業が終わり、あたしは帰ろうとする。

「あれ？マト、部活は？」

教室から出る前にアリサに声をかけられた。

「さっき先生がテスト期間だから部活ないって言ってたじゃん」

「え？そうだったけ？」

一体何を聞いていたんだとあたしは思った。  
まあテストのことを覚えていないだけはある。  
あたしも人のことは言えないけど。

「じゃあ部活ないなら、さっそく行こうよ！」

一体何処へ？そんな疑問を抱いていると

「ヨミの家だよ！」

そうだった、ヨミの家に御見舞いに行くんだ。

「ごめんごめん、忘れてた」

「おいおいー、しっかりしろよ！」

「アリサには言われたくないよ」

そんな雑談をしつつ、あたし達は校舎を出る。

電車に乗り、地元に帰ってくる。

駅を出るとアリサははしゃぎ出した。

「おおっ！ここがマトとヨミが住んでる町かつ！」

辺りをキョロキョロ見るアリサをほっという、あたしは先生から聞

いたヨミの住所を確認する。

「マトとヨミってご近所なのに、マトはヨミの家知らないの？」

「うん、行ったこともないし、見たこともない」

学校の帰りに寄り道したり、休みの日に買い物に行ったりはしてるけど、いつもどっかで待ち合わせしている為、ヨミの家に直接行ったことはないのだ。

「そうなんだ、じゃあ楽しみだね」

「うん！」

あたし達はヨミの家に向かった。

ヨミの家に着いた。

「さ、さすがヨミ……期待を裏切らないな」

アリサはそんなことを言った。

そう言うのも無理はない。

今あたし達の目の前にある家は豪邸なのだ。

家と言っても正確には門しか見えない。門の奥にはもの凄い面積の庭が広がっていた。

だが、門にある表札はちゃんと「小鳥遊」と書いてある。

とりあえずインターホンを押す。

『はい』

すると女性の声が聞こえて来た。

「あ、あたし達ヨミのお友達なんですけど、御見舞いに来ました」

あたしはそう言う。

すると

『お嬢様の？』

…かしこまりました、少々お待ちください』

言われた通り、少し待っていると、門が開いた。

アリサはそれに驚く。

「門がひとりでにつ！？」

「いや、リモコンが何かで操作したんだよ」

「ああ、なるほど！」

あたし達は中に入り、玄関のところまで来る。

すると扉が開き、中から出て来たのは

「いらっしやいませ、黒衣マト様

お嬢様からは話は聞かされております」

メイドだった。その声はさっきのインターホンの声と同じだった。

「あれ？あたしは？」

「いつもお嬢様がお世話になっております

この前なんかはお嬢様を助けてくれて本当に感謝しています」

アリサが何か言ったような気がしたが、あたしはメイドさんに感謝されたので

「いえいえ、そんなことは」と対応していた。

「申し遅れました

私はヨミ様のメイドの咲子と申します  
以後、お見知りおきを」

「はい、こちらこそ宜しく」

「あの、だからあたしは？」

「あなたは？」

アリサが何か言った為、咲子さんが話しかける。

「あたしは秋元アリサ

マトと同じくヨミの友達だよ」

「秋元…アリサ……、確かお嬢様とは部活が一緒の」

「そうそう！」

「そうでしたか、そうともわからず失礼しました」

咲子さんはアリサに頭を下げる。

そんな咲子さんに対し、アリサは

「いえいえそんな、気にしてませんって」と言った。

「どうぞ中へお入りください」

咲子さんが中へと招く。

「「お邪魔します」」

あたし達は中に入る。

「広おーい！」

「…凄い」

中は広々としていた。

まあ外見が大きくて中が狭いってことはないだろうけど。

あたし達は咲子さんがヨミの部屋まで案内してくれるので、それについていく。

するとヨミの部屋の前まで来たらしく、扉を二回ほどノックする。  
中から「どうぞ」とヨミの声が聞こえて来た。

咲子さんは扉を開け

「お嬢様、お友達を連れて来ました」と言った。

「うん、入って」

ヨミがそう言ったので咲子さんが「どうぞ」と部屋へと招く。

あたし達が部屋に入ると、ヨミはベッドに腰かけていた。

「いらつしゃい

マト、アリサ」

「ヨミ大丈夫、具合？」

「良くなったのか？」

ヨミは笑顔で挨拶してくる。

左右の髪をウェーブさせたセミロングヘアの少女。さっきまで寝ていたのか、ネグリジェを着ている。

「うん、大分良くなったよ  
明日には学校行けると思う」

「そっかあ、良かったあー」

あたしはひとまず安心する。

「その服、寝間着か？可愛いなあー」

アリサはヨミに話しかける。

あたし達は何気ないことを会話していた。  
その時、テストのことを思い出す。

「そういえばヨミ！来週から期末テストだけど、覚えてた？」

あたしはヨミにテストのことを聞いてみた。

「ええ、覚えてるわよ  
どうして？」

アリサも気になっていたのか

「いや、勉強大丈夫かな」と思って」と言った。

「うん、大丈夫よ

テスト範囲は大体覚えてるから、後は復習すれば何とかなるわね」

「「そ、そうなんだ……」」

「？、どうしたの二人共？」

「「い、いやっ！何でもないよっ！」」

怪しさ満点のシンクロ率である。  
するとヨミは笑って

「わかった、テストのこと忘れてたんでしょっ？」と当ててきた。

「「お、おっしゃる通りです」」

またアリサとセリフが被る。本当にシンクロ率が良いな、覚醒はしないけど。

あたしとアリサが困った顔をしているとヨミが

「仕方ないわね」と言い出し。

「あたしが勉強教えてあげるから」

ヨミはそう言った。それに対しアリサが凄い勢いで喜ぶ。

「マジで！？ありがとうヨミ！心の友よ！」

どこのジャイ。ンだと思いながらアリサにツツこむ。

「アリサは今日ユカと約束しただろう」

「ああ、そうだった！」

忘れてたのか…。

「ユカって？」

ヨミが疑問を浮かべる。

「うちのクラスの委員長だよ」

アリサはそれに答えると

「ああ、確かそうだったわね」とヨミはすっきりした顔でそう言った。

「でも何で委員長と仲が良いんだ、マト？」

「ああ、それはね……」

アリサが聞いて来たのであたしは今朝のことを話した。

……ってなことがあったんだよ」

「へえー、あの委員長がねえー」

「ちょっと以外ね」

アリサもヨミも驚いている様子だ。

「でもね、ユカと一緒に話していたらさー……」

そんな雑談をしていると、結構時間がたっていた。

あたし達は立ち上がり

「今日はもう帰るよ」と言った。

「そうだな、具合が悪化したらまずいし」

「そう、気をつけて帰ってね」

「うーす！」

「じゃあね！」

あたし達はその後、ヨミの家を出た。

いつもヨミと待ち合わせしている交差点のところに着き

「じゃあ、また明日」とアリサに言った。

そして、あたしは自分の家に帰ろうとしたら

「ちよっと待ったあ！」とアリサはあたしを引き留める。

「まだ時間あるし、ついでにマトの家に連れてって！」

「ええ！」

まだ、今日のイベントは全て終わっていないらしい。



勉強（前書き）

B  
R  
S

「短っ！」

A  
K  
I

「そうですねー」

最近忙しいもので」

B  
R  
S

「それでも書けよ」

A  
K  
I

「……努力します」

## 勉強

「人生、勉強がすべてじゃねえ！」

アリサが小さな胸を張って何かの本の受け売りを偉そうに語っていた。

あたしの机の前で。

「でも勉強しないと赤点取るよ？」

「ぐっ……」

あたしは正論を言うと、アリサは机にうつ伏せになる。

ヨミの家にお見舞いに行った日の翌日。授業が終わり、放課後になった時の話だ。

アリサは勉強しないとヤバイのは自覚しているのだろう。しかし、やはり気が進まないようだ。

「赤点取りたくなかったら勉強するしかないよ？」

「……うん」

アリサは席から立ち上がる。

「準備は出来た？」

「うん」

「なら早く行きましょう」

その様子を見ていたヨミとユカのもとに行く。

ヨミは今日は学校に来れた。

それを確認したユカが

「小鳥遊さんがいるなら私が勉強を教える必要はないわね」と言ったが、あたし達がユカと一緒に勉強しようと言ったので、ユカも参加することになった。

歩きながら雑談して図書室に向かう。

するとユカがヨミに話しかけた。

「小鳥遊さんはテスト勉強、大丈夫？」

「うん、少し復習すれば大丈夫だと思う」

「小鳥遊さんは頭良いわね」

「いえ、委員長にはかないませんよ」

「あ、私のこと名前で呼んでいいわよ」

それと、敬語も使わなくていいから」

「あ……うん、わかった／＼／＼  
じゃあ、私のこともヨミでいいよ」

「うん、宜しくねヨミ」

「うん」

「おお！ヨミとユカ、仲良くなってるね」

「何、マト」

私がヨミに喧嘩を売ると思った？」

「いやいや、そんなこと思ってたないよ」

「まあ私はどつかのサイドテールとは違い、荒っぽい性格じゃないわよ」

「それあたしのことが！？」

「別にアリサとは言っていないじゃない」

「いや、直接言わないから逆に傷付くよ！」

そんなことを話している間に図書室に着いた。  
扉を開け、入室する。

「おお、結構人が多い！」

「それはそうよ、マト  
テスト勉強する人は沢山いるもの」

「そっか」

「あつ、あそこのテーブルのところ、四人ぐらい空いてるぜ！」

「あら、本当ね

じゃああそこに座りましょう」

あたし達は空いてる席に座り、勉強を始めた。

「アリサ、この問題はこの公式を使って……」

「おおっ、なるほど！」

ユカがアリサに勉強を教える。

「ここはさっき解いた問題の応用だから……」

「ふむ……」

あたしはヨミに勉強を教わる。

順調にテスト勉強をしていたのだが

「飽きたっ、寝る！」とアリサが言い出した。

「まだ始めて十分しか経ってないわよ」

勿論注意するユカだが、アリサは机にうつ伏せになり動かなくなつた。

「五分位休憩させてあげたら？」

「ヨミは甘いわね」

ヨミの意見を聞き、ユカは自分の勉強に集中する。

そしてだいたい五分位経つたので、あたしはアリサを起こす。

「アリサー、起きなさい」

肩を揺るとアリサは起きて、勢いよく顔をあげる。

「あつ、……夢か」

どうやら夢を見ていたようだ。

ヨミはアリサに

「どんな夢を見たの？」と聞く。

「それが変な夢でさ、ナスの馬に乗った侍が追っかけてくるんだよ」

「えっ、それ怖くない？」

その話を聞いたユカが食いついて来る。

「いや、追いつかれてヤバいと思ったんだけど、そしたら急に踊り

出すんだ」

「……何だかよくわからない夢ね……」

「うーん、真面目に勉強しろってことかな」

そしてアリサは真面目に勉強し始めた。

「頑張ろう」

あたしはそう呟き、集中して勉強した。

あたしとヨミとユカは電車に乗って帰っていた。

アリサの地元は、あたし達とは別方向の為、ここにはいない。

「ユカの地元って遠いの？」

あたしはユカに質問する。

「うん、まあ遠いかな」

「そうなんだ」

「マトとヨミは家近所なんだよね」

「そうだよ」

ね、ヨミ？」

「うん」

「羨ましいわね」

「ユカは地元で仲良い人いないの？」

「うん……あまりね」

ユカは少し暗い顔になる。

「私は昔から身体が弱くて、小さい頃から家にいることが多かったの」

「ユカ……」

ユカとヨミが暗くなったので、あたしは空気を変えようとした。

「でも、今はあたし達がいるじゃん！」

「「え？」」

ユカとヨミは目を丸くしてあたしを見る。

「だから寂しくないでしょ？」

「……クス」「フフッ」

「え？」

あたしの言葉に二人共笑い出すので、困惑する。  
するとヨミが

「マトって、何だか不思議よね」と言った。

「ええ、何だか小さな悩みなんてどうでも良くなっちゃっ」

ユカまでそんなことを言う。

でも結果的に場が明るくなったから良かった。

【SIDE クロ】

皆が寝静まる深夜。私は部屋のベッドに腰掛ける。

変身してはいるが、服装はマトが着ていたパジャマのままだ。

マトは今は寝ているため、変身していることに気付いていない。

「……マト、ごめん」

暗い部屋で、私は独り言の様に呟く。

勿論、寝ているマトには聞こえていない。

「お前は平和な日常が好きなのに、私の勝手な都合にお前を巻き込んでしまった」

私のせいでマトの日常を変えてしまったと思うと、胸が痛くなる。

「……本当に、ごめん……ごめんな」

暗い部屋で、私は呟く。



勉強（後書き）

A K I

「次回で期末試験は終わる予定です」

B R S

「しばらく私の出番はなさそうだな」

A K I

「はたしてそうかな」

B R S

「……何かあるのか？」

A K I

「それは次回のお楽しみに」

B R S

「……感想・質問など待ってます」

【番外編】日常

「ただいまー」

「お邪魔します」

ヨミの家にお見舞いに行った後、アリサはあたしの家に来たいと言った。

あたしは出来れば勉強に集中したいため、訪問を断りたかったが、どうしても言うため結局連れて来てしまった。

「おお、ここがマトの家」

アリサは家の中をキョロキョロ見てる。

「お帰りなさい

あら？マト、お友達？」

するとお母さんが来た。

「うん」

「お邪魔します」

アリサはお母さんにお辞儀をする。

「ええ、ゆつくりしていつてね」

「はい」

その後、アリサを部屋へと招いた。

アリサはあたしの部屋へ入るとはしゃぎ出す。

「ここがマトの部屋かぁー！」

「別にたいした物じゃないよ」

そう言った。ヨミの部屋に比べると本当にたいした部屋じゃないし。

「いやいや、そんなことはないよー、きれいな部屋じゃん」

そしてアリサは部屋を見渡し、こんなことを聞いて来た。

「マトの卒アルどこ？」

「教えない」

キツパリと答えるとアリサは

「いいじゃん、見してよぉー」と絡んで来る。

「教えてくれないんだっ たら勝手に漁るよ?」

「ええ!??」

そう脅しをかけて来るアリサ。

「じゃあ、ちよつとだけだよ?」

あたしが観念するとアリサは「やったあー!」と喜ぶ。

「マトの卒アル♪マトの卒アル♪」

「……はい」

そんなアリサにあたしは小学校の卒アルを渡す。

それを受け取り、早速ページをめくる。

「マトなん組?」

「二組だよ」

「二組、二組………あ!いた!」

アリサは卒アルの写真に写るあたしを指差す。

「へえ、マトって全然変わってないね」

「それ、コンプレックスなんだから言わないでよー」

「ごめんごめん」

その後、あたし達は雑談をした。勉強はしなくちゃダメなんだけど、今ぐらいは良いかなと思ったのだ。

「そつえばさ」

あたしはアリサに聞きたいことがあった。

「アリサとヨミって何で仲良くなったの？」

「ああ、それはヨミがあたしに話しかけて来たからだよ」

「え？アリサから話しかけたんじゃないの？」

「……うん」

するとアリサはしんみりとした顔になって話し出した。

「あたしさ……小学校の時に色々あってさ、それ以来、人と話すのが苦手だったんだよ」

意外だった。今のアリサの性格から見て考えられない。

「バレエ部に入っただのは、このままじゃダメだと思った自分がどこかにいたんだよ」

そしてある日、ヨミに声をかけられたんだ」

「……」

「ヨミはパスの仕方やサーブの仕方を聞いて来たんだよ

……本当に何気ない会話だった……

でも一生懸命に頑張るヨミの姿を見て『あたしも頑張らなきゃ』と思ったんだよ」

「……………そうなんだ」

「つまりは、あたし、アリサはヨミによって救われた……ってだけの話だ」

「……………」

「うつ」

あたしは予想以上にアリサの話がシリアスだった為、かける言葉が見つからず沈んでいた。

「いやいやいやいやっ!？」

そんなに暗くならないでよっ!

そんなに大したことでもないし!」

「……………そう?」

「ああ、それに……………」

アリサはあたしに満面の笑顔で

「今はみんながいるから平気だよ」

「……そっか」

その後は普通に雑談した。

窓から見える景色がきれいだなとか、バレエ部の先輩の話とか。

そして、いよいよ時間がヤバくなってきた。

「じゃあ、あたしそろそろ帰るわ」

あたしは玄関までアリサを見送った。

「じゃーねい！」

「うん、じゃあね」

そしてアリサは帰った。

アリサとの会話は楽しかったが

「勉強しないと」

楽しい時間の後に勉強するほど集中出来ないものはない。

## 異変（前書き）

A K I

「第九話、番外編を含めると十話です！」

B R S

「更新も久しぶりだな」

A K I

「今回の話、自分は結構気に入っています。では本文へどうぞ」

## 異変

私は目を覚ます。

（そうか、あのまま寝てしまったのか）

変身したままの状態だったので、私はマトに戻ろうとしたが

「ん!？」

何故か、戻れない。

もう一度試してみたが結果は同じ。

「そんな……」

私は原因を考えてみたが、全くわからない。

『……うーん』

「!」

マトが起きた。

今の状況を知ったらどんな反応するだろう。

『……えっ、これどついつと!?!?クロ!』

まあ、そうなるよな。

私はマトに今の状況を説明した。

「えっ、じゃあ戻れないの？」

「ああ」

いつまで？

「……わからない」

『一生このまま？』

「……最悪の場合は」

ええええええええええええええええつ！！

とりあえず、マトが落ち着くまで待つことにした。

五分後

『じゃあクロ、これからどつするの?』

「やるだけやってみる」

『どついうこと?』

「こついうことだ」

私は掛けてあつた学生服に着替える。

『えっ、クロが代わりに学校行くの?』

「なるべく、日常生活に合わせた方が良い」

私とマトは姿が瓜二つな為、バレないはずだ。

『……ただ単に、クロが学校に行きたいだけなんじゃ……』

「何か言ったか」

『いいや、何にも』

そんなやり取りをしている間に着替え終わった。

「こんな感じで良いか?」

鏡を見て、マトに聞いてみる。

『……うん、普通に可愛いんじゃないの』

「…………怒っているのか？」

『知らない』

マトは何故か不機嫌になった。まあ、こんな状況になれば不機嫌にもなるか。

部屋から出て、リビングに向かう。

「おはよう、マト……………ってどうしたの、その髪？」

マトの母にいきなり髪のことを聞かれた。

「…………イメチェン」

「イメチェン？」

「うん」

「…………そう」

上手く誤魔化せたようだ。

『何だかいきなり不安なんだけど』

マトが何か言ったが、私は気にせず朝食を食べる。

朝食を食べ終わり、準備を済ませて家を出る。

ヨミとの待ち合わせ場所に着くと、そこには既にヨミが待っていた。

「マト、おはよう……あれ？」

ヨミは私の姿を見て目を丸くする。

「どうしたの、その髪？」

「イメチェン」

マトの母に言ったセリフをそのまんま言っ。

やはり、髪の長さがいつもと違つと、誰でも疑問を持つようだ。

「そうなの、」

「まあ、そんなもん」

そして私達は駅に向かい歩き出す。

「……」

「……」

「……ねえ、マト」

「何だ」

「今日どうしたの？　なんだか、いつもと雰囲気違っけど」

「そうか？」

「うん」

流石、マトの親友と言ったところか。と言うより私の態度が、マトと違い過ぎたのか。  
私は誤魔化そうとして

「ごめん、実は私、二重人格なんだ」

冗談を言っ、とりあえず雰囲気を変えようと思ったのだ。

しかし

「えっ、そうだったの！！？」

「！」

冗談で言ったことを普通に信じてしまった。

「そうね、それなら納得ね」

「いや、あの……」

信じたなら信じたまま方が都合が良いのかと一瞬考えたが、そんな訳にもいかないので、撤回することにする。

「ヨミごめん、冗談だ」

「え、冗談？」

「ああ」

再び驚くあたり、本当に信じていたようだ。

「なんだ、冗談かあ」

そう言つてヨミは軽く笑う。

「じゃあマト、何で今日は元氣無いの？」

さて、再び考えなくてはならない。  
どう説明すれば、ヨミは納得するか。

『普通に寝不足で良いんじゃない？』

考えている時、マトが呆れたような声で意見を提案して来た。  
私はマトの助言の通りに、寝不足と説明する。

「そうだったの、大丈夫？」

「ああ、問題ない」

「明日からテストだもんね。勉強頑張るのはいいけれど、身体を壊したら意味ないよ？」

「……ああ、そうだな」

そう、問題はテストだ。

明日までには、マトに戻ればいいのだけれど。

学校に着き、自分の教室に入る。

「あ、マトおはよう！」

マトの友達、アリサと言ったが、その人が挨拶して来る。

「ああ、おはよう」

私は適当に返事をし、自分の席に座る。

「マト、なんかテンション低いな」

アリサは私の近くにやって来て、話しかけて来た。

「夜遅くまで勉強して寝不足なんだって」

ヨミが代わりに説明してくれる。

勉強云々のことは、ヨミが勝手に考察し、付け加えたものだ。

「そうなのか、大変だなー」

アリサが腕を組み、私のことを心配そうに見てくる。

「アリサもマトを見習って、自主勉強したほうがいいんじゃないの。」

徹夜しろとは言わないけど」

そんなアリサに、近くまでやって来たユカが若干呆れたような口調で言った。

「いや、あたしだって勉強しているんだぞ？」

「そうなの？」

アリサの言葉に、ユカは意外そうな顔をする。

「一時間だけどな！」

「うわぁー」

ユカの顔が、また呆れた表情に戻る。

すると、ユカの視線が私に向けられる。

「そつえば、何で今日のマトは髪長いの？」

本日、三回目の髪についての質問だ。

「……イメチェン」

この質問を言われた時の対応をする。

「イメチェン？」

「ああ」

「ヅラか何か？」

「そうだな」

私は適当に相づちをうつ。

「おお、まるで地毛みたいだなー」

アリサは私の髪を弄り出した。ツインテールの両端を持ち上げたり、軽く引つ張ったりする。

「……止める、遊ぶな」

「そうよ、止めなさいアリサ」

私が文句を言うと、ユカもアリサに注意する。

「うーん、でもマトの髪、すごいさらさらしてるな」

アリサは髪を弄るのをやめると、そんなことを言ってきた。

「……ちよつと触ってみてもいい？」

「え？」

気になったらしく、ヨミが私の髪に触りたいとお願いしてきた。

「……別にいいけど」

他の二人が見つめるなか、ヨミが私の髪を触る。

「うわ、本当にさらさらしてる……」

ヨミが驚くなか、アリサは

「だろ？」と、まるで自分のことのように言う。

「……何だか私も触りたくなってきたな」

「ユカも触ればいいじゃん、別に良いよなマト？」

私は頷いて答える。

「ほら、良いって言ってるぜ」

「……じゃあ、失礼するわね」

そしてユカも私の髪を触る。

「っ！」

私は身をビクッと震わせる。

ユカの手が触れた瞬間、私は殺気を感じた。

「ど、どうしたの？」

ユカは心配そうに私を見てくる。それと同様にヨミとアリサも心配

してくる。

「……いや、何でもない」

「いいか、明日はいよいよテストだからな。勉強するように」

授業中、若い男の教師がそう言った。

「先生えー、やっぱりテストの問題教えてください」

アリサは先生に無茶なお願いをする。

「いや、だからアリサ。自分で頑張れと先生言ったじゃないか」

「そこをなんとか」

「………なら今度、先生の買い物に付き合ってくれたら特別に「先生！」て……」

先生がなにやら変なことを言ったので、ユカが先生に声をあげる。

「何、変なことをしようとしてるんですか!」

「何だユカ。先生はただ、アリサとデートしたいだけだ」

「それが駄目なんですよっ！ていつか何で開き直っているんですか！」

「物事は、はっきり言わないと相手に伝わらないだろう」

「下心丸出しなセリフを、はっきり言うのは間違っていると思います！」

先生はユカの意見に観念したのか

「……アリサ、テストは自分の力でなんとかしろ」

「えー」

アリサが残念そうに言った。

その時、鐘が鳴って授業は終わった。

放課後になり、私達四人はテスト勉強をするために図書室に行ったのだが……。

「うわぁー……、人いっぱい」

アリサがこう言うのも無理はない。図書室は以前と比べると、人が溢れかえるほどいたからだ。

勿論、座る場所なんて無く、私達は図書室をあとにした。

「どうするんだ、勉強は」

私は三人に尋ねる。

「いつそのこと教室でやるか？」

アリサがそう提案するが……。

「うちの学校は放課後になると、教室の鍵を閉めるから無理ね」

ユカはアリサの提案を無理と答え、代わりに

「喫茶店とかどう？」と提案してきた。

「私は良いと思うよ」

ヨミは賛成のようだ。

「ユカが奢ってくれるならいいぜ」

「奢らないわよ」

「ちえー」

アリサも賛成のようだ。

私も反論する理由はないので……。

「マトは？」

私は頷いて答えた。

「じゃあ行きますか！」

アリサは元気良く、先頭を歩く。

「言つとくけど、ちゃんと頼んだ飲み物とかは自分で払ってよ」

その次をユカが歩く。

「マト、行こう」

そしてヨミが私に声をかける。

「……ああ」

私は頷き、皆のもとへ行く。

その後は喫茶店で勉強をした。

途中、皆で雑談もしていたが、私はそれを楽しく感じた。

マトが、この日常が好きなのもわかる気がする。

翌日、試験当日。

結局私はマトに戻れなかった。

私は今、ヨミと一緒に登校している。

『ああ、赤点か……。お母さんに何て言い訳しよう……。』

「まだ赤点と決まった訳では無いだろう」

「ん？何か言った？」

「いや、何でも」

学校に着き、教室に入れば、皆が教科書やノートを見て軽く復習している。

ただ、唯一何もしていなかった人物が私に話しかけてきた。

「うーす、マトおはよー」

「……ああ」

「ありゃ、お疲れの様子？」

別に疲れてはいない、アリサのテンションが高すぎるだけだ。

「アリサも教科書とか読んで、最後の確認したら？」

ユカがアリサに声をかける。

それに対しアリサは「大丈夫！」と自信あり気に言う。

「範囲の五割くらいは頭に入っているから！」

「全部覚えないと意味無いじゃない」

そんなやりとりをしているうちに鐘が鳴った。

そしてホームルームが終わり、いよいよテストが始まった。

「ああ……疲れたあー」

放課後、私達四人は正面玄関に向かうなか、アリサは背中を丸めて言った。

「確かに難しかったものね」

ヨミがそう言い、ユカも

「そうよね」と言った。

「マトはどうだった？」

ヨミが私に聞いて来たので私は「そうだな」と当たり障りのなく言う。

そんな会話をしているなか、ユカが「あ！」と声を挙げる。

「どうしたの？」

とヨミがユカに声をかける。

「教室に忘れ物したみたい……。ちょっと取りに行つて来る」

ユカが踵を返して教室に向かおうとする。

「私も行くよ」

私はユカの後を追う。

ヨミとアリスも付き合つと言ったが「すぐに戻るから」と言って、待たせておいた。

教室に着く。幸い、まだ鍵は閉まっていなかったので中に入ることが出来た。

ユカは自分の席に行き、机の中をチェックする。

「あつた」

そう言つて教科書を手に持ち、安堵するユカ。

「いめんねマト、付き合わせちゃって」

謝るユカに対し、私は

「……いい加減、本性を現したらどうだ」

と言って、睨めつける。

「?……マト、何言ってるの」

「お前の正体はわかっている。今すぐその人間を解放しろっ、『ラックゴールドソー』!」

そう言われた瞬間、ユカの目の色が変わった。

「……………フフ、フフフフ」

そして悪魔の様な笑みを浮かべる。

そして次の瞬間、教室は暗い世界に切り替わる。

「……裏世界か」

この暗い空に乾いた大地、間違いなく裏世界だった。

そして私はユカに視線を戻すと、ユカの身体は紅い焰に包まれる。

そして焰が消えると、そこには黒い角を生やしたユカがいる。

服装も制服ではなく。黒い胸当てにホットパンツ、手足には鎧の様な装備をしており、黒い丈の身近い上着を着ている。  
そして手には大剣を持っていた。

奴は鐘原ユカから本来の姿、ブラックゴールドソーに変身したのだ。

私も服装を制服からいつもの格好に変身し、左目に焰を灯らせる。

ブラックロックキャノンを出現させて、手に装備する。

「貴女は何回殺せば死ぬのかしら」

奴は見下すように私を見ながらそう言ってくる。

「……一回私に致命傷を与えたぐらいで調子に乗るな」

私は奴に威嚇するように言った。

「……その余裕、いつまで持つかしら」

私は奴に向けてロックキャノンを構える。

奴も大剣を構えて笑みを浮かべる。

「ゲームスタート！」

## 異変（後書き）

A K I

「今回は【激闘！ブラックゴールドソー】です！」

B R S

「最初はまさかユカに取り付いていたとは思わなかった」

A K I

「でも、わかる人はわかったと思います」

B R S

「……ユカを救う為にも、奴を倒す」

A K I

「では、また次回！」

感想・質問などお待ちしております。

## 友情（前書き）

A K I

「今回で第二部は終わりです」

B R S

「……早いな」

A K I

「そうだね、何でだろう？」

B R S

「お前が詳しく描写を書かないからだ」

A K I

「……あれ？この会話、前にもしたような……」

友情

私は孤独。

孤独な世界で生きている。

なら、こんな世界、壊してしまえばいい。

『世界をぶち壊さないか』

それは私が望んだことだった。

\*\*\*

「ゲームスタート!」

ユカは大剣を構え、そう言った。

あたしは驚いた。

『ユカも黒き使徒に取り付かれていたなんて』

「取り付くなんて失礼ね」

『え！？』

あたしはクロの頭に直接話しかけたのに、何でユカはあたしの言ったことがわかったのか。

『何で聞こえるの？』

あたしはユカに質問する。

するとユカは大剣を下げて答えた。

「貴女、知らないの？」

『え？』

「黒き使徒と存在を一つにした者同士なら、相手の中にいる者と会話することが出来るのよ」

『え、そうなの？クロ？』

「いや、初耳だ」

クロはきっぱりと言った。

「フフ、そうよね。貴女は存在を一つにしたのが、これが初めてだものね」

『その言い方、あなたは何回も人に取り付いているの?』

「いえ、私はこの娘としか存在を一つにしていないうわ」

『そうなの?』

「ええ」

その時、私はあることに気づく。

『そういえばユカっ、ユカと話せるの?』

「ええ、話せるわよ。でもユカは貴女とは話したくはないって」

「デタラメを言うな」

あたしが何か言おうとした瞬間、クロが声をあげる。

そしてクロは再びブラッククロックキャノンを構える。

「あら、もう始めていいの?」

ユカはきょとんとさせて言ってくる。

「さっさとお前を倒し、ユカを助ける」

クロがそう言った時、ユカの目付きが鋭くなる。

「死ぬのは貴女よ」

ユカは大剣を構え、そして斬りかかってきた。

【SIDE クロ】

奴は私に向かい大剣を振り下ろして来る。

私はそれを避け、奴に向けブラックロックスキャノンを連射する。

「はっ！」

だが奴は大剣を盾にし、全弾防いだ。

「今度はこっちの番よ……」

そう言つて奴は黒い球を自身の周りに出現させる。

私はそれを見て舌打ちをする。

「……また、あれか」

『またつて、どういうこと？』

マトが私の発言について質問してくる。

「あれに当たると戦闘能力がかなり下がるんだ。私は以前に、あれに当たつてしまい奴に負けた」

手短に説明していると、奴は黒い球を放つて来た。

私はそれを絶対に当たらないように回避する。

意識して避ければ大したことはない。

『負けた？クロが？』

「ああ」

私は避けながら答える。

「私は避けるのではなく、防いだんだ。そして戦闘能力がかなり下がり、負けたという訳だ」

『ま、負けたクロはどうなったの？』

「致命傷を負った」

『ええっ！？それで、どうしたの？』

「存在を保つ為にお前と一つになった」

『あ、なるほど』

そしてマトが納得したのと同時に黒球を全弾回避する。

「まったく、すばしっこいわね」

そう言つて奴は大剣を振り回して来る。

それを防ぎ、その間に私は空いてる手に刀を出現させる。

「くっ！」

私はユカに向かい刀を振るが、寸前のところで避けられてしまう。

奴は地面にズサーっと着地する。

「さすがにやるわね」

そしてまた、奴は黒球を出現させて放つて来る。

私は球の位置を一つ一つ確認し、それをブラックロックキャノンで全弾撃ち落とす。

そしてまた斬り合いが続く。

その時

『マト、もう止めて』

奴の中からユカが声をあげる。

その声にマトが反応した。

『ユカ、ユカなの!?!』

『ええ、私よ』

『待ってて、今助けるから……』

『やめてっ!?!』

ユカは怒鳴るように声をあげる。

「妙だな……」

『妙って?』

私が呟くとマトが聞いて来る。

「一方的に取り付かれたなら、取り付かれた人間は気絶しているは

ずだ」

「だから取り付いてないって言ってるじゃない」

奴は呆れたような口調で言う。

「私はちゃんとユカと契約しているの」

「……まさか」

私は目を丸くする。

「ユカは自分の意志で私と存在を一つにしたの」

そんな奴の言い分にマトが突っかかる。

『ユカが自分からそんなことを望むはずがない!』

「いいえ、望んだのよ」

奴はマトの言い分をバツサリと切る。

「ユカは世界を恨んでいるのよ」

『世界を恨む……?』

マトは疑問を浮かべる。

すると奴は大剣を下げて喋り出す。

「いいわ、冥土の土産に教えてあげる」

ユカがまだ幼かった頃、ユカの両親は事故で死んだ。

ユカは親戚の人に預けられたわ。

だけど、元から身体が弱かったユカは他人と関わらなくなってしまった。

学校にもろくに行かなくなり、ユカは孤独な生活を送っていたのよ。

でもある日、親戚の人に学校に行けと言われ、渋々登校したユカに、一人の子が話しかけて来た。

もちろんユカはあまり話してはいなかったけど、その子が一方的に話しかけるような形が続いたの。

いつしか二人は自然に仲良くなっていき、ユカの心の傷もだいたい癒えてきた。

そして、ユカの誕生日の日、その子はユカに渡したいものがあるからと言い、家で待っててと言われたわ。

ユカは家で待ってたわ、ずっと。でも、結局その子は夜になっても来なかった。

そして、親戚の人に言われた言葉が

その子が交通事故で死んだということだった。

そして、事故現場にはボロボロになったプレゼント。

ユカは狂ったように叫び、泣いたわ。

自分の誕生日がまさか親友の命日になるなんて。

そして、ユカは恨んだ。

一度ならず二度までも、自分の大切な者達を亡き者にしたこの世界を。

そしてユカが中学生になったある日、ある者がユカに囁いたのよ。

『世界をぶち壊さないか』と。

そう、そのある者というのが私だったわけ。

そしてユカは私と契約した。憎き、世界を壊す為に。

【SIDE クロ】

「……」

私は奴の話聞き終わり、無言でいた。

するとユカが口を開いた。

『マト、だから私の邪魔をしないで。あなたのことを傷付けたくはない』

ユカはまるで私達が負けるような言い方だ。私は負けるつもりなど更々ない。

私はロックキャノンを消す。

「あら、武器を捨てるってことは、降参する気になった？」

奴は嘲笑うような口調で言った。

「これ一本で、お前とけりをつける」

私は刀を奴に向ける。

「……私をなめるなっ!!」

そう言つて奴は大剣で斬りかかつて来る。

私は刀で防ぐ。

刃と刃が重なる。

「私は、貴女のこと気がくわないのよっ!」

そして奴は大剣を振り下ろして来るが、それが大きな隙を生む。

「はっ!」

私は奴の大剣を弾く。大剣は遠くへと飛んで行き、地面に刺さった。

奴の顔に刀を向ける。

「……さすがに、強いわね」

奴は諦めたように言う。

「止めをさしなさい。ユカには何も影響が出ないことは知っているでしょう?」

「……ああ」

私は刀を振ろうとした時。

『クロ、ちょっと待って』

マトが止めてきた。

「……………わかった」

私は刀を下げる。

するとマトが話し出した。

『ねえ、ユカ聞いて。確かに両親が死んだのも、友達が死んだのも、かなりショックだったと思う』

『……………』

ユカは何も言わない。

『でも、だからといって何もかも壊すなんて間違っていると思う！』

『……………』

『だからユカ！もう止めよう！』

『……………マトに……………』

ユカが口を開く。

『マトに私の何がわかるっていつのよっ！-！』

『わかるよっ！-！』

マトが声をあげる。

『大切な人がいなくなったこと、あたしもあったよ……。でも、その時あたしは逆恨みなんかしなかった』

『……………』

『そんなこと、間違っているって、わかったから。だから、もう止めよう、ユカ』

『……でも、私は孤独なのよ。今更、普通の娘に戻れる訳がない』

ユカがそう言つと

『ユカ、あたし達がいるじゃん。あたし達が一緒にいる』

『！』

マトがそう言つ。

『あたしはもちろん、ヨミも、アリサも、みんながいる。ユカは孤独なんかじゃないんだよ』

『み……みんなが……』

「私もだ」

『クロ？』

確かに、私が直接ユカと過ごした時間は少なかったが、マトの中から見た日常生活でユカのことは知っている。

「私で良ければ一緒にいる」

『クロ……』

すると奴は目を丸くする。

「貴女……」

そう言った瞬間、奴の目から涙が流れた。

「え？ユカ？」

奴は頬を流れる涙をさわる。

その涙はおそらく、ユカが流したものだろう。

「ユカ、何で……」

【SIDE ブラックゴールドソー】

私はユカに問いかける。

するとユカは口を開いた。

『……私、最初マト達と出会った時、どうせまた私のもとから消えていくと思っていた』

確かにあの時、ユカはそう思っていた。

『でも、マトが……一緒にいるって、言ってくれた……』

「……でも、またいなくなるかもしれないわよ？」

『それはない！』

するとマトが声をあげる。

『あたしは死ぬつもりは更々ないからっ！』

『ヌト……』

そんなことを言っても、いざとなったら自分の意志関係なく死ぬこともあるのだけれど……。

『ゴールドソー、ごめんなさい。……私はもう……』

ユカが私に謝ってくる。

「ユカ……、もう良いの？」

『……うん、私はもう孤独じゃないから』

泣きながらも、その声は何だか嬉しそうだった。

『だから、あなたの願いは……』

「……良いのよ、ユカが……満足したなら……それで」

そして私は涙を流す、その涙はユカだけじゃない、私も泣いた。

私は嬉しかったのだ。ずっと孤独だったユカが、こんなにも嬉しそうにしていたから。

最初は只の契約相手だったけど。いつしか私は、この娘の為に何かしたかったのだ。

「もう、悔いはない。止めをさしなさい」

私は目の前にいる敵に言った。

「断る」

「え？」

何故？

「……お前はユカを孤独にさせたいのか？」

「でも、私は……」

『あなたも立派に、ユカの大切な人なんだよ』

マトがそう言う。

私はユカに聞く。

「良いの、ユカ？……これから一緒にいて」

『うん』

顔が見えたら、笑顔なんだろうか、嬉しそうに答えた。

「……ありがとう……」

私は涙を流した。

【SIDE  
クロ】

私達はそこらにあつた岩に腰かけて、ある話をしていた。

「そういえば、なんで昨日から貴女が学校に来ているの?」

奴が質問してくる。

「戻れないんだ」

「戻れない?」

するとマトが説明を始めた。

『なんかね。昨日の朝、起きたらクロに変身していて、もちろんクロは戻ろうとしたんだけど、結局戻れなかったんだ』

すると奴は少し考えて、答えた。

「貴女達、普段たまに変身していた?」

『してないけど』

「あー、それよ」

奴は原因がわかったようだ。

「私達黒き使徒は、普段から力がチャージされているから、定期的に変身しないとオーバーヒートみたいなのを起こして、強制的に変

身してしまうの」

『そうなんだー』

初耳だった。

「私達は普段、主に深夜とかに変身しているわ」

『じゃあ、あたし達もそうしよう。ね、クロ』

「ああ」

確かにそうしたほうが効率的だ。

「……一つ気になったんだけど」

奴は私に問いかける。

「さっきからマトが言っている、クロ、って、貴女の名前？」

「そうだが」

すると奴はニヤニヤ笑い出す。

「へえー、可愛いじゃない」

『でしょう？』

「ええ」

何だか奴とマトが話し出す。

「私の通り名は女王なのよ。嫌いではないけど、可愛くないのよ」

『なら、あたしが考えるよ』

「本当に？」

『うん！えーと、じゃあ、ヒメで！』

奴は首を傾げる。

「ヒメ？」

『うん！あたしのイメージだとヒメはお姫様って感じなんだよ』

「私が……お姫様／＼／＼」

奴の頬が赤く染まっていく。

「うん、悪くないわね」

『じゃあ私もヒメって呼んでも良い？』

ユカが聞く。

「もちろん、良いわよ」

「宜しくな、ヒメ」

私も呼んでみた。

「貴女も呼ぶの!？」

「駄目か？」

「……好きなように呼べばいいわ／＼／＼／」

ヒメは顔を背ける。

『あ! ヒメが照れてる』

「照れてないわよ!」

そんなヒメをマトが弄る。

そうして話しが盛り上がると、マトが『あ!』と声をあげた。

『ヨミとアリサを待たせたままだ!』

そういえばそうだった。

「なら、早く戻りましょう」

ヒメがそう言い、立ち上がる。

『ああ、早くクロからあたしに戻れないかなー』

私も立ち上がると、マトがそんなことを呟いた。

それに対し、ユカが『大丈夫よ』と答えた。

『あれだけ戦闘したもの、戻れるはずよ』

『そっか、良かったー』

そうマトが言った瞬間。私とヒメの体が光に包まれる。

元の世界に帰るために。

【SIDE ユカ】

私はもう孤独じゃない。

「あっ、マトー！ユカー！遅いよ！」

「私達、今から教室に行こうとしてたのよ」

「ごめんごめん！」

「ちょっと探すのに手間取って……」

「もう、心配したんだぜ？」

「本当にごめんね」

「いや、もういいよ」

「じゃあ帰るっ」

「うん」

「ああ！」

私はふと足を止める。

すると

「「「ユカー、どうしたの？早く来なよー」「」」

みんなが私に呼び掛けて来る。

私はもう孤独じゃない。

「……うん！」

私には、一緒にいてくれる友達がいるから。

## 友情（後書き）

AKI

「激闘と言いながら結局、戦闘少なくなってしまうました」

BRS

「駄目だろ『ブラック ロックシューター』の小説として」

AKI

「次回からはまた日常生活です。ヒメも参加していくので楽しみに  
しててください！」

BRS

「話を逸らすな」

AKI

「感想・質問などお待ちしています！」

【番外編】結果（前書き）

A K I

「番外編です」

B R S

「短い」

A K I

「番外編ですから」

B R S

「そう言えばすべてが許されると思うなよ」

A K I

「……はい。すみませんでした！」

## 【番外編】結果

ヒメとの戦闘から数日後、テスト返却日。

教室であたしは返ってくる自分の答案を気にしていた。

「ああ、やっぱり赤点かなあー」

あたしがそう呟くと、クロが呆れたような口調で言ってくる。

『だから、まだ赤点と決まった訳ではないだろ』

クロはそう言うが、あたしの不安は無くならない。

「だってクロって裏世界の人だし、勉強できないじゃん」

『……お前、私がテストを受けてた時、見てたか？』

「ん？いや、見てないけど」

『そっだろうな』

「？」

クロは何故か意味深なことを言ってくる。

そんなやりとりをしているとアリサがあたしの席の前にやって来た。

「なーにぶつぶつ独り言言ってるの」

「いや、何でも。只、返ってくるテストが心配で」

アリサや他の人にはクロの声は聞こえないので、あたしが独り言を言っているように見えるようだ。

何回もやっていたら確実に変な人だよね。

「大丈夫よ、マト一生懸命に勉強してたもの」

そう言つてヨミが声をかけて来る。

問題はそこではないんだけど……。

『随分心配してるわね』

するとあたしの頭にクロ以外の人物が声をかけて来る。

『ヒメか』

クロがそう言った。

あたしはふと顔を横に向ける。そこにはユカがヨミの隣に立っていた。

ユカは事情がわかるので、今のあたしの状況を理解しているらしく、苦笑いをしていた。するとヒメが喋り出す。

『貴女がテストを受けたなら、少なくとも……』

すると鐘が鳴り、ヒメのセリフは途中で終わってしまう。

『あら、授業が始まるわね。じゃあ話はまた今度』

（ええちよつと！どうせ周りには聞こえないんだから教えてよ！？）  
と言いたかったが、独り言になるので止めといた。あまりおかしな人にはなりたくない。

そして授業が始まり、テストが返される。

「うおおおおおおおおお！？」

アリサの答案が返され、それを見たアリサが叫ぶ。どうしたんだろ  
う。

するとアリサは笑顔であたしの席にやって来た。

「マトつ、見て見て！84点！」

あたしを「おお」と驚きの声をあげる。

「良かったじゃないアリサ」

ユカもあたしの席にやって来た。  
するとアリサはユカに向き直る。

「ユカが勉強教えてくれたおかげだぜ！ありがとう！」

「いいのよ別に」

ユカは若干頬を赤くして答えた。

「これであたしが赤点取ったらヤバいなあー……」

あたしはかなり不安になる。この四人で一人だけ赤点にはなりたくない。

「黒衣マトー」

そしていよいよ名前が呼ばれる。

あたしは鬱々としながら答案を取りに行く。

「頑張ったな」

何故か先生が笑顔でそう言うてくる。どういふことだろう……。

そしてあたしは答案を見た。

「え！？嘘！！」

あたしは驚きの声をあげる。だって……。

「き…… 94点？」

かなり高得点だった。

「すげえーじゃん！マトー！」

アリサがあたしの答案を見て言うてくる。

あたしはいまだに信じられなかった。

「（く、クロ！これはどういうこと！？）」

小声でクロに話しかける。

『……言っておくが、私は学は持っている。だが文化が違う為、勉強する必要はあったがな』

衝撃の事実。まさかクロが勉強出来たなんて……。

「どうした？さっきからぶつぶつ独り言言ってる」

「うっん、何でもないの」

その後、ヨミのテストも返され、見てみるとあたしよりも点が良かった。

順位でいうと、

1位 ヨミ

2位 ユカ

3位 あたし

最下位 アリサ

「最下位ってひどくねえか！？」一応高得点だぞ！？」

その日の夜。

「ごめんね、クロ……あたし誤解してたよ。まさかクロが頭良かったなんて」

『いや、別にかまわない』

あたしは自分の部屋でクロに謝っていた。

『確かに私は戦闘しか出来ない化け物だからな……』

そのクロの言葉にあたしは、

「ねえ、クロ」

『ん』

「クロはいなくならないでよ？」

あたしは不安になった。何だかクロが何処かへいなくなってしまうんじゃないかと思って……。

『……ああ。ありがとう、マト』

そう答えるクロは、何だか嬉しそうだった。



## 【番外編】結果（後書き）

感想・質問などお待ちしております。

退屈（前書き）

B  
R  
S

「今回から『祭囃し編』がスタートだ」

A  
K  
I

「違うから！」

では始まります！

## 退屈

何かおかしい。

なんとなく、そう思った。

そう気付き始めたのは、お盆を過ぎた夏の盛りの日のことだ。

その時、私は家の居間でダラダラしながら別に見たくもない高校野球をテレビで眺めていた。

テレビに映る試合は私とは縁もゆかりもない県同士の闘いだ、負けているほうをなんとなく応援していると、何故だか解らないがそろそろアリサが騒ぎ出すような気が、これもなんとなくした。

……と、こんなことを言っていたら夏が一万何千回も繰り返す話が始まりそうなのでここらでやめておく。

どうもブラッククロックシューター、通称クロだ。

さっき言った通り、今は夏の盛りだ。マトの両親は旅行に出掛けているため昼間でもこうやって変身している。マトの弟のヒロも外に遊びに行っている。暑いのによくやるもんだ。その為家には私独り、マトは今は寝ている。

テレビで見ている試合が盛り上がる。今点が入った、負けている方に。このまま頑張れば逆転出来るんじゃないだろうかと思っていると、ケータイが鳴る。アリサからだった。

「もしもし」

私は電話に出る。出た瞬間に「今日あんた暇でしょ？」と言われなにか内心ヒヤヒヤしていたのは秘密だ。誰だって時間ループは嫌だ。

『あ、マト？今日予定空いてる？』

「ああ、空いてるが」

『なら今日の夜お祭りに行かない？近所でやるらしいからさ』

私は少し考える。大丈夫なはずだ。マトは今日、特に予定無いし。

「ああ、大丈夫だ」

『なら六時にいつもの駅前に集合な。あ、駅って言うのは学校の最寄りの駅のことな』

「ああ、解ったよ」

『んじゃあな』

ピツと電話を切る。

「マト、起きろー」

私はマトを起こす。一応約束したことを言っとかなければならない。するとマトは『うーん』と言いながら起きた。

『……何、もう朝？』

「ベタな寝惚け方するな。それよりさつき約束したけど問題ないか？」

『約束？誰と？どんな？』

「アリサと、祭りの」

『お祭り?』

「何でも今日の夜に行きたい、大丈夫か?」

『うん、大丈夫だよ。お父さんとお母さん、今日の夜には帰って来るし』

「そうか」

『あー、せっかくのお祭りだから浴衣着たいなあ』

「浴衣着れるのか? 第一持っているのか?」

『ううん、着れないし持ってもいない』

「……駄目じゃないか」

『……うん。あ、ヨミに電話してみて』

「ヨミも誘うのか?」

『うん!』

てなことで私はヨミに電話をかける。

『はい、もしもし?』

「あ、ヨミ？私だけど」

『マト？もしかしてお祭りのことで』

ヨミはお祭りのこと知っていた。これはヨミもアリサに誘われたな。

『うん、私にもさっき電話来た。行くって答えたけどマトは？』

「私も行くと答えた」

『そうなんだ、やっぱり。なら一緒に行きましょう？』

「ああ、良いよ。ところで……」

私はヨミにあることを聞いてみる。

「ヨミは今日行く時、浴衣か？」

『うん、そうよ』

そして私はある頼み事をする。

「実は私も浴衣を着て行きたいんだが、浴衣も無いし着れもしないんだ。だから浴衣がもう一着あるなら着させては貰えないか？」

『……クロ』

マトが小声で私の名を呟く。ヨミはもちろんと言つような感じで良くと答えた。

『浴衣だったらまだあるし、着させてあげられるわよ。だから一旦私の家まで来れる？』

「ああ、問題無い」

『解った。じゃあまた後でね』

ピツと電話を切る。

『クロ、ありがとう。あたしの為に』

「別にいい。……………私も着たかったし……………」

『？……………何か言った？』

「いや、何でも」

テレビの試合を見てみると負けていたチームが逆転した。

【SIDE マト】

てなことであたしは今ヨミの家に向かっている。  
ちなみに今はあたしに戻っている。

ヨミの家に着いた。さすがご近所、すぐに着く。正確には門だけ。インターホンを押すと前にも聞いたような声が聞こえる。

『はい』

「あ、黒衣マトです」

『黒衣マト様。お待ちしてりました。少々お待ちください』

そして前来た時みたいに門が自動で開く。

あとはこのまま玄関に向かえばいいんだけど、門から玄関まで長い道のりがあり、かなり歩かなければならない。以前アリサと来たときもあまりの長さにアリサがげんなりとしながら弱音を吐いていた。しかし、歩かなければ家には着けない。こんなに広い領地を持つているなら、移動するための設備も着けて欲しい。

そんなことを考えていると、玄関に着いた。無意識のうちにかなり歩いていったようだ。人間って怖い。

あたしは扉をノックする。ノックする金具が着いていたのでそれを使った。ライオンが輪をくわえているデザインである。

すると中から人が出てくる。紫色のセミロングヘアの髪、背が高くスタイル抜群な美しい女性だ。その頭にメイドカチューシャを着けており、服装もロングスカートのメイド服を着ている。

「お久しぶりです、黒衣マト様」

「久しぶり、咲子さん」

そのメイド服の女性は咲子さん。以前来たときにいろいろとお世話になった。

「お嬢様から話は聞いています。どうぞ中へ」

そしてあたしは家の中に入る。以前も思ったけど、やはり広い。中へ入るとすぐ大広間になっていて、天井が高く、吹き抜けになっている。おまけにシャンデリアまで着いていた。まるで高級ホテルのロビーだ。

そしてあたしは咲子さんに案内されて廊下を歩いている。

大理石の床がピカピカしている。

「こちらです」

すると咲子さんは歩くのを止めて、ある部屋の扉を開けた。

中へ入るとそこはたくさんの服が掛けられていた。まるで衣装部屋だ。

そしてあたしの目に入ったのが浴衣だった。浴衣だけ部屋の真ん中に配置してある。予め用意していたんだろう。

「どうぞ、好きなものをお選びください」

咲子さんがそう言ったのであたしは浴衣を見る。いろんな色、柄などがあり、どれも素敵だった。

そしてあたしは浴衣を選び、咲子さんに言った。  
あたしが選んだ浴衣は赤色でトンボの絵の柄がついてるものだった。

「かしこまりました。では浴衣をこちらに」

咲子さんを選んだ浴衣を渡す。

そしてあたしは服を脱ぐ、咲子さんが浴衣を着せてくれるからだ。  
咲子さんが浴衣を着せてくれるなか、あたしは咲子さんに話しかける。

「咲子さんは祭りには行かないの？」

「私は行きませんね。お嬢様も友達と一緒にいたいでしょうから」

「そんなことはないと思うけど」

咲子さんがいたらいたで楽しいと思うし、何より咲子さんの浴衣姿も見てみたい。

「はい。終わりましたよ」

浴衣に着替え終わり、あたしは鏡を見る。

「おお」

なんか私の浴衣姿は、綺麗と言うより可愛い印象だった。

「良く似合ってますよ」

「ははは、ありがとう」

咲子さんがそう言ってくれると

「あ、マト似合ってるじゃない」

ヨミがやって来てそう言った。

「ヨミの浴衣姿も可愛い！」

「うふふ、ありがとう」

ヨミの浴衣は青緑の色に紅葉のような柄のもので、とても似合っていた。

「お嬢様も良くお似合いです」

「うん、ありがとう咲子」

衣装部屋を出て、廊下を歩く。

「待ち合わせ場所まで車で送りましょうか？」

咲子さんがそう言ってくるが

「ううん、駅まで近いし電車に乗ればすぐだから」

とヨミが言う。

そしてあたし達はエントランスロビーに戻る。すると咲子さんが玄関の扉を開けてくれた。あたしとヨミは外に出る。

「行つてらっしゃいませ。お嬢様、マト様」

「「行つて来ます」「」

咲子さんも一旦外に出て扉を閉め、あたし達を見送ってくれた。そして門に向けて歩く。後ろを見ると館（ヨミの家）は見えなくな

つていたけど、前を見ても門は見えない。

「移動する為の設備も作れば良いじゃん」

あたしはヨミにそう言うが、ヨミは「はは」と軽く笑い「確かに長いよね」と言った。

ようやく門を出て駅に向かう。

「ヨミも誘われたってことはユカもだよな」

「うん、そうだと思う」

「ユカも浴衣来て来るのかな？」

雑談しながら歩き、そして駅に着いた。  
電車に乗り、待ち合わせ場所に着く。

「ユカー」

「あ、マト、ヨミ」

そこには既にユカとアリサがいた。ユカの浴衣は黒い色に赤い花の柄のものだった。

「浴衣綺麗ね」

ヨミがそう言ってユカは照れながら「ありがとつ」と言った。

「アリサ何か普通」

「悪かったな、浴衣じゃなくて！」

アリサの格好は上が半袖のシャツで下がハーフパンツでサンダルを履いていた。

「何かアリサ、女の子らしくない」

「うるせえ！元からだ！」

でもアリサの浴衣姿に多少興味は………いや、ないな。

「マト、お前今失礼なこと考えただろ」

何かアリサに睨まれた。

「じゃあ皆揃った事だし、そろそろ行きましょ」

ユカがそう言ったので、あたし達は祭りの会場に向かった。

もう空は暗くなり、祭りの会場は一層明るさをましていた。かなり賑やかで人が沢山いる。よくもまあこれだけ集まるものだ。

出店が沢山ある中、あたし達はまず金魚すくいをすることにした。しかし、やり始めていきなり

「え！？マジで！？」

アリサが紙を破る、早いなあ。

「こんな脆い物で金魚をすくうなんて常識的に無理だろ！」

なんてこと言ってるが無視。あたしは集中して金魚をすくう。これで三匹目だ。

「マト上手ね！」

ヨミが褒めてくれる。ヨミはまだ一匹目だった。

「なんか調子が良いんだよー」

あたしはえへへとそう言うときアリサが「破れにくい紙なんじゃね」と言ってくるが無視。

「ユカも上手！」

ヨミがそう言ったのであたしはユカのほうを見る。するとユカは既に九匹も取っていた。

「本当だ、ユカ上手いね！」

そう言ったが、ユカは集中しているのか何も言わず十匹目をゲットした。

『おい、お前何をやっている』

突然クロが声をあげる。てことは……。

『あはは、ごめんなさい……』

ユカの声が聞こえた、クロと同じ、頭に直接話しかけられるように。そして目の前のユカは口を動かすことなく金魚すくいをしている。間違いない……。

『ヒメがやってみたって言うから……』

申し訳なさそうに訳を言うユカ。やっぱりか、あたしは溜め息を吐くとクロが

『マト、変身しても良いか？』

と言って来たのであたしは驚く。周りにはヨミとアリサがいるし無理だろ思ったが

「マト、私達あっちに言つて来るから」

ヨミはそう言つてアリサと一緒にどっか行つた。あたしはまた溜め息を吐き

「……じゃあ少しだけだよ？」

言つた瞬間、あたしからクロに変身する。勿論服装は変わらず、大きく変わったところと言えば髪の長さくらいだ。

すると15匹目をゲットしたヒメがこっちを向く。その表情は悪魔的笑みを浮かべていた。

「あら、まさか貴女もやるつもり？」

バカにしたような口調でそう言ってくる。

「マトのままのほうが良いんじゃない？」

とまで言ってくる。さすがのクロもこれにはキレたらしく……。

「そう言っていてられるのも今のうちだ」

ヒメに向かって宣言する。

そして早速一匹の金魚をすくおうと……

「なっ！！？」

……したが紙が破れた。

ヒメはそれを見て「ぶうっ！」と吹き出し笑いだす。

「あははっ！あ、貴女最高おー！あははっ、ひ、ひいー、お、お腹が痛いっ！」

もう大爆笑だった。だってあんな宣言をしておいてこんな結果。……くくく

「……マトまで笑うな」

『だ、だって……あんな……あははっ！』

もうその場は大爆笑。ユカも爆笑でさらにはお店のおっちゃんも笑いだす。

「……もう、やめてくれ……」

ユカとあたしは元の姿に戻り、ヨミ達と合流する。アリサはたこ焼きを食べていた。口元に青のりがついている。

するとアリサがたこ焼きのトレイを捧げもち

「一個だけなら食べてもいいぜ」と言って差し出してくる。

「ありがとう」と言い、あたしとユカはたこ焼きを食べる。

たこ焼きを食べ終わると、アリサが射的をやるうと言いだしたのであたし達は射的屋に向かう。

そして射的屋に着いたんだけど……。

「……な、ナスとキャラメルしかねえー」

アリサが言った通り、射的屋の景品はなんとナスとキャラメルしか置いてなかった。

「ほ、ほかの射的屋行こうぜ？」

アリサがそう提案するが、

「でも射的屋はここしかないよ？」

「えー、マジで？」

あたし達はげんなりとするが、とりあえず一回くらいはやるうということで、あたしとアリサがやることに。

……て言うか、ナスとキャラメルもかなり落としやすいよね？釘でも刺さってない限り取り放題だよ？

まあ百円払って玉三発だから三個しかとれないけど。

「うりゃー！」

アリサが一発目を打つ。玉はキャラメルに当たり、あっさり落ちて行く。

「「おー」「

ヨミとユカは感嘆するが、玉が当たれば確実に落とせるものなのでたいしたことはない。

「お！お嬢ちゃん、やるねえ」

お店のおっちゃんもそう言って来た。するとアリサは「いやぁ／＼／＼」と照れる。

なるほど、この射的屋はわざと落としやすいものを置き、お客さんにゲットした喜びを味わって貰おうということか。その分経費削減で景品はこんなだけ。

しかし、キャラメルはともかく、ナスなんて誰が欲しがるんだ？

「お！見よウエル殿、あそこの射的屋はナスが置いてあるでござる！」

「いや、普通にいらねえよ！誰がやるんだよ、あんなの」

「でもウエル兄、実際にやってる人いるよ？」

「おお、本当だ！」

「景品がアイスだったらやる気が起きるんだけどなあ」

「いやいや！溶けるから無理だろ！」

「まあいろいろ見て回ろうぜ、せっかくの祭りだ、男四人で楽しもう」

なんか賑やかな人達が来たけど、どこかへ行ってしまった。って言うか、ナスに興味を持つなんて、物好きな人もいるもんだ。

結局射的屋ではあたしがキャラメル二つにナス一つ。アリサがキャラメル一つにナス二つの結果だった。

その後、皆で焼きそばを食べたり、クレープを食べたりしていた。

「あ！そういえば」

アリサが声をあげる。

「もうすぐ花火が始まる時間だ！」

「え？もうそんな時間？」

ユカがケータイを見る。

「本当、もう花火始まっちゃう」

「あたし隠れスポット知ってるぜ！」

「本当？アリサ」

「ああ！」

てなことでアリサの言う隠れスポットに向かうことに。あたしはまだリンゴ飴を食べていたが、花火は見たいので向かうことにした。

ドーン……

でも向かう途中に花火は始まってしまった。

「綺麗……」

ヨミが見とれて足を止める。

あたしはそんなヨミの手を引いて

「ほらヨミ、見るならもつと良い場所で見よう！」

と言って走る。

「ま、待ってよ、マト。速いって」

その後はアリサの言う隠れスポットで花火を見た。  
色鮮やかな花火の数々を見て、あたし達は見とれていた。

こうして、夏祭りは終わりを迎えた。

だが……、

「で、電車がない……」

もう夜遅く。地元のアリサはともかく、あたしとヨミとユカは電車である。

「タクシー捕まえる？」

とユカが提案するが、

「ううん、大丈夫。さっき家に迎えに来てもらつたように言つたから。  
マトとユカも送つて行くよ」

ヨミがそう言ってくれる。

あたしとユカは喜び、ヨミにお礼を言つた。

その後、あたし達は迎えに来た咲子さんの車に乗り帰宅した。

ふと手に持っていたナスを見る。

「だ、なんつて……。」

## 退屈（後書き）

次回予告……的なもの

「大きい建物ね……」

「うわ！？凄い音！」

「こう見えてあたしは音ゲーの神と呼ばれてるんだぞ！」

「……つまり、張り倒せば良いのか？」

「これ……どうしたら良いの？」

「うるさくて何言ってるのか解んないや……」

次回！『ゲーセン編』！

## 悲哀（前書き）

『ゲーセン編』の前にちょっぴりシリアスな話です。

## 悲哀

渴いた大地。暗い空。

無数の十字架が地面に刺さっているこの場所で、男が佇んでいた。そんな男の前に、一人の女性が現れる。

「久しぶりだな」

男は彼女に話しかけた。とても馴れ馴れしい口調で。

「お前、大丈夫か？」

女性は男に心配そうに言った。

「何がだ？」

「やけに疲れているように見える」

「そんなことは無いさ……」

そう言うと男は踵を返す。

「……どこへ行くんだ？」

「可愛い娘のところへだ」

「私達のか？」

「ある意味間違いじゃないな」

「……冗談だ。少しはつつこめ……」

女性は若干頬を赤く染める。

「はは、すまない」

男はそう言つと、その場から立ち去つた。

「……はあ」

残された女性はため息を吐く。

「……せつかく会えたのに、随分反応が薄いな……」

そして女性はまた、ため息を吐いた。

\*\*\*

\*\*\*

「お前、まだいたのか？」

男がもといた十字架の場所に戻ってくると、そこには先ほどの女性がいた。

「当たり前だ、あんな素っ気ない態度で私が満足するはずないだろう。愛が足りない」

「いや、お互い昔みたいに暇じゃ無いんだから。忙しいんだよ今は……」

「私は暇じゃないぞ？」

「……俺は忙しいんだ」

「浮気するのに？」

「んな訳ないだろ！！」

「可愛い娘のところに行って、あんなことやこんなこと……」

「するかっ！っていうか、俺はお前以外の女に手を出す気は無い！！」

「うん、私もだ」

「……たくっ」

男はばつが悪そうに頭をかく。

「お前、最初っから俺にそう言わせる気だったろ」

「あ、バレたか？」

「当たり前だ」

「良いじゃないか、お互いの愛を確認出来たことだし」

「……確認するまでもないだろう」

「……うん、だが不安だったんだ。長い間会っていないと、お前は私のこと忘れてるんじゃないかって……」

寂しそうな表情する女性に、男は真剣な眼差しで、

「忘れるわけ、ねえじゃねえか……俺はお前のこと

「私が散々お前をいじめてやったことを忘れるんじゃないかって…

……」

「むしろ忘れたいわあああああああ！！」

「私に叩かれ恍惚としたお前の表情、今でも忘れられない」

「嘘を捏造するな！いじめられたって言っても、今のような言葉の

やり取り以外ねえわ！」

「そうか、お前はもう忘れてしまったんだな。……長い年月がたったんだ、忘れるのも無理はない」

「辻褄を合わせようとするなあああああー！」

男は絶叫する。女性はその様子を見て笑う。

「うふふ、お前は本当に変わってないな」

そして一呼吸置き、

「お互い、もう昔とは違い変わってしまったからな」

その言葉に対し、男は言う

「仕方がない。それぞれの夢を叶える為に必死になっているんだからな」

「必死になっているのはお前だけだろ？」

女性は微笑んだ。そして男も微笑み、二人で笑いあった。

\*\*\*

「お前にとって人類は何だ？」

「最低な生き物」

女性が男に聞くと、男はそう答えた。

男は続けざまに言う。

「自分たちで勝手に争い、そして自滅した愚か者集団」

「確かにそうだな。人類は自ら撒いた種で滅亡した」

女性は目角を立てて

「だが、お前はそんな人類を再生させようとしている」

「ああ」

男は答える。

「俺はもう一度人類の可能性を信じたいんだ」

「……もしも、また過ちを犯したら？」

「……その時は、俺がなんとかする」

「なんとかかって？」

「まだわからん」

女性は呆れたような顔をするが、すぐに笑顔に戻る。

「私はお前とは違い、人類に希望を持っていない」

「そうか……」

「だが……」

女性は男の顔を見つめて

「お前のその夢は応援しているぞ」

笑顔でそう言った。

\*\*\*

\*\*\*

「ゲートが閉じる」

「本当か!？」

女性が言つと男は目を見開く。

「うん、もう世界の行き来が出来なくなる」

「そうだよな……」

「なあアレス、私はどうしたらいい？」

「どうすればって？」

「戻るべきなのか、このまま残るべきなのか……」

「……それは俺が決めることではない」

「……え？」

「お前が自分自身で決めることだ……」

男は一呼吸置き

「お前は どうしたいんだ？」

「わ、私……」

女性は視線をさまよわせた。  
答えを教えてください人を探すかのように。

しかし、その場には男と女性しかない。

「お前はもうどうしたらいいと思う……?」

「ユキは、どうしたいんだ?」

男に問われた女性は、答えるしかない。

「アレス……」

女性の顔がくしゃりと歪む。

「意地悪しないで……」

男は何も言わない。

「アレス……」

「ユキは帰りたいのか?」

「……っ」

女性は首を振る。

「帰りたくないのか?」

「……っ」

女性は黙り込む。

「……私は、お前と離れたくない」

「じゃあ帰らないのか」

「……っ」

女性の瞳が揺れた。

「お前は帰りたいんじゃないのか？」

「……えっ」

「お前も、叶えたい夢があるんだろ。だったら帰らなきゃダメだ。……後々になつて絶対、後悔する」

女性の目から涙がこぼれる。

「……あはは、何か最後の最後で、お前に心を見透かされたな」

女性の手は震えている。

「……でも、お前と離れたくないのも事実だ。ずっとお前と一緒にいたい。お前無しじゃあ、私は生きられない……」

女性の瞳から涙が流れている。そんな女性を、

「……っ!？」

男は優しく抱きしめた。

「やめてくれ……。そんなことされたら、別れられないだろう……」

「最後だからこそ、いいじゃねえか……」

\*\*\*

「では、行く」

「ああ」

女性は去ろうとしたのはいいが、歩みを進められない。

そんな女性の心境を察したのか、男は、

「ユキ」

女性の名を呼び、側に駆け寄る。

「左手を出してくれ」

そう言われたので女性は左手を差し出す。

「……え」

すると男は女性の左手の薬指に指輪をはめた。

「こ、これって……」

女性は頬を真っ赤に染める。

「それをつけてれば、俺のことを忘れないだろ？」

「……そうだな」

女性は微笑みながら

「だが、これでは何かプロポーズみたいだぞ？」

「ある意味間違いじゃないな」

「冗談……ではないな、今回は」

そして二人は唇を重ねた。

\*\*\*

「ゲートは閉じたか……」

女性は暗い世界でため息を吐いた。  
そして女性は上を向いて、

「いつか、また会えるよな……」

\*\*\*

男は暗い世界でたたずむ。

「絶対に、……また会えるさ……」

## 悲哀（後書き）

A K I

「今回の話はあまり本編とは関係ありませんので、難しく考えなくて結構です」

B R S

「私の出番、皆無だな」

A K I

「気にしたら負けだよ」

感想・質問等、お待ちしております。

娯楽（前書き）

A K I

「小説って……難しいね」

B R S

「今更気づいたのか？」

A K I

「……逃げるかな（ボソッ）」

それでは始まります。

## 娯楽

夏祭りが終わった、数日後。

あたしは今、ヨミいつもの場所で待ち合わせしている。勿論まだ学校は始まっていない。じゃあ何で待ち合わせしているのかというと、ヨミと映画を見に行く約束をしたからだ。

「あ、ヨミ！」

待つこと数分、ヨミが待ち合わせ場所にやって来た。

今思ったけど、待ち合わせしてヨミより先に来たのって初めてじゃない？

「ごめんなさい、遅くなって」

「あたしも今来たところだから大丈夫だよ」

本当に来たところだったので、あたしはそう言う。そしてあたし達は駅に向かい歩き出す。

「そっいえばヨミより先に来たの初めてだね！」

「あ、そう言われればそうね」

「これであたしの目標の一つを達成！」

「?……他の目標は?」

「背を伸ばす!」

するとヨミは納得したような顔をして、

「そつえば前に似たようなこと言ってたよね?」

「え?そつだっけ?」

「うん、言ってた。フフッ」

ヨミは微笑む。

「えー、何?あたし変なこと言った?」

「ウフフッ」

そんなやり取りをしている間に駅に着いた。

電車に乗り、繁華街に着いたあたし達は、早速映画館に向かった。

「何の映画見るの?」

ヨミが聞いて来る。そついえばまだ話してなかった。

「今、CMでも話題になっているホラー映画だよ、何でも実際にあった出来事を元に作っているんだって」

「へえ、面白そうね」

「ヨミは怖いのが平気？」

「うん、そんなには」

言い忘れてたから少し不安だったけど、平気そうで良かった。

映画館に着くと、まだ上映まで時間があつた。

「どっか、コンビニとかで時間潰す？」

「うん、良いわよ」

映画館の近くにあつたコンビニに行き、ファッション雑誌とかを立ち読みして時間を潰すことにした。

あたしは読んでいる雑誌のページを指差してヨミに話しかける。

「この服可愛いねっ！」

「うん。あ、でも私はこっちのほうが好き」

「おおっ、ヨミってやっぱりセンスが大人っぽい！」

「え、そう？」

「うん」

二人で笑い合っていると、そろそろ時間なのに気付いたので、コンビニを出て映画館に戻る。

そしてあたし達は映画を見る。さすがは噂にもなっているホラー映画、かなり怖い。あたしも何回か身体を震わせた。

映画を見たあたし達は繁華街を歩き回ることにした。

雑貨屋や服屋などを見て回って、次はどこに行こうかと考えながら街中を歩いていると、

「あれ？マトとヨミじゃん」

背後から話しかけられる。

二人して振り向くと、そこには

「「アリサ！」「」

「ういーっす」

アリサがラフな格好でそこにいた。手にはトートバッグを持っている。

この間の夏祭りに比べるとかなり可愛い服を着ていた。

「服、可愛いねっ」

「あはは、ありがとう」

ヨミにそう言われたアリサは照れくさそうに少し頬を紅く染める。

「何だかアリサのキャラじゃないよ」

「なんだとおーっ!？」

あたしがボソツと呟くとアリサが突っかかって来る。結構な地獄耳みたいだ。

「ねえ、二人ともこの後予定は？」

アリサがそんなことを聞いてきたので、あたしとヨミは顔を見合せ「特にないよ」と答える。

「ならゲーセンに行かない？」

「「ゲーセン？」」

「うんっ！」

あたしはゲームセンターに何回か行ったことはあり、主にクレイゲームとかをしている。でもヨミは行ったことあるのかな？

「私はそういう所はあまり……」

「そっくだよねえー……」

お嬢様がゲームセンターに通っていたら、それはそれで問題だけど。

「じゃあ行こうっ！」

アリサがそう言って誘って来る。

「……うん、良いよ」

ヨミは少し顎に手を当てて考えて答えた。

「良いの？」

あたしは一応心配して聞く。

「大丈夫よ、それに一回は行ってみたかったし」

「よし！決まったことで、早速ゲーセンに行くかつ！」

アリサがテンションを上げてそう行って来るが、あたし達はお昼ご飯を食べていないので、先にハンバーガーショップに寄ることにした。

食事をしながら三人で会話する。

ヨミがアリサに話しかけ、アリサがそれに答える。

「アリサ、今日は買い物？」

「ふおうはほんはほはいにひはほはっ」

だが、アリサはハンバーガーを食いながら喋っているため、何を言っているのかわからない。

「はっきり喋って」

そんなアリサをあたしは注意した。

アリサは口でモゴモゴさせていたものを急いで飲み込み、再び話出す。

「今日は本を買いに来たのだ!」

そしてVサイン。……何故?

「どんな本を買ったの?」

「最近ハマっているゲームのマンガ。ヒロインの女がクールで格好良いんだよねー」

ペラペラ語り出すアリサにあたしは質問する。

「アリサって、もしかしてゲーマー?」

「ゲーマーってほどではないけど、まあ好きだな!」

「だからゲーセンに行こうと言ったんだね」

「ほっいつほほ!」

「だから、食べながらしゃべらないで!」

「ほへんほへん!」

その後、あたし達はハンバーガーショップを出て、アリサの言うゲーセンに向かった。

娯楽（後書き）

B  
R  
S

「かなり中途半端だな、しかも短いし……おい、作者？……ん？何だ、この紙」

『しばらく逃走します。あとよろ！』

B  
R  
S

「……………おい！」

## 異質（前書き）

AKI

「久しぶりの更新です！」

BRS

「……その前に何か言うことはないか？」

AKI

「はい……すみませんでしたーっ!!」

BRS

「まあいい、これに懲りたら二度と逃亡なんかするなよ」

てな訳で、始まります。

## 異質

「大きい建物ね……」

ヨミが目の前にある建物を見て言う。

ゲーセンに着いたあたし達三人はそのまま中へ入った。

「うわ！？凄い音！」

入った瞬間、ゲーセンの音の五月蠅さにヨミが耳を塞ぐ。

「まあ、お約束だね」

誰もが一回は思う。

「アリサ、何のゲームをやるの？」

あたしはアリサに聞いてみると、アリサはドヤ顔で答える。

「音ゲーだっ！」

「おとげー？」

ヨミが困惑気味に首を傾げる。

「音ゲーって、音楽に合わせてボタンを押すゲームだよ。『リズム

ゲーム』とも呼ばれてるね」

あたしはヨミに音ゲーについて簡単に説明する。ヨミは納得したよ  
うで「ああ」と声を漏らした。  
あたしは更にアリサに質問する。

「何の音ゲーをやるの？」

するとアリサは「ふっふっふー」と笑い出し「これだ！」と言って  
指を指した。

アリサが指を指した音ゲーは、

「何これ？箱？」

ヨミがこう言うのも無理はない。アリサが指しているやつは確かに  
箱のような機械だからだ。

「これも音ゲーだよ」

あたしがヨミに説明し、それを聞いたヨミは再び箱の形をした音ゲ  
ーの台を見る。

「ボタンが多くて大変そうね」

「ああ、確かにそうだね」

あたしはこのゲームをしたことはないが、確かにボタンが十六個も  
ある。

そんなことを言っているとアリサが、

「慣れればそうでもないぜ」

と言った。

「まあ、見てなって！」

アリサはそう言ってゲームをやりに行く。

お金を入れてゲームを起動し、曲を選ぶとやがてゲームが始まった。

「凄い……！」

あたしは思わず声を漏らした。アリサは細い腕を素早く動かし、次々とボタンを押していき、コンボを繋げていく。

そして曲が終わり、アリサがあたしたちの側に寄って来る。

「こう見えてあたしは音ゲーの神と呼ばれてるんだぞ！」

ドヤ顔のアリサに対し、あたしたちは拍手をした。

次にあたしたちは何のゲームをしようかと店内を歩いていると、

『……面白そうなことをしているな』

「あ、クロ？」

クロの声は頭に直接響くので直ぐにわかる。

「もしかして今起きたの？」

『ああ……』

あたしの声はゲーセンの音でかき消されるため、前を歩くヨミとアリサには聞こえない……はず。

『ここはゲームセンターか？』

「うん、そうだよ。……知ってるの？」

『ああ、前にネットで知った』

「またパソコン使ったの？別に良いけど」

クロは普段、力がオーバーヒートしないように深夜変身している。その際、クロは本を読んだり、テレビを見たり、ゲームをしたり、さっき言った通りパソコンを使ったりしている。

「何かゲームする？」

『良いのかっ！？』

「う、うん」

余程嬉しいのか、クロはかなりテンションを上げて『じゃあ変身するぞ！？』と言った。

そして服はそのままクロに変身する。

「マトは何かやりたいゲームある？」

ヨミとアリサがあたしに振り返る。

「ああ！」

そんな二人に対してクロは言う。

「シューティングゲームをやってみたい！」

「シューティングかあ、マト得意なのか？」

「いや、やったことはないが自信はある！」

「ならやるか！ヨミも良いよな？」

「あ……え、ええ。……？」

クロに変身したことで髪が伸びていることにアリサは何ともないけど、ヨミはなんだか怪しい。

「……うん、良いわよ」

だけど直ぐに、ヨミはいつもの穏やかな顔に戻り、あたしはひとまずほっとする。

やることになったゲームは、銃で敵を射つガンシューティングだ。1Pがクロ、2Pがアリサでゲームが始まる。

クロは自分の戦闘能力の高さを最大限に使い、敵の人形アンドロイドを次々と倒して行く。

「マト上手いなっ!」

「上手っ」

二人にもそう言われる。果てにはノーダメージで一面をクリアした。結果、アリサは途中でゲームオーバー、クロはなんと無傷でラスボスを倒すという異例なハイスコアを叩き出す。

次にあたしたちは、何のゲームをやるか考えながら店内を歩いていると、あるゲームが目に入る。

「格ゲーでもするか?」

そのゲームは格ゲー、格闘ゲームだ。

「……これは操作がよくわからない……」

クロは口を片手で覆う仕草をしながら言う。

「大丈夫だって、ボタンを押して相手を倒すだけだし!」

アリサがそう言うてくる。

「……つまり、張り倒せば良いのか?」

「ああ！」

「……なら、やってみる」

クロが少しやる気をだし、ゲームをやり出した。

しかし、

「なっ！？」

あっさりCPUにコンボを決められ、負けてしまった。

「……」

そして落ち込むクロ。なんだろう、クロって不器用なのかな？

すっかり元気を失ったクロは「もういい……」と言って、あたしに戻った。

その後、可愛いぬいぐるみがあった為、クレーンゲームをすることになった。

ヨミが挑戦してみるが、

「あっ」

アームがぬいぐるみを持ち上げた瞬間、ぬいぐるみはすぐに落ちてしまった。

「これ……どうしたらいいの？」

「え？何か言った？」

「え、ああ。どうすれば取れるのかなぁーって」

ヨミは声を大にして、ようやくあたしは聞こえた。

「うるさくて何言ってるのかわかんないや」

あたしは軽く笑う。

「あたしが取るよっ！」

あたしはそう言ってクレーンゲームに挑戦する。  
アームを器用に使い、そして……っ！

「っ！取れた！」

無事にヨミが欲しがっていたぬいぐるみを取ることに成功した。  
それをヨミに渡す。

「ありがとう、マト」

「いいっていいって！」

内心、良かったぁー取れてと思った。

その後、色んなゲームをやった。レースゲームだったり、コインゲームをやった。

ゲーセンを出て、あたし達は電車に乗り、帰路に着いた。アリサとは途中で別れ、あたしとヨミは地元に戻り、いつもの別れ道で別れた。

「じゃあね!」

「うん、じゃあ」

あたしはすぐ近くの自宅に向かう。  
すると、

「黒井……マトさん、ですよね?」

後ろから話しかけられる。振り向くとそこには黒いパーカーにスカートの格好、セミロングヘアの女の子がそこにいた。

『敵だ!マト!』

クロが叫び、あたしはおどおどと困惑していると、クロに変身した。するとすぐに周りの景色は黒い世界に変わる。

「お前は、【マギ】か」

「覚えていたんですか……」

マギと呼ばれた女の子は無機質な表情で答える。

「お前が来たということは、【キング】が動いたのか……?」

キング？

今までクロからそんな単語は聞いてはいない。

「さあ、どうでしょう」

「まあいい。さっさとお前を倒すことにしよう」

クロはロックキャノンをマギに向ける。

「それは不可能でしょう。【ここ】では私が有利です」

マギは銃と剣を合わせたような武器を構える。

そして、戦いが始まった。

## 異質（後書き）

感想・質問などお待ちしております。

王者（前書き）

AKI

「なんとか更新しましたっ！」

BRS

「……皆の敵は私の敵だ」

AKI

「いきなりどつたの？」

BRS

「……いや、何でもない。ただの一人言だ」

それでは始まります。

## 王者

私はマギにロックキャノンを放つが、放った弾丸はあっさりと避けられる。

「動きが単純過ぎますね」

そして今度はマギが自らの武器で弾丸を放って来る。  
私はそれを避けた

「っが!!」

はずだったが、当たってしまう。

何故だ、今のは完全に避けたつもりだったのに……？

マギは次に斬りかかって来る。

私はそれをブレードで受けた。だが

「……甘いですよ」

マギはそれをするりと避け、斬りかかる。私はとっさに避けた為、斬られたのはコートだけだった。

「次は外しません」

「くっ」

このままでは負ける。

どうしてだ？ 奴より私のほうが戦闘能力は上のはずだ。

「まあ、待ちな。マギ」

(っ！！！！！)

その声を聞いた瞬間、私の身体はビクツと震える。

黒い霧のようなものから、ある男が出て来た。

長身で黒いスーツを着た男。

空中に浮いているその男は禍々しいオーラを放っている。

『クロ、誰？ あの人……』

「……あいつは……」

私はマトに男について話す。

「……奴こそが、黒き使徒の根源……【キング】だ……っ！」

そして、裏世界の創造主でもある。そして、私の……

『黒き使徒の……根源……』

「そうだよ。初めまして、黒井マトさん。以後、お見知り置きを」

そう言ってキングはお辞儀をする。

そんなキングに私は問い質す。

「……キング、お前が現れたと言っことは……。本格的に表世界を支配するつもりか？」

キングは唸り、応える。

「……微妙！」

その応えに、私は呆氣にとられる。

「……正確に言つと、半分壊して、半分乗つとる」

『どついうこと……？』

「まあ近々わかるさ。話は変わるけどね、今日俺が現れたのにはある理由がある！それは何だ！」

「知るか」

「まず一つ目は愛する娘のパートナー、マトちゃんに会いに来たのだ！」

『え？私？』

「そう！それでもう一つある！それは何だ！？」

「だから知るか」

「もう一つの理由は……」

最近、遊びが過ぎる娘を叱りに来たんだ……」

「！」「！」

そのキングの声は、さっきまでのヘラヘラしていた態度とは違い、ドスの聞いた声だった。

そのキングの言葉にマギが反応する。

「……ご主人様直々に相手をするのですか？」

「いや、ただ遊ぶだけだ」

そう言うキングに私はブレードで切り掛かる。

「おっと！」

だがあっさりと避けられ、私はキングの反撃の蹴りを食らい、地面

に叩きつけられる。

「いきなり危ないなあ〜」

キングは私を見下しながらそう言うと、あるものを召喚する。

『っ！あれって！？』

「！」

それは以前、ヨミを取り戻す為に戦ったデッドマスターの使っていたドクロだった。

「まあ、当たり前か……っ！」

『どうということ！？』

私はマ트에説明しようとするが、キングがどこからか持って来た武器、恐らくスカルヘッドと同じように召喚した刀で攻撃して来た為、私はギリギリのところで避ける。

「そおらっ！！」

攻撃を避けるので精一杯だ。以前のデッドマスターなら喋る余裕があるが、キングの場合、余裕が全然無い。

キングはスカルヘッドを使い、私を囲むようにして攻撃して来る。

「……くっ！！」

「どうしたあーっ！！？さっきより動きが鈍っているぞっ！！？」

マギは攻撃して来ないが、キング一人だけでかなり危険な状況だ。

「そおら、そこだっ！！！！」

「……くっ！！」

回避が間に合わない為、私は自らのブレードで刀を受けようとしたが、

「なっ！！？」

マギと同様、あっさりと避けられ、私に直接攻撃して来た。

「くっ！！」

私は間一髪のところ回避したものの、またロングコートを斬られてしまった。

「……」

『……クロ？』

私は立ち直り、キングを睨み付けながら、コートを脱ぎ捨てた。

ロックキャノンを召喚し、キングに向けて連射する。

「……なっ！！？」

だがキングは避けようとすらしなない。

放った弾がキングに当たる次の瞬間……

——バチッ！！！！

キングの目の前で弾が消滅する。

（……何だ！？今のは！！！？）

もう一度ロックキャノンを射つが結果は同じ、キングに命中する寸前に弾が消滅する。

「何だ？もう終わりか？」

キングは嘲笑いながら言う。

私はロックキャノンを消して、ブレードで斬りかかる。だが……

——バチッ！！！！

今度は私が吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

更にそこにキングが私の腹部に蹴りを入れて来る。

「っ！！ぐはあっああああああっ！！！！！！」

想像を絶する痛みに襲われ、私は悶絶する。

肋骨の骨は折れただろう。

『クロっ！！？大丈夫！！？』

正直、大丈夫じゃない。

「……いやあ、つい力を入れすぎたよ、遊ぶって言っていたのに」  
私はよろめきながら立とうとするが、

「まあ止めはマギにさせるから……なっ！！」

キングは私を蹴り飛ばし、私は地面を引きずり倒れ込む。

「それまで、もう少し虐めるかな。あ！虐めるって言っちゃった！  
まあいいや」

キングは私の右足の脛の部分を踏み、そして……

——バキヤッ！！！！

「っ！！ぐああああああああああああっ！！！！！！！！」  
「！！」

——折られた。

私はあまりの激痛に悶える。

左目の炎は消え、力が抜ける。

『クロ！！？ねえクロ！しっかりしてっ！！！！』

……マトに痛みがなくて良かったと思った。

「あれえ？死んじゃった？」

キングが覗き込むように私を見る。

（何故、私はこんな様になっている？）

「死んではないみたいだな。よしマギ、止め刺せ」

キングにそう言われたマギが、横たわる私に銃剣を構えながら歩いて来る。

ここで、死ぬのか？私は？

そう思った、その時。

——ピキッ！！

暗い空にひびが入る。

「お？」

キングがそれを見る。

ひびはやがて大きくなり、そこから割れたように穴が空いた。

「！」

そこから、ある女性が現れる。長い黒髪に赤い角を生やし、全身鎧の様な装備をして、大剣を持っている。

その人物にキングが話しかける。

「……ゴールドソーか」

「ええ、お久しぶり、キング」

ゴールドソー。ヒメは大剣を構えて、そう言う。

「やはり、お前も裏切るのか」

「あら？私、最初から貴方に味方してなんていないけど？」

そう言つてヒメはキングに向けて、大剣を振るう。

キングはそれを避けるが、私はそれを見ててある疑問が浮かんだ。

（何故、さっきのように弾かなかったんだ？）

避けようとしなくても、弾けばいい話なのに。

そんなことを考えていると、急に身体が軽くなったように動けるようになる。

私は立ち上がり、すぐ近くまで来ていたマギを睨み付ける。

ブレードを構えて、斬りかかる。

「くっ!!」

マギはそれを避けきれず、銃剣で受け止める。

その様子を見ていたヒメが

「あんまり無茶はしないでね」

と言う。

「いや、大丈夫だ。行けるっ」

私はヒメと並び、キングとマギを見据える。

そんな私たちにキングは笑い、

「これからが本領発揮ってか？」

と言う。

それに対し、私たちはキングを睨み付ける。

「「その通りだっ!!!!」」



## 王者（後書き）

感想・質問などお待ちしています。

## 軍神（前書き）

どうもAKIです。

ここまで読んで下さった読者様には本当に感謝します。

もはや、この小説『ブラックロックシューター』ではないと思う人が多いと思います。

ですが、そろそろ終盤ですので最後まで付き合ってくれと嬉しいです。

## 軍神

### 【SIDE ユカ】

私は休日、繁華街にある本屋で、どの本を購入するか選んでいた時、ヒメが突然慌て出す。

『ユカっ！まずい状況になったわ、マトとクロが危ないっ！！』

「え！？」

私はヒメの言葉に驚く。

『とにかく、変身して直ぐ向かうわよっ！？』

「ち、ちよっと待ってっ！！」

さすがに人気の多いところで変身したり、裏世界に行ったりするのはまずい。

私は本屋を出て、人気の少ない路地裏に入った。

「良いわよ、ヒメ！」

そう言った瞬間、私の身体は紅い炎で包まれ、私からヒメに変身する。

そして、裏世界に行った。

【SIDE ヒメ】

裏世界をさまよう私は、あることが頭に浮かぶ。

（今回、クロを罫にはめた人物はもしかしたら……）

『ヒメ。マト達の居場所は判っているの？』

思考していた時、ユカが質問して来た為、私は移動しながら答える。

「ええ。何せ、今回は強大な力が動いているもの……。意識せずとも、直ぐに判るわ」

『そう……。なら良かった』

そのユカの言葉は何だか嬉しそうだった。

「……やっぱり、心配なのね」

私がそう言つと、ユカは『当たり前よ』と言った。

『だって、マトとクロ……。どっちも大切な友達なものっ』

「そうね……」

ユカとそんな話をしていると、ようやくクロ達のいる場所までやって来た。  
ただど……

『何……これ……？』

そこには巨大な黒いドーム状のようなものが存在していた。

『ヒメ、何なのこれは？』

「これは……」

私が答えようとした、その時……

「……………っ！」

背後から殺気を感じたので私は地面を蹴り、高く飛び上がる。  
すると下から爆発音が聞こえた。

地面に着地すると、さっきまで私が居たところはクレーターになり、そこから黒い障気が出ていた。

「……………邪魔はさせませんよ？」

その声を発した人物は、私を睨み付けてくる。  
黒いセミロングヘアに黒いドレスのような服装、眼鏡を付けている彼女は、

「セル……」

彼女の名は【セル】。確か彼女の能力は……

「そう……、そういえばこの【ダークホール】は貴女的能力だったわね」

私は黒いドームを見ながら言う。  
すると彼女は笑い、私を睨み付けてくる。

「そうよ、だから私を倒さない限り、このダークホールは破れない」  
そんなセルに私は笑い返して言う。

「なら、貴女をさっさと倒せば良い話ね。おかげで破壊作業なんて  
疲れることをしなくて済むわ」

私の言葉にキレたのか、セルは自分の武器である西洋風の長い槍と  
銀の盾を召喚する。  
怒りでわなわな手を震えてセルは言う。

「……キング様に逆らった罪……、お前はここで死ねっ……!」

セルはそう言って槍で突進して来た。

私はそれを軽く避けて、自らの武器【キングソー】でセルに振り下  
ろす。

しかし、その攻撃はセルのもう一つの腕にある銀の盾で防がれてし

まう。

「ウフフ、この盾は私のこのランスでない限り、どんな攻撃も防げるのよ?」

そのセルの言葉に私は笑い、宣言する。

「なら、私の剣はどんなものでも斬れるわ」

私はセルに剣を向け、そう宣言する。するとセルは呆れた顔になり、

「……貴女、矛盾って言葉知らないの?」

と言った。

「いえ、知ってるわよ? だからこれは矛盾にはならない。何故なら私の剣は何でも斬れるけど、貴女の盾は私の剣を防げないもの」

そう言った刹那、セルは私に槍で突いて来る。

「なら、斬ってみせろっ!!!」

突きを避けた私はその隙にセルに斬りかかる。

しかし、またもや盾で防がれ、セルには届かない。

「ほれっ!!!」

その瞬間、セルが再び槍で突いて来た。私は紙一重のタイミングで避ける。

「あら、惜しいわね」

私はセルから距離を取る。

「どう？私のこの戦い方には隙が無いのよ」

「隙がない……と言うか、ただ単に反撃重視の戦い方じゃない」

「あら？戦いにおいて、先手を打つより後手の方が常に有利なのよ？不意を突かない限りは」

確かに、セルの言うことにも一理ある。

私はダークボールを発動させ、セルに向けて放つ。

「無駄よ」

しかし、セルは自慢の盾でそれを防いだ。

セルは呆れた顔で私を見る。

「貴女のダークボールは私のダークホールと違い、直接当たらなければ効果はない。……いくら接近戦が駄目だからと言って、遠距離攻撃しても結果は同じ無駄なのよ」

そんなセルの話に耳を傾けず無視し、私は構わずダークボールを放し続けが、当然の如くすべて盾で防がれる。

「だから無駄よ。諦めて大人しくやられて頂戴」

それでも私はダークボールを放つ。

セルの辺りの大地はいつしか、無数のクレーターが出来るくらい私

は放し続けた。

私はいい加減ダークボールを放つのを止めると、セルは防御体勢から通常体勢に戻る。

「もう気が済んだかしら？」

私はキングソーを構え、地面を蹴り、セルに勢い良く斬りかかる。当然の如く盾で防がれ、セルは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「これで……終わりよっ！！」

大きな隙を生んだ私は確実に刺される運命だったが……

——バキンッ！！！！！！

「なっ！！！！？」

盾は真つ二つに割れ、私はそのままの勢いでセルを切り裂いた。セルは断末魔を挙げて、地面に倒れる。

「……な……んで……？」

まだ微かに息があるセルは私に聞いてきた。

「私のダークボールは生命体に限らず、当たったものすべてに効果があるのよ。さっきの攻撃は貴女を狙っていたのではなく、貴女の盾を狙っていたのよ。ダークボールを受けた盾はかなり脆くなったわ。おかげさまであっさり破壊出来たわ、ありがとう」

「……は……ハハ………」

セルは笑いながら黒い障気となり消滅した。  
後に残ったのは、二十歳くらいの女性だった。

私はその女性をとりあえず離れた岩影に寝かせる。

そして再びダークホールに戻って来た時、ユカが話しかけてくる。  
まあ何が言いたいのかは大体わかっていたが。

『あれ？ダークホール消えてないわよ？』

「やはりそこよねー……」

ダークホールは間違いなくセルの能力なのに、それで消えてないとなると、やはり……

「キング……」

私は呟く。そもそもそんな気はしていたが、これで確信が持てた。

『キングって、前にヒメが言ってた人？』

「ええ、そうよ」

とにかく、このままではどうにもならない為、

「破壊作業しますか……」

私はため息を吐きながら、地面を蹴り、ダークホールの上くらいまで高く飛び上がる。そして落下の勢いでそのまま……

「はああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

キングソーでダークホールを破壊し、私は内部に突入した。

内部に入った私は、とりあえず状況を確認する。  
クロはやはりと言うか、かなりボロボロだった。

キングに声をかけられる。

「……ゴールドソーか」

「ええ、お久しぶり、キング」

私はキングソーを構えて、そう言う。

「やはり、お前も裏切るのか」

キングのその言葉に私は笑みを浮かべて、

「あら？私、最初から貴方に味方してなんていないけど？」

そう言うって私はキングに斬りかかるが、あっさり避けられる。踏み

込みは充分したんだけど。

その後、何回か斬りかかったが全て避けられる。  
そんなやりとりをしている間にクロはマギに斬りかかっていた。  
そんなクロに私は

「あんまり無茶はしないでね」

と言う。

「いや、大丈夫だ。行けるっ」

私はヒメと並び、キングとマギを見据える。

そんな私たちにキングは笑い、

「これからが本領発揮ってか？」

と言う。

それに対し、私たちはキングを睨み付ける。

「「その通りだっ！……！」」

重なったその声にキングは目を見開き、笑い出す。

「ハハ……お前等めっちゃ仲良くなってんな？」

よほどツボにはまったのか、キングは腹を押さえて笑う。

そして、

「はー、はー……ハハ、何か久々に笑ったなー」

そんな隙丸出しのキングを斬ってやろうかと思ったが、キングから意外な言葉が放たれる。

「今日は俺達の負けだ。大人しく撤退しよう」

「「！！？」」

私たちは訳が解らず、お互い目を見合わせる。  
そんな私たちにキングはお構い無く喋る。

「マギ、撤退だ」

「……了解」

そして背を向けるキングとマギ。私はとっさに「待ちなさいー!」  
と言った。

「じゃあなブラッククロックシューター、愛しい娘よ」

キングは私のことを無視し、クロに向かって言った。

「何が愛しいだ……」

クロはキングを睨み付けて言い返す。

「そう怒らないでくれよブラッククロックシューター、さっきの暴行

は言わば愛さ」

「愛……だと？」

「そう、娘を叱るのは親の愛。グレた子供には時折殴つてでも叱れと、火サスの帝王も言っていた」

「……訳がわからん」

「だが、俺達は人間じゃない。だから殴ったところで効果は無い。さっきのように多少やり過ぎる程度が丁度いい」

「んな訳ないだろ」

「てなことだ、じゃあな」

キングはそう言い放つと、キングとマギは、まるで霧がだんだん消えていくように姿を消す。

私とクロは姿が消えたのを確認し、武器を下ろした。

しかし、クロはそのまま地面に倒れこむ。

『クロっ！！！？』

マトが叫び、私も心配して駆け寄る。

まだ意識があつたクロに私は言った。

「今は休みなさい、マトは私が表世界に返してあげるから」

「ああ……、そうして……くれると……助かる」

クロはそう言っただけで目を閉じた。するとクロからマトに姿が戻る。マトは落ち着かない様子で「クロ……、クロ!?」と言った。

「そんなに心配しないで、クロは今は寝てるだけだから」

私は安心させるように、なるべく優しい声で言った。

「そう、……良かった……」

マトは安堵する。

「ねえ、ヒメ？」

「何かしら？」

マトは普段とは違う真剣な顔をし、私に聞いて来る。

「いろいろ……、聞きたいことがあるの」

「……分かったわ」

## 軍神（後書き）

感想・質問などお待ちしております。

無駄（前書き）

AKI

「AKIです！」

マト

「黒衣マトですっ！」

AKI

「いやー、マト。今回で第3部終わりだよ？」

マト

「あっという間だったねっ！」

AKI

「はいっ！それでは本編どうぞっ！」

## 無駄

マトが一体何を聞きたいのか、私には大体分かっていた。恐らく、キング……

「何で、ヒメの角赤いの？」

「っ！？（ズルッ！）」

つい私は転けてしまった。てか……

「そっち！？」

今の流れだと、キングについて聞いて来ると思っていたのに……。

「……キングについては知りたくないの？」

逆に聞いてみた、すると……

「そのことはクロから聞いたよ？」

「そ、そうなの……」

「あ、でも詳しくは知らないから、それも教えて！」

「え、ええ……」

さすがマト、元気の良さと天然さが半端ではないわね。

「じゃあ先ずは、角が赤い件についてっ！」

そう言っつてマトはビシッと人差し指で1をしめすよう立てて私に向ける。

「……………えーと……………」

私は戸惑い、辺りを見回す。

「?、どうしたの?」

「いえ、自分の姿ってあまり確認してないから、角の色の变化なんて自分でも分からないの……………」

『……………確かにね』

私はどうするか考えていた、その時マトが……

「あ、鏡ならあるよっ?」

……………と言っつて、私服のホットパンツのポケットから手鏡を出して来た。

……………いろいろツッコミ所があったけど、とりあえず私は手鏡を受け取り自分の角を見た。

「あら、本当に……」

『赤になってる……』

何で、角変わったのかしら……。

「ヒメはもう悪者じゃなくなったから！……とか？」

「うーん……、そんな理由で変わるものかしら？」

ある意味、この疑問は永遠の謎かもしれない。

「じゃあそろそろ本題っ！」

「え、ええ、キングのことについて……」

「ヒメのブーツってかなりの上げ底だね？」

「っ！？（ガクッ）」

私は肩を落とす。

「……あの、言わせて貰うけど、そろそろキングについて説明して  
いいかしら？」

「あ、うん。いいよ」

私は軽くイラッと来たので、少し強引にキングの説明を始める。

「キングは、裏世界の創造主であり、私たち黒き使徒の産みの親であるの……」

「あ、だからあの人クロのことを娘って言っていたのかっ！」

マトは納得したように拳を手のひらに乗せる。

「ええ、まあ血縁的なものではないけどね」

「でもクロ、キングのことを相当毛嫌いしてるよ、何で？」

「それは……」

私は少し間を置き、答えた。

「クロとキングには、特別な因縁があるのよ……」

私は、自分が知っているクロとキングの因縁について話し出した。  
ここからの話はユカにも話していない。

「この世界は数多くある平行世界の一つでしかない。  
そのことをまず最初に話しておくわ。」

キングは、自らの強大な力で裏世界を作り出した。

そして裏世界の住人であり、自分の下部である黒き使徒を産み出した。

でも、最初は上手くいかず、出来上がった生き物には知性がなかった。

それでキングは、完全なる黒き使徒を産み出そうとしたのよ。

そして年月が経ち、ついに完全な存在を作り出した。

それが……

ブラックロックシューターだったのよ。

「『っ！っ！』」

でもキングは直ぐ、あることに気付く。

それは、キング自ら目標にしていた【完全性】についてだったのよ。

キングは、クロのあまりにも強い戦闘力と高い知能を恐れて、排除しようとしたのよ。

でもクロは、その戦闘力で何とか生き延びただけだけど、キングは次々と黒き使徒を使って追い討ちをかけたのよ。

それが、キングとブラックロックシューターの対立のきっかけよ

……」

私は大体の流れを話した。

するとマトは顔を俯き、ふるふる震えて「酷い……」と呟いた。

「だって、クロは何にも悪いことしてないじゃんつ、それなのに、そんな勝手な理由で、排除なんて……」

「……ええ、だからこそクロはキングのことを完全悪と認識したのよ……」

私たちが暗い雰囲気になっている時、

『……そういえば、何でヒメはそんなにキングのことに知ってるの?』

ユカが口を開き、そんなことを聞いて来た。

「キングに聞いたのよ」

私は特に何もなく答えた。

「『えええーっ!?!?』」

しかしマトとユカは驚きの声を挙げる。

「だ、だってだって、キングとは敵でしょ?何で?!?」

ぐいぐい迫り寄って来るマトを引き離しながら説明する。

「私はクロとは違い、キングとは特に対立しなかったから、立ち話程度で聞いたのよ」

するとマトはポカーンと呆気にとられたような顔をして「そ、そうなんだあ……」と言った。

「まあ、仲間意識もなかったわね」

「でも、ヒメってクロと対立していたじゃん、それは何で?」

「それは……」

私は口隠る。でもここはスパッと答えることにした。

「……気に入らなかったのよ……」

「気に入らない？」

「ええ、……だって私たちみたいに知性のある黒き使徒は、元をたどればクロをモデルに作られたのよ。……まあ私は認めないけど」

「なるほど、ジェラシーってやつだねっ！」

「ジェラシーというか、ムカついたわね……」

そんな話をしているとユカが口を開いた。

『でもヒメ、今は……』

「ええ、今は気にしていないわ、……むしろ仲が良いじゃない」

そう言うと、マトとユカがクスクスと笑い出した。……な、何がそんなにおかしいのよっ……。

特に話すこともなくなったので、私たちは表世界に帰ることにした。セルに取り付かれていた女性を肩に担ぎ、空いてる手でマトの手を握り、帰ろうとすると、マトが深刻な顔をして話しかけて来た。

「ねえ、ヒメ？」

「……何？」

「また、キングと戦うことになるよね……」

「……ええ、そうね。……そして……」

「次の戦いが、恐らく最後の戦いになるわ……」

私はそう言っ て裏世界を去った。

無駄（後書き）

AKI

「何だか予定より随分短い話になってしまいましたが、どうでした？」

マト

「うーん……、短いとかよりも続きが気になるよっ！クロは結局どうなったの？」

AKI

「それは次回で分かることだから落ち着いて、ほら深呼吸」

マト

「すーはあー、すーはあー……」

AKI

「……落ち着いた？」

マト

「全然っ！」

AKI

「何でっ!？」

感想・質問などお待ちしております。



## 終末（前書き）

A K I

「どうも、ブラックロックシューターのアニメが待ち遠しくて仕方がないA K Iです」

マト

「どうもっ、新しいアニメの制服が可愛いと思っている黒衣マトですっ！」

A K I

「てな訳で、アニメですよマトさん？」

マト

「うんっ、凄く楽しみだよっ！」

A K I

「ゲーム版だとさっぱり出番がなかったから、今回は出れて嬉しい？」

マト

「うっ、その事は言わないでよ……」（泣）

B R S

「……まあ、それは置いて。本編始まります」



## 終末

季節は夏から秋へ。あたし達は学校が始まり、平凡な毎日を送っていたんだけど……。

「……………」

あたしは、やっぱりキングの件が頭から離れない。

それに、まだクロもあれから目を覚ましていない。

（クロ、大丈夫かな……）

あたしは部活の練習中も、そのことで頭がいっぱいだっただけ。軽い練習試合にも集中出来ずにいた。

（ダメダメっ！集中しよう、しっかりしないとっ！）

そう思ったあたしはとりあえず、仲間からボールをパスしてもらい、コートを駆け抜け、勢い良くシュートを決めた。

そんな時、

「…………痛っ！！」

【SIDE 小鳥遊ヨミ】

私はいつも通り部活の練習をしていた。二人一組になってレシーブの練習をしていた時、

「……痛っ!!」

(っ!?)

隣のバスケ部の練習場所からマトの声が聞こえた。

私はマトの方に顔を向ける。

マトは床に倒れ、何とか上半身は起き上がっている状態だった。

他のバスケ部の人も心配そうにして側に寄って来る。

するとマネージャーらしき娘がマトに駆け寄り、肩を貸しマトを起き上がらせ、隅の方へ連れて行った。

私は心配しながらその様子を見てみると、

「ヨミっ! サボらないのっ!」

「……っ!、はいっ!」

練習相手の先輩から注意されてしまった。

その後も、ちらちらマトの様子を見てみると、マネージャーの娘に  
応急手当をしてもらっていた。

（……マト、大丈夫かな……？）

部活が終わり、アリサは用事があるからと先に帰って行き、私はい  
つもの中庭のベンチでマトを待っていた。

しかし、やっぱりマトは直ぐに来なかった。

（……捻挫とか、かな……？）

マトの足のことがかく心配だったので、私は椅子には座らず、  
立ちながら待っていると、

「……いいよ」

（……っ！）

マトの声が聞こえたので私は、マトの方へ駆け寄る。

「ごめん、お待たせっ！」

「ううん。……足、大丈夫？」

「うん、軽く捻っただけ。……優秀なマネージャーにテーピングしてもらったし、もう痛くないよ」

そう言っただけ。マネージャーの娘の肩をポンと叩き、そのマネージャーの娘は手を上げて、

「どーも、優秀なマネージャーですっ！」

と私に向かって言った。

そして、その娘はマトの方へ向き直り話し出す。

「直ぐ治ると思うけど、しばらくは走ったり跳ねたりしちゃダメよ。今日のお風呂は短めに、足温めないように」

「ああ、はいはい」

「明日の部活は様子見だね」

「ええっ！？それはヤダなあ……」

「言うこと聞きなさいよ、期待の一年生エースっ！」

マネージャーの娘はそう言っただけでマトのことを指差した。

「それ恥ずかしいから止めてえ……／／／／／」

するとマネージャーの娘は私たちに背を向け、

「じゃ、あたしはまだやること残ってるから、バイバイっ！」

そう言っただけで去って行った。

マトはその娘にお礼をしながら手を振る。

「……一年生エース……か……」

私がそう呟くと、マトが

「そんなんじゃないよぉ」と恥ずかしそうに言った。

私たちは歩きながら話をする。

「でも、春の大会には出させて貰えそうかも」

「へえ、頑張ってるっ！」

「うん、頑張るっ！」

## 【SIDE 黒衣マト】

あたしとヨミは学校を出て、それぞれの部活についての話をしていた。

その時、あたしはふと、あることが頭に浮かぶ。

「ヨミ、今ちょっと時間ある？」

「大丈夫だけど？」

「ちょっと寄りたいたところがあるんだけど、良いかな？」

「私は構わないけど、マトは足大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、普通に歩く分には問題無いし」

……と言う訳で、急遽あかし達は繁華街へ寄り道することにした。

寄ったお店は服屋だった。

「すごい、まだ秋になったばかりなのに、もう冬服売ってるよっ  
！？」

あかしは驚きの声を挙げた。

「マトはどんな服が欲しいの？」

「ん？いや、欲しいと言うか……あっ！この服可愛いっ！」

しばらくヨミと一緒に服を見ることにした。

（あっ！）

あかしはあるものを見つける。

見つけたそれを手に取って見ていると、

「マト、それ買うの?」

ヨミが聞いて来る。

「うんっ、これにするっ!」

あたしは満面の笑みでヨミにそう言った。

「そう……」

そんなあたしを見て、ヨミは微笑んだ。

あたしは目的の品を買い、再びヨミと店内を見て回っていると、

「あれ、咲子さん?」

「あっ、本当……」

服を見ていた咲子さんを見つけた。

「咲子さん、久しぶりっ!」

あたし達は咲子さんに話しかける。

「あっ、お嬢様、マト様……」

咲子さんはあたし達に頭を下げ、挨拶した。

「咲子さんは、どうしてここに？」

「少し、冬物を見ていたのですよ」

それを聞いたあたしは少し驚いた。

「咲子さんって、普段からこういう一般のお店で服を買ってるんですか？」

ヨミみたいなお金持ちさんのところのメイドなんだから、てつきり高いお店とかから、もしくは作って貰っているのかと思っていたけど……。

「そうですね、服に限らず私物は全て普通のお店で買っています。むしろ安い物を買っていますよ、部屋の家具なんかもリサイクルシヨップで集めた物ですから」

「へえ、そうなんだあー……」

あたしはふとヨミの顔を見る。

視線に気付いたヨミはあははと苦笑いして  
「咲子はしっかり者だから……」と言った。

「はい、なるべく無駄遣いしたくはないですから。あつ、でも別に生活が厳しいと言う訳ではありませんよ？」

あたし達はその後会話をして、そろそろ帰ろうかとヨミに言つと、

「あつ、待つて。咲子、今車ある？」

「はい、近くに止めてありますけど」

「ならマトを家まで送ってあげて。足怪我しているの」

「畏まりました、お嬢様」

咲子さんはお店を出て行く。

「別にそこまでしなくて良いのに」

「良いのよ、足りなくなったら困るし……」

あたし達もお店から出る。

すると直ぐに車が来て、あたし達はそれに乗って帰宅した。

その日の夜。

あたしは今日買った服が入った紙袋を部屋のテーブルに置き、ベッドにダイブして仰向けになった。

腕を挙げ、特に意味も無く降ろす。

部屋の扉が開き、弟のヒロが晩御飯だと呼びに来る。

「……うん」

あたしはその後ご飯を食べ、お風呂に入り、歯を磨き、部屋着に着替えて再びベッドに仰向けになる。

腕を挙げ、特に意味も無く降ろす。

「……………クロ……………」

本当に大丈夫なのかな。……………もしかしたら、もう二度と目を覚まさないかも……………。

『……………ん』

「えっ!?!」

あたしはガバッと起き上がる。  
今の声は、

「クロ、クロなのっ!?!」

『……………ああ、私だ』

その言葉を聞いたあたしは安心し力が抜け、再びベッドに倒れこむ。

「……………良かった」

クロが無事に目を覚ましてくれて。

『……大丈夫だ、傷も完全に癒えた』

「……あ、でも一応確認の為に变身しといたら？」

『ん？ああ、分かった……』

クロはそう言うと、あたしの身体が青い炎に包まれ、クロに变身する。

「……うん、問題ないな」

クロは鏡を見て自分の身体を確認する。

『あ、でもコートが無いね……』

「ん、ああ。あの時に捨てたからな……」

あたしはそれを聞いて内心嬉しかった。なぜなら、

『クロクロっ、そこに置いてある袋を取って』

「ん？……ああ、これが」

クロは紙袋を手にする。

『中身見てみて』

「……？」

クロは紙袋から中身を取り出す。

「…………え？」

袋の中身は、星のマークがついた黒いロングパーカー。

「…………マト、これは？」

『えへへっ、良いでしょこれ？』

あたしは微笑み、クロに教える。

『それはあたしからクロへのプレゼントだよっ！』

「…………マト、本当に良いの？」

『うんっ！』

するとクロは嬉しそうにロングパーカーを胸に抱いて、

「…………ありがとう、マト。凄く嬉しい…………／／／／／」

クロは微笑み、そう言った。

『あつ、クロ笑ったっ!!!』

「え？」

『あたし、クロが笑ったところ初めて見たっ!』

「……………そうだな、笑うなんて初めてだな／＼／＼／」

クロはロングパーカーを広げて、

「着てみても良い？」と聞いてきた。

あたしは勿論良いと答え、クロはパーカーに腕を通す。

そして鏡を見て、

「……………どうかな？」と聞いてくる。

『うん、淒く似合ってるよ』

「……………フッフ／＼／＼／」

クロはターンをしたりポーズをとったりする。

「ありがとう、マト。大切にするね／＼／＼／」

『うんっ!』

\*\*\*

「はあ………」

暗い世界で、男は溜め息を吐いた。

男が立つ乾いた大地。辺りには無数の十字架が刺さっている。

「もうすぐ、もうすぐだ……、もうすぐ俺の理想の世界が完成する………」

男は狂喜に満ちた笑いを浮かべる。

「……ユキ、もうすぐだよ………」

男は、誰かに伝えるように呟いた。

しばらくすると、男の背後に二人の人影が現れる。

「……マギ、準備は良いか？」

男……キングはマギに聞く。

「はい、問題ありません」

するとキングは次にもう一人の少女に声をかける。

「ストレングス、お前は？」

「……大丈夫だ」

ストレングスと呼ばれた少女。

黒いパーカーのようなものを着て、頭にはその帽子を被っている。  
両腕には大きなアームのようなものを装備している。  
後ろに尻尾のような黒いアームも付いている。

キングは二人の返事を聞いて、ほくそ笑み二人の方に振り向く。

「……さあ、パーティーだ」

強大などす黒いオーラを放ったキングは、二人の少女を連れて表世界に向かった。

\*\*\*

終末（後書き）

A K I

「B R S 復活だねっ！」

B R S

「……ああ」

A K I

「少年誌だと、主人公が復活すると同時にパワーアップしてるパターンが多いよね？」

B R S

「ん？ああ、そうだな」

A K I

「だからっ、B R S にも新たな力がっ！」

B R S

「あるのかっ!？」

A K I

「いや、無いです」

B R S

「……無いのかよ」

感想・質問などお待ちしております。

強者（前書き）

ブラック ロックシューター

―ザ・ラストゲーム―

強者

朝、あたしは目を覚ます。

.....。

.....あれ？いつもはちゃんとアラームが鳴るのに、どうして鳴らないの？

「目を覚ましたか.....」

『え？クロ？』

あたしの身体はクロに変身していて、どこかの屋根の上に立っていた。

そして、何より.....。

『クロ.....、これって.....？』

辺りを見渡す限り、ここはあたしの住んでいる町だ。

だけど、何かが違う。一言で表せば異質。空は暗く、雰囲気の不気味だ。

まるで裏世界だ。

「これは恐らく、表世界が裏世界に取り込まれているんだと思う……」

深刻な顔をしてクロはそう言った。

『……でも、それなら何でこんなに静かなの？』

こんなふうになっていたら町全体でパニックになっていて普通なのに……。

「あれを見る……」

クロは下の道路に向けて指を差す。そこにはジョギング中の男性がいた。

『え？何でっ！？』

でも、その人は不自然なまでに固まっていた。まるで時間が止まったように。

「……どうやら、この状況に気付いているのは私たちだけらしい……」

渴いた風が吹く。

『……………これをやったのって、キング？』

「奴しかないな……………」

『……………これをどうにかするには……………』

「奴を倒すしか無いな……………」

【SIDE ブラックロックシューター】

私はとりあえず、力の反応の方向に向かった。

屋根を蹴り、建物の間を飛びながら移動するその途中、

「あら？クロじゃない」

同じく力の発信源に向かうヒメと合流した。

「やはりお前も動いてたか……………」

「そりゃそうよ……、それに……」

ヒメは暗くなってしまった空を見る。

「キングを倒さないと、表世界は消えるわ。……そうなら……」

「……………世界の終わりだな……………」

私たちは何としてもキングを倒さなければならない。

恐らくキングは今回、私たちと最後の戦いをするつもりだ。

そんなことをしている間に、私たちは力の発信源にたどり着いた。

『ここって……………』

マトが言い、ユカも言う。

『私たちの学校じゃない……………』

そう、ここはマト達に通っている学校だ。

私たちはグラウンドに入り、武器を構える。

私はブラックロッキヤノンを、ヒメはキングソーを構える。

やがてグラウンドには黒い障気が湧き、それは私たちの目の前で塊となる。

そして、そこから現れたのは……

「また、お前か……」

銃剣を構える、その存在は以前戦った【マギ】だった。

それと同時に私はまた別の場所に力の反応を確認する。

「お前は時間稼ぎを命じられているのか……？」

「……………」

私は睨み付けながらマギに問うが、何も言わず、ただ武器を構える。

私は戦闘体勢に入ろうとしたが……

「…………クロ、ここは私に任せて貰えるかしら？」

ヒメに制止されそう言われた。

確かに、さっき現れた力の反応が恐らくキングだろうから、ここはヒメに任せたほうが得策かもしれない。

しかし、

「……大丈夫か？」

私が戦った時、マギはかなりの実力を持っていたはずだ。

「あら、私を過小評価しないで貰える？」

ヒメは顔に笑みを浮かべてそう言ってくる。

「……分かった、任せる」

その顔を見て大丈夫だろうと思った私はその場から立ち去ろうとする。

『っ！？クロっ、良いのっ！？』

当然の如く、マトがそう言ってくるが、

『マト、私たちは大丈夫だから』

ユカがそう言う為マトは『でも……』と言ったが、

『……分かった、でも絶対あとで無事に合流しようねっ!』

マトがそう言うと、ユカとヒメは『「勿論よっ!」』と応えた。

私は地面を蹴り、キングのもとへ向かった。

# 【SIDE ブラックゴールドソー】

クロが向かったのを確認した後、私はマギを見据える。

「……無理な約束はしないほうが良いですよ?」

マギは無機質な顔で言い放つ。

私はキングソーを片手で素振りをして言い返す。

「無理な約束じゃないわよ?」

そう言うと、マギは微かに反応した。そして銃剣を構える。

私もキングソーを構えると、マギは地面を蹴り、刃先で私に斬りかかる。

私はそれを避けて、反撃に上からキングソーを降り下ろす。

マギはそれを紙一重のタイミングで後ろに飛び、回避する。

私とマギは改めて体勢を整え、武器を構える。

今度は二人同時に相手に斬りかかる形になった。

そしてお互いの刃と刃が重なり合う。

私はマギの目を見ながら言い放つ。

「さあっ、ひざまずきなさいっ！」

【SIDE ブラックロックシューター】

私は新たな力の発信源に向かうなか気付いた。

（もとの場所に戻ってるな……）

マトが住んでいる街に戻っている。もしかしたらキングの居場所は……。

『っ！クロ、あれっ！』

私は力の発信源にたどり着いた。場所はいつもヨミと待ち合わせしている所だ。

そこにある人影があった。

見る限り、キングでは無い。

黒いフードを被り、両腕には大きなアームを装備し、後ろには尻尾のようなアームも付いている。

私はブラックロックキャノンを召喚し、構える。

その存在は私に顔を向ける。どうやら女性のように、大体マト達と歳は変わらないだろう。

その存在は声を発する。

「マト、今はブラックロックシューターだっけ？」

『えっ!?!』

マトはその声に驚く。

『もしかして、ユウ……なの?』

「うん……」

どうやらマトの知り合いのようだが、

「……お前、只の黒き使徒じゃないな?」

「……そうだよ」

私は気付いた。この黒き使徒は同じ個体に一人しか確認出来ない。

「あたしは寄生型だからね……」

その存在はそう言う。

「そんな寄生型<sup>モ</sup>まであるのか……」

「うん、寄生型は自我も存在しない。その代わり取り付いた人間に黒き使徒の知識と力、キングへの忠誠心が植え付けられる……」

「取り付いた人間をそのまま黒き使徒にするのか、……確かにそのほうがコストはかからないな……」

私たちはある程度話をすると、マトが声を挙げる。

『ユウ、やっぱり敵になるの?』

そのマトの言葉に、ユウと言われた存在は若干悲しい顔になり、応えた。

「……うん、それがあたしの使命だしね……」

そして両腕のアームで構えをする。

私はロックキャノンを消し、ブラックブレードを召喚して構える。

戦闘に入る前に、そのコは言った。

「あたしの名はストレングス。暗黒空手の師範代だっ！」

私たちは戦闘に突入した。

## 策略

### 【SIDE ブラックゴールドソー】

私はマギと幾らか切りあいを続け、後ろに飛んで距離を取る。

「……このままじゃあ、埒があかないわね……」

そう言い私は左手を上に向けて突きだし、指パッチンをする。

すると、グラウンドは突如現れた黒いドーム状のもので包まれた。

それを確認したマギが言う。

「……ダークホールですか……」

「そうよ、……【セル】だから奴からコピったのよ」

マギは少し間を置き言う。

「……………流石、女王ですね」

その言葉に私は笑みを浮かべた。

「女王……ね、私は今はお姫様なのよ？」

私はキングソーでマギに斬りかかる。しかし、それはフェイントで、マギの目の前に残像を残し、その隙に背後から切り裂く。

「……そんな子供騙し……」

マギはそれを鮮やかに回避し、私に言う。

「だれが子供騙しですって？」

私は、2体目の残像に話し掛けるマギを尻目に、死角から切り裂く。

「……なっ!？」

マギは身体を咄嗟にくねらせ回避しようとするが、私は切っ先で腹部を切り裂く。

そしてまた距離を取るが、マギは苦い表情で斬られた脇腹を手で押さえる。しかし、そこからはかなり出血している為、マギの表情は段々険しいものになって行く。

「……………何で、私が……………」

マギはそう呟き、私はそれに答える。

「……貴女はこう思っているわ。  
何で？自分はダークホールの影響を受けないようにしているの  
と」

「……知っていたの？」

私の考察にマギは目を丸くし聞いて来る。

「ええ……、以前のダークホールの時にそうなんじゃないかなと思  
ったのよ」

するとマギは全身の力が抜けたように地面に倒れた。

「ねえ……、何でそんなにキングに尽くすの？……貴女程の使徒な  
ら、間違っているのは明らかにキングだと分かる筈なのに……」

私はそんなマギに聞く。

するとマギは今までの無機質な表情から、優しい笑みを浮かべて答  
える。

「……それでも……私の……お父さんだから……」

そしてマギは目を閉じ、

「……ご主人様……、どうかご無事で……」

そう言ってマギは黒い障気となって消滅した。

『終わったの？』

ユカが口を開く。

「ええ……」

私はクロの元に行くため、学校を去ろうとしたが……、

「……流石マギ、時間稼ぎの目的は果たそうと……」

『どうしたの？』

私が校門から出ようとしないので、ユカが不思議そうに聞いて来る。

「……結界の様なもので覆われてて、外に出られないのよ……」

『えっ、じゃあどうすればっ！？』

私は顎を手で抑え、考える。

「……恐らく、この学校のどこかに結界を形成しているものがある筈よ」

そう言って私は校舎のほうへ向かった。

【SIDE ブラックロックシューター】

「いざ、参る！！」

ストレングスは地面を蹴り、まるで瞬間移動したかのような踏み込みをし、腕のアームで突きを繰り出してくる。

私はそれを横に飛び回避するが、

「なっ！？」

ストレングスの長いアームで私の片足は捕まれ、そのまま引き寄せ

られる。

そして……

「……………破っ！！」

私の溝落ちにストレングスの正拳突きが入る。

「がは……………っ！」

予想を遥かに上回る衝撃が身体中に襲い掛かる。

私は地面に倒れ、相手に大きな隙を与える。しかし、

「……………」

（……………？）

ストレングスはそんな私に追い打ちしようと思わず、黙って見ているだけだった。

私はある程度楽になった為、体勢を整え、ストレングスに質問する。

「何故さっき、攻撃しなかったんだ？」

ストレングスは口を開く。

「……それは武道に反する」

そしてストレングスは再び構えをする。

正直に言うと、さっきの技をもう一発喰らったら、かなりヤバイ。

今は何とか無傷だが、今度は肋を中心に全身の骨が砕け散るだろう。

私はブレードを握り、構えをとる。

何とか攻撃を受け流し、反撃出来れば一気にかたがつく……。

今はそれに集中するしかない。

そしてストレングスは動いた。

「推して参るっ！……！」

ストレングスはさっきと同様、かなり速い踏み込みで正拳突きを繰り出してくる。

私はそれを受け流すことに成功した。

背後に回った私はストレングスにブレードで斬りかかる。

だが、

「……………なっ!？」

ブレードで斬りかかろうと降り下ろした私の右腕は、ストレングスの背後に付いていた尻尾のアームで捕まれた。

「……………油断大敵」

ストレングスはそう言って私に向き直る。  
そして、そのまま正拳突きの構えをとる。

(……殺られるっ！)

私は出来る限りの防御体勢に入るが、さっきの威力を考えると余り意味は無い。

私は覚悟を決め、唇を噛んだ。

その時！

——ガッ！！！

横から突進して来た何かによって私たち二人は吹き飛ばされた。

だが、結果的には助かった。

私はその物体を確認する。

「……なっ！？」

『……クロ、これって』

私もマトも目を見開く。

それもそのはずだ。その物体は、

「……スカルヘッド」

ドクロの顔をした物体。

それは以前、ヨミに取り付いていたデッドマスターが使っていた援護武器の一つ。

一応、キングも扱っているが、奴が私を助ける理由はない。

ということは……、

「……………危ないところだったわね、クロ？」

私の目の前にある人物が現れる。

「……………デッドマスター、何でお前が……………っ!？」

その人物はまさしくデッドマスター。

ヨミの身体に取り付いていた時と全く同じ容姿をしている。

「……………何故お前が生きているっ!？」

デッドマスターは確かに以前、消滅した筈。

「死んでないわ、生きているわよ」

デッドマスターは、なに食わぬ顔でそう言った。

そして続けさまに驚きの発言をする。

「ねえ、ヨミ!？」

『……………っん』

「『なっ！？』」

私とマトは再び目を見開く。

『……ヨミ、ヨミなのっ！？』

『うん、私よ』

マトはデッドマスターの中にいるであろうヨミに話しかける。

……何故だ？無理矢理取り付かれた場合、取り付かれた人間の意識は気絶しているはず。

意識があるということは……、

「まさか、契約したのかっ！？」

「あら、鋭いわね？」

デッドマスターは意外そうな顔をする。

そして

「簡単に説明すると、貴女にボコられた後にヨミと契約したわ……  
そして」

デッドマスターが説明を続けようとした時、私より遠くへ飛ばされていたストレングスが戻って来た。

「……まあ、説明は後でするわ、ここは私に任せて先に行つて」

デッドマスターは鎌を構え、私にそう言った。  
私は疑問の言葉を発する。

「……何故、私の味方をする。私とお前は……」

敵だと言おうとした時。

「親友だからよ……」

とデッドマスターに言われた。

(まさか……………)

私はあることが頭に浮かんだ。

「さあ、早くっ！」

デッドマスターは再び構える。

「……………分かった」

私はその場に背を向ける。

『ヨミっ！！』

立ち去る前にマトが声を挙げる。

『何だか、よくわかんないからっ、後で必ず説明してよっ！?』

するとデッドマスターは私の方を向いて、

『勿論よ』

とヨミが答えた。

【SIDE デッドマスター】

私たちはクロ達が行ったのを確認した後、ストレングスの方に目を向ける。

「……………デッドマスター、生きていたのか」

ストレングスはそう言った。

「ええ、奇跡的にね」

私は鎌を構え、スカルヘッドを配置につける。

ストレングスも構えをとり、私はスカルヘッドと共に突撃した。

「……………レッツ・ショータイムっ！！！」

## 臨場

それは、少し前の話。  
まだ春頃の時だったと思う。

朝

私はいつものように着替えて朝食を取り、学校へ行こうとしたけど、

『……………う、うう……………』

「っ！！？」

部屋で荷物確認していた時に、私の頭に直接響くような呻き声が聞こえた。

『……………小鳥遊……………ヨミ、か？……………』

その声は私に聞いて来る。

「そ、そうですね……」

『……そう、なら私は完全に消滅してはいなかった……という訳ね……』

その声はなにやらぶつぶつ呟いていた。  
私はその声に質問する。

「あの……貴女は誰なんですか？」

『……私の名前はデッドマスター、貴女の身体に取り付いた悪魔よ……』

「え……？」

悪魔という言葉にも驚いたけど、私はそれ以上に『取り付いた』という言葉が引っ掛かった。

私は頭を抑える。

「……もしかして、あれは本当にあった事なの……？」

『っ！？……記憶があるの！？』

「……ええ、ぼんやりとだけ……」

私が暗い世界でマトと戦ったことは思い出せる。

『……驚いたわ、まさか記憶に残ってるなんて……』

「うん……」

『貴女の言うように、私はブラックロックシューターと戦ったわ……』

「……貴女が私の身体乗っ取ったから？」

『ええ、そうよ……』

「……貴女はマトの敵なの？」

『……敵だったわね……。でも私はこの通り、もう貴女の身体を乗っ取る力さえ残ってないわ。……ブラックロックシューターにこの事を教えて、私に止めを射して良いわよ？……もう、どうでも良くなったから……』

デッドマスターは寂しそうにそう言った。

私はそんな彼女にあることを言う。

「なら、もう少し話を聞かせて」

『え……？』

「だから、そもそも貴女は何なのか、そのブラックロックシュータ

「は何者なのか、何で私の身体を乗っ取ったのか、聞きたいことは山のようにあるわ」

そう言った私に、デッドマスターは戸惑いながら言ってくる。

『わ、私は悪魔なのよ？貴女の身体を乗っ取ったのよ？』

「うん、でも……」

私は一呼吸し言った。

「貴女は何か悪い人では無い感じがするの」

『——っ！』

デッドマスターは何も言わない。多分呆れているんだと思う。

『……分かった、私の知っていることは全て話すわ……』

私は咲子に今日は学校を休むと伝えた。流石に普通の学校生活をす

る自信がなかったから。

私はデッドマスターからいろんなことを教えて貰った。

「じゃあそのキングって人から、今マトと契約しているブラックロックスューターを排除しろと命令されたのね？」

『ええ……、でも各の違いを見せつけられたわ。おかげでぼろぼろ』

「でも身体が治ったらまたブラックロックスューターと戦うの？」

『いいえ、それは無いわ。キングは多分私のこと死んだと思っているだろうし。……何より勝てる気がしないのよね……』

私とデッドマスターが話をしていると、

『お嬢様、少し宜しいですか？』

咲子の声がドア越しから聞こえて来た。

「大丈夫よ、何？」

『お友達がお見舞いに来ておられているのですが……』

「お見舞い……？」

私は首を傾げる。

『今日、風邪で休んだから心配して来てくれたんじゃない？』

デッドマスターがそう言う。

私は心配と聞いて、まさかと思った。

「もしかして、マト……」

『ブラックロックシューター？』

私は少し考え、デッドマスターに聞いてみる。

「どうすれば良い？」

『何で私に聞くの？』

「いえ、貴女のことについて話して良いかどうか……」

するとデッドマスターは溜め息を吐き、私に  
『言いたきゃ言えればいいじゃない』と言った。

「……わかった」

私は咲子に、その娘たちを中に入れてと言った。

暫く経つと、咲子が部屋をノックして来て、お友達をお連れしましたと言った。

私がどうぞと言うと、マトとアリサが部屋に入ってきた。

二人は私のことを心配してきたけど、私は

「うん、大分良くなったよ。明日には学校行けると思う」と言った。

「そっかあ、良かったあー」

マトとアリサは安心したようだった。

するとアリサは私のことを見て

「その服、寝間着か？可愛いなあー」と言ってきた。

確かに私は朝に制服から着替え直したから、服装が部屋着になっている。

私たちは何気ないことを会話していた。

その時、マトが何かを思いだしたようで、私に聞いてくる。

「そっいえばヨミ！来週から期末テストだけど、覚えてた？」

マトは私にテストのことを聞いてきた。

「ええ、覚えてるわよ。どうして？」

するとアリサも

「いや、勉強大丈夫かなーと思って」と言った。

「うん、大丈夫よ。テスト範囲は大体覚えてるから、後は復習すれば何とかなるわね」

私は特に問題はないということを伝えた。  
するとマトとアリサは二人して

「「そ、そうなんだ……」と不自然に言葉が被った。

「？、どうしたの二人共？」

私はそんな二人に聞いてみる。  
すると今度は焦った様子で

「「い、いやっ！何でもないよっ！」とまた被って言ってきた。

明らかに態度が怪しいので、私は少し考えてみた。

するとテストという単語で、大体二人が言いたいことに気が付いた。

私は笑いながら

「わかった、テストのこと忘れてたんでしよう？」と言った。

するとまた

「「お、おっしゃる通りです」」とまた被った。

『……奇跡的なまでのシンクロ率ね……』

マトとアリサには聞こえないデッドマスターの声が聞こえた。

その後、三人で話し合ったあと、マトとアリサはそろそろ帰ると言い、帰って行った。

私は部屋でデッドマスターに話しかけた。

「ねえ、デッドマスター？」

『？、何かしら？』

「さっき言ってた【キング】って人は今もマトのことを狙っているんでしょ？」

『……ええ、そうね。ブラックロックシューターがキングの計画の障害であるかぎりね』

その言葉を聞いて、私はある決意をする。

「ならデッドマスター、力が戻ったら、私と一緒にマトの力になってくれないかしら？」

私は覚悟して言った。

『……いいわよ』

「え……？」

てつきり反対されと思ったけど、

「良いの？デッドマスター？」

『ええ、いつ力が回復するかは、わからないけど……』

「それじゃあ、力が戻ったら、マトに私たちのことを伝えるわ」

『ええ、分かったわ』

それが、私とデッドマスターの契約だった。

\*\*\*

【SIDE デッドマスター】

私は鎌を構え、スカルヘッドを配置につける。

ストレンクスも構えをとり、私はスカルと共に突撃した。

「……………レッツ・ショータイムっ！！！」

そう叫んで、私は助走をつけたその勢いでストレンクスに鎌を振り落とす。

「——ふっ！」

……の振りをしただけで、私は鎌を当てる直前で瞬歩し、背後に回って斬りかかる。

だが、

「不っ！」

ストレングスは背後にある尻尾のアームで受け止められる。

そして、そのまま私に向き直り、突きの構えをして来る。

「っ！？」

なので私はストレングスの左右からスカルヘッドを突進させる。

私はストレングスの尻尾を握り締め、逃げられないようにした。

逃げられないストレングスはこれで終わりと思ったら、

「……………覇ア亞亞亞っっ！！！！！」

なんとストレンジスは、左右のスカルの突進を両腕で受け止めた。

（あのクロでさえ受け止められなかったのに……）

私は慌ててストレンジスと距離を取った。

私とストレンジスは互いに目を合わせ、様子を伺う。私は相手の気を逸らす為に

「……貴女、尋常じゃない殺気で私に攻撃してくるわね……」と言った。

ストレンジスは何も言わず、右腕を前に突き出す。

そしてストレンジスは何かを呟いた。

「小鳥遊ヨミ……、お前の存在は……許さない」

「……えっ!？」

その呟きにヨミが反応する。

ストレンジスは、突き出した右腕に黄色の炎を宿した。

「……破っ!」

そして炎を宿した右腕で私に向かい、正拳突きの〃振り〃をした。  
最初はその意味のない行動に疑問を持ったけど、それは疑問は次の瞬間に吹き飛ぶ。

——つ！！？

なんと宿した黄色の炎が拳の形になって飛んで来た。

油断していたのもあって、私はすれすれのところで避ける。

（……遠距離技もあるのね）

額に汗をかきながらそう思った。

ストレングスの攻撃はまだ終わらない。

今度は両腕に炎を宿し、そのまま何やら気合いを溜め始める。

「……ちよつと、まさか？」

私は焦り出す。

何故ならストレングスがやろうとしていることがわかったから。

「―――霸っ!!!!!!!!!!」

案の定、ストレンジスは何度も何度も突きを繰り出し、まるで機関銃のように炎の拳が私に襲いかかる。

私はすぐさまスカルを消し、回避行動に移った。

（当たったらひとたまりもないわよっ！！）

私は振りかかる拳の嵐を避ける。いつだかのクロの時と同様、走りながら左右に飛んだり転がったりして全弾回避した。

舞い上がる砂埃のなか、私は体勢を直して辺りを一瞥する。

近くの住宅や道路がかなりの巻き添えを受けていた。

道路なんて、まるで地割れが起きたような状態になっている。

（……………このまま戦闘が続けていたら、この辺り一帯は廃墟と化すわね…………）

このまま距離を取っていたら、また炎の拳を繰り出してくるだろう。

嫌でも接近戦に持ち込ませないと、こちらが圧倒的に不利だ。

「……はあ」

私はため息を吐いた。

仕方ないけど、ダメージ覚悟で接近戦を挑むことにした。

私は地面を蹴り、瞬歩で一気にストレング스에詰め寄る。  
すると彼女もわかつていたのか、接近戦の構えをしていた。

私の鎌とストレング스의アームが重なる。

そして、一旦離れて、また斬りかかる。

「……死力を尽くすっ！！」

何度も接近戦は続いた。金属音が辺りに響く。片方が少しでも気を抜いたら確実に死ぬ戦闘を続けた。

そして私は一旦距離を取るため空中に飛び、鎌をストレング스에投げつけた。

だけど、それはアームで握り潰され壊されてしまう。

「勝負を捨てたか？」

ストレングスはそう言って来たが、私は諦めた訳ではない。  
私はスカルを召喚し、それをまた別のモノへと変化させる。

とても長く、鋭い槍へと。

「これで……終わりよ」

私は降下の勢いを利用し、槍でストレングスへ攻撃する。

ストレングスはアームで防ごうとしたけど、

「無駄よ……」

私は冷たく言い放ち、槍を横に振ってストレングスの両腕のアームを破壊した。

「……まだ、問題ないっ！」

だけどストレングスはまだ諦めない。

損傷したアームを消し、素手で私に反撃して来た。

私は大体5mくらいある槍をそのまま勢い良く地面に刺す。そして手を離し、私はまるで吹き飛ばのようにストレングスへと突撃する。

「なっ!?!」

ストレングスは直ぐに避けようとしたが、回避する間も無く、私はストレングスの溝落ちに飛び蹴りを喰らわせることに成功した。

「ぐっ、……は……あ……」

ストレングスはそのまま地面に倒れ、動かなくなった。

私は電柱のように突き刺さっている槍を消す。

『ねえ、デッド?』

「何?」

私は自分の被害を確認しながら応える。

『あの娘は死んだの?』

「いいえ、さっきの手応えだと一応防御体勢は取ったみたいだから、まだ死んでないわ」

私は倒れているストレングスを見ながら言う。

『……ねえ、お願いしても良いかしら?』

「え?」

\*\*\*

あたしは、親友が欲しい。

友達は沢山いる。

でも親友はいない。

そんなあたしの前に現れたのが【黒衣マト】だった。

マトはその性格のおかげか、友達は勿論、親友もいたのだ。

（あたしも、マトの親友になりたい……）

でも、マトの側にはいつもあの女が、【小鳥遊ヨミ】がいる。

あたしは思った。

小鳥遊ヨミさえいなければ、マトは私と親友になってくれると思うたから。

でも、それは間違いだと気付いた。

わかっていたとしても、あたしは小鳥遊ヨミのことを恨んだ。

そして、チャンスがやって来た。なんと小鳥遊ヨミがあたしの敵として現れたではないか。

あたしは小鳥遊ヨミを殺そうとしたけど、返り討ちにあってしまっ

た。

恐らくあたしはこのまま殺されるんだろうと思った。

なのに、何で

「助けようとしているんだ」

デッドマスターは、あたしのことを助けようとしていた。

小鳥遊ヨミは応える。

『貴女が死んだら、マトが悲しむからよ、勿論私たちもね』

「あたしは……、お前の敵……なのにか？」

『ええ、だってマトの友達じゃない』

「お前を殺そうとしたのに？」

『ええ』

……嬉しかった。

それは、あたしの素直な気持ち。

「……貴女、泣いてるの？」

「え……？」

気付けばあたしは泣いていた。

「ああ……、嬉しくて……嬉しくて……堪らないんだ……」

デッドマスターは、そんなあたしに優しい笑みをし「そう」と言った。

「ねえ、小鳥遊さん」

『何？』

あたしは小鳥遊ヨミに話す。

「もし良かったら、あたしと友達になってくれませんか？」

その言葉に小鳥遊ヨミは微笑む。

『ええ、良いわよ』

## 終幕

【SIDE ブラックロックシューター】

ストレングスの相手をデッドマスターとヨミに任せた後、私はとある坂道を登っていた。

『クロ、こっちの道ってたしか……。もしかして、今向かっている所って……？』

マトはもう気付いているようだった。

そう、私が向かっている場所は……

『あたしの……お気に入りの場所……』

【SIDE ブラックゴールドソー】

「かなり時間食ったわね……」

私はようやく結界を破壊し、学校から出て、クロのいる方向へ向かっていった。

『まさか学校の地下室に仕掛けをしていたなんてね……』

「……て言うか、何で学校に地下室があるのよ……」

私はユカと話ながら目的地に向かい走る。

『……この街って、マトの地元……』

「そういえば、そうね」

駅らしき建物を通りすぎる。たしか木幡駅だったかしら？

私はそのまま走っていると、何やら見覚えのある人影を発見した。

「……っ！？ヨミじゃないっ！」

そのうち一人はユカの親友、小鳥遊ヨミ。でも今は頭に黒い角が生えているけど。

「今はヨミじゃないわ、私はデッド」

「デッド？……もしかしてデッドマスターっ！？」

確かに言われてみるとデッドマスターの特徴が見える。

デッドマスターは自分の後ろに立っている人物に手を向け「この娘は……」と説明し出す。

するとその娘はデッドマスターを手で制止し、私の元にやって来た。そして若干上目遣いで話し出す。

「あの、神足<sup>こうたり</sup>ユウです。良かったら友達になってくれませんか？」

そして何故か自己紹介をし始めた。お辞儀までするし、何なのこの娘？

別に、嫌では無いけど。

「え、ええ、別に構わないわよ。ねえユカ？」

『あ、うん』

「私の名前はブラックゴールドソー、ヒメで良いわよ？それで私と契約しているこの娘が鐘原ユカ」

『宜しくね、神足さん』

ちょっと取り乱したものの、私たちも自己紹介をした。

「宜しくヒメさん、ユカさん、あたしのことはユウで宜しく！」

「ええ、宜しくユウ」

そして握手。どうやら仲間が一人増えたみたいね。

一通り終えたので私はデッドマスターに訊ねる。

「クロはどこに行ったの？」

「この坂道を登って行ったわ」

そう言ってデッドマスターは別れ道の一つの坂道を指差す。

『この道は……？』

「ん？、どうかしたのヨミ？」

『もしかしたら、クロが向かっている場所は……』

どうやらヨミは何か分かったらしく、デッドマスターはそのまま坂道を登って行ったので、私とユウも後に続いた。

【SIDE ブラックロックシューター】

私はいつもマトが行っている高台の公園にたどり着いた。

「……いた」

そこには既に街の様子を見る男がいた。

私は公園内へと続く階段を登りながら、その男に話しかける。

「随分と大掛かりなことをやらかしたな、キング」

その男、キングは私の方へ向く。

「今回の計画は俺の全てでもあるからな……」

キングは階段を登り終えた私を、いつものようにふざけた表情ではない、真顔で言ってきた。

「始めるか、決戦を」

キングは両腕を構え、黒い炎を腕に宿す。  
そしてそのままストレングスのように正拳突きを構えをして来た。

『何をしているの?』

その端から見ると意味不明な行動にマトは首を傾げたように疑問の声を漏らす、私には大体キングがしようとしていることが予想出来た為、回避する準備をした。

「――――覇っ!!!」

そしてキングは正拳突きを振りをして、宿した炎は拳の形となり私に容赦なく襲い掛かる。

一発ならまだ避けるのも容易に出来るが、キングは繰り返し炎を繰り出して来るので、私はすれすれで避けるのがやっとだった。

「くっ!!!」

「どうしたどうしたああっ!!!さっきまでの威勢はっ!!!」

防ぐことの出来ない拳の弾丸を私はただ避けるしかない。反撃する隙もなかったからだ。

だが、拳の炎とはいえ、無限では無いようだ。キングは一旦攻撃を中断する。

「ふうー……」

キングの腕からは黒い障気が出ていた。どうやら腕に掛かる負担が大きいらしい。

私はその隙にブレードで斬りかかる。地面を蹴り、宙に飛んで振りおろす。

「——ふっ！」

キングはそれをバックステップで避ける。

だがそんなことは予めわかっていたこと、私はすぐさまロックキャノンを空いてる腕に装備し、キングに弾丸を連射した。

だが、

「甘い甘い!!」

キングはデッドマスターが使用していたスカルを召喚し、それを盾にして防いだ。

そして前回と同じようにスカルは私に向かって突進して来る。

私は以前と同様、ロックキャノンをブラックランス（マト命名）に形を変え、スカルを叩き斬る。

目の前のスカルはそのまま消失したが、視界が広がった私は絶句する。

キングは私がスカルの相手をしている間、ヒメが使うダークボール

をチャージしていたからだ。

そして私がスカルを消滅させた次の瞬間、キングはダークボールを私に投げつける。

「——くっ!!」

当たったら最後、戦闘力ががた落ちするので、私は全弾をすれすれのところで回避する。

「はあっ!!!」

私が安定した瞬間、キングは日本刀のようなブレードで私に斬りかかって来た。

一直線に突進して来たが、その速さは尋常では無く、目で追って見えないくらいのスピードだ。

普通なら回避するのが当たり前だが、それは本能的な感覚で潰され、私はランスで受け止めるという選択を取った。

——ガキンっ!!

金属音が鈍く響く、私はランスでキングの刃を受け止めるのに成功した。

「ほう、これを避けずに防ぐとはさすがだな。回避していたら真つ二つになっていたところだったぞ?」

キングは悪魔的な笑みを浮かべてそう言った。

お互いに一旦距離を取る。

「……あんまりだらだら長引くのはゴメンだからな、そろそろけりつけるか」

キングはブレードを消し、新たに何かを召喚させる。

「っ！！？」

私は目を見開く。キングが召喚した武器はブラックロックキャノンだったからだ。

「さあ、速撃ちといくかつ！！！！！」

【SIDE ブラックゴールドソー】

『クロとマト、大丈夫かな……？』

私たち三人が坂道を走るなか、ユカが不安そうに呟いた。

「大丈夫よ、ユカ」

私は説明する。

「確かにこの間はクロはキングに負けていたけど、それは【ダークホール】のせい。今回の勝敗が前回と同じになるのはあり得ないわ」

そもそもダークホールは私のダークボールと効果は同じ。違うのはダークホールは範囲型だということ。

その範囲内の使徒の戦闘力を下げるものなのだ。キングとマギは何かしらの対策をしていたんだろうけど。

「むしろ、ヤバいのはキングのほうかもよ？」

『え？何で？』

「だって、クロはキングにとって唯一の不安要素だったのだから、クロの戦闘力はキングに匹敵するかもしれない、むしろ上かもしれない」

『え、それって？』

「まあそれ以前に、私に勝ったクロが負けるはずがないわ」

私は自信満々に宣言する。そんな私にユカはクスリと笑った。

「でも、キングが本当に何もしない確証はない」

横にいるユウがそう言った。

「確かにね……、キングのことだから。急ぎましょう」

私たち三人はクロのもとへ急いだ。

【SIDE ブラックロックシューター】

一体どれくらい撃ち合いをしただろう。

キングと私はお互いにロックキャノンを連射していた。

だが、ブラックロックキャノンは無限ではない。

「くっ……！」

この武器は撃ちすぎるとオーバーヒートしてしまうのだ。

しかし、キングのほうはまだまだ余裕だった。

私は負けを覚悟する。

「……………終わりだ」

キングはそう言った。

私のブラックロックキャノンはオーバーヒートを起こし、戦闘不能となる。

そしてキングのブラックロックキャノンの弾丸が私に襲いかかる。

——しかし

「……………」

私の身体は蜂の巣になっていない。  
気づくと私の前にはある浮遊体があった。

それはデッドマスターが使うスカル。

「大丈夫、クロ！？」

そのスカルの上にデッドマスターが降り立つ。

どうやら私はデッドマスターに助けられたらしい。

確かにスカルはブラックロックキャノンを弾くから防ぐことが出来る。

私とデッドはキングに向く。

「デッドマスター……生きていたのか」

「ええ、このとおり」

キングは私たちに向けロックキャノンを放とうとする。

だが、

「波あ亜亜亜亜亜亜つ!!!!!!!!!!」

「っ!!!?!」

別方向からストレンクスが拳の炎をキングに放つ。

キングは咄嗟にロックキャノンで炎を撃ち消そうとするが、炎のほう  
が威力が勝る為、逆にロックキャノンの弾丸が消される。

「くっ!!」

キングは後ろに飛び、炎の弾丸を回避するが、

「ほれっ!!」

キングの真上からヒメが大剣を降り下ろす。

「っ!!?」

キングはまた避けるが、ロックキャノンがヒメの大剣によって斬  
れる。

丸腰になったキングに今度はデッドがスカルと共に突撃する。

「そんな単純な攻撃っ！！」

キングはヒメが使う大剣を召喚し構えて迎え撃つ。

「……単純じゃないわよ？」

デッドは微笑みそう言った。

すると2体のスカルが突如別の物へと姿を変える。  
とても巨大な槍へと。

そしてデッドはキングの攻撃範囲外から槍を振るった。  
槍の先端はキングの大剣をピンポイントで破壊する。

私たちはキングを四方から囲んだ。  
こうなってしまうばキングも終わりだ。

「……………こんなことで終わらない。…………俺は永遠を手にするんだ  
っ！！」

キングはぶつぶつと何かを呟いた瞬間、両腕に炎を宿して私に突撃して来た。

「ク口っ!!?」

三人が私の名を叫ぶが、私は落ち着き左目に炎を灯し、同じように右手に炎を宿す。

キングの黒い炎、私の青い炎、2つの炎が重なる。

私はキングの攻撃を避け、キングの腹部に炎の拳を叩き込んだ。

「……が……は……っ!!!」

キングは地面に倒れた。

私たち黒き使徒の産みの親であり、裏世界の創造主である存在に勝ったのだ。

「……終わったの?」

マトが言う。

「……………ああ」

私は倒れているキングに話しかける。

「……………キング」

「……………な……んだ……？」

キングは掠れた声で答える。

「何故、表世界の侵食を中断しなかった。そうしていればお前は私をすぐに殺すことが出来たはずだ」

するとキングは空笑いをし、呟いた。

「……………それが、ユキとの……約……束だからな……………」

その声はあまりにも小さく、私はよく聞こえなかった。

「……………すまない、……………ユキ……………」

「おいキング、何を言って……」

私が聞こうとした瞬間、キングは黒い障気となって消滅した。

「キング、お前は一体……？」

恐らく、この疑問は今解けないだろう。根拠は無いが、そう思った。

——パキン！

暗い空にヒビがはいる。

「……………裏世界も消滅か」

キングが消えたことによつて裏世界も消滅する。

『……………消滅？』

私の呟きにマトが反応する。

「……………ああ、そして恐らく私たちも……………」

「……………黒き使徒の私たちも消滅つて訳ね……………」

ヒメが言う。

『……………運が良ければ、私たちは助かるかもしれない』

ユカが言う。

「……………最悪全員死ぬかもしれないわね……………」

デッドが言う。

『……………それが、私たちの運命なのかも……………』

ヨミが言う。

「……………そうなのかもしれない」

ストレンジスが言う。

『……………嫌だよ！！！！！！』

そして、マトが叫んだ。

『みんな死ぬなんて嫌だよ！！私たちだけ、助かってもヤダ！！またクロやヒメたちみんな楽しく過ごしたいよ！！！！』

私の中で、マトは泣いてそう叫んだ。

『嫌だよ、……………ヤダ……………』

マトの声も虚しく、暗い世界は崩壊していった。

「…………マト」

『?…………クロ…………?』

私はマトに自分の言える感謝の言葉を言った。

「今まで、本当にありがとう……」

そして、裏世界は消滅した。

【SIDE ?】

ビュビュビュビュ……ビュビュ

ケータイのアラームを止め、あたしは目を覚ます。

「ふんっ！」

布団から勢い良く出た。

部屋の窓を開け、町の風景を見る。  
そして心地よい風……

「さぶっ！……！」

……ではなく、冷たい風が寝起きのあたしにあたる。

「まだ秋なのに真冬みたい……」

あたしは窓を閉めて支度をするために部屋から出た。

「あれ、マトもう行くの？」

早めに支度を済ませて制服に着替え、玄関で靴を履いてるあたしにお母さんが話しかけてきた。

「うん、ちょっと寄りたいところがあつて」

「そう、今日は寒いからちゃんと暖かい格好するのよ？」

「わかってるよ、マフラーもしてるし」

そしてあたしはお母さんに敬礼して

「では、行つて参ります！」

と言つて玄関を出た。

あたしはいつもの高台に来た。

きれいなその公園を見て、あたしは思った。

あの時のことが嘘みたいだと。

あたしは町を見る。

「なんだか、本当にきれいになってるね」

『当たり前だろ、あの時の町は裏世界だったんだから』

「あれ、クロ起きてたの？」

『ああ』

クロが声を挙げたとき、風が吹いてきた。

——ビュウー！

「寒っ！——！」

あたしは身を縮ませながら言う。

『本当にきれいな町だな……』

クロが呟く。

「うん」

あたしはそう言って改めて町を一望した。

『そろそろヨミとの待ち合わせの時間じゃないか？』

「え？」

クロがそう言うてきたのであたしはケータイで時間を確認する。

「あ、本当だ！急がないと！！」

そしてあたしは急いで待ち合わせ場所に向かった。

——【知っていますか？ - 世界の真実 -】——

—— E N D ——

## 終幕（後書き）

AKI

「AKIです！」

BRS

「ブラックロックシューターだ」

AKI

「いやー、終わったね」

BRS

「終わったな……」

AKI

「最後だし、後書きくらいはたくさん語るか!!」

BRS

「嫌だ、面倒くさい」

AKI

「えーっ!!? いや、せっかく最後なんだし……」

BRS

「まだ番外編が残ってるんだからいいじゃないか」

AKI

「えー、何このやる気ない主人公」

BRS

「いいからさっさと締めろ」

AKI

「はいはい、わかりましたよ。えー、ここまで読んで下さった読者様、本当にありがとうございます！この後も番外編は不定期ながら更新していく予定ですので、宜しくお願いします」

BRS

「以上、駄作者とブラックロックシューターでした」

今まで本当にありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5621v/>

---

知っていますか？-世界の真実-

2011年12月2日18時52分発行